研究紀要

第 21 号

（目　次）

作　品

臨界点のジェットボーイ

スポチャン

（獨協中学・高等学校演劇部上演台本）…… 柳　本　　博 … 1

教育実践報告

人気のない図書館からの脱却 …… 伊　東　由紀子 …（1）

踏査報告

中国福建・江西省訪問記 …… 兼　田　信一郎 …（35）

2005

獨協中学校・高等学校

第9回　高校演劇サマーフェスティバルIN天王洲アイル
2003　上演作品
獨協中学・高等学校　演劇部上演台本
『臨界点のジェットボーイ』

柳本　博

登場人物

朝焼けのジョニー……杉田健介
海鳴りのフランキー……福島　真
地下鉄沿線のマイク……向井裕斗
久　志……塚原　望
健　司……宇都宮成典
真　人……齋藤　渓
グレイト辰郎……伊藤慎悟
光　一……長谷川雄規
剛　……小坂　健
首　領……米内山潤平
部下1……長谷川雄規
部下2……加藤　慧
久志の小学校時代……大山悟史
町　長（小池A作）……加藤　慧
息子　B作……米内山潤平
娘　C子……小池将平
D子……小坂　健

STAFF

演　出……杉田健介
照　明……森川佑介・伊藤慎悟
音　響……今福武士・加藤智之・杉田健介
装　置……塚原　望・福島　真・宇都宮成典・椎名健太
小道具……森川佑介・塚原　望
衣　裳……伊藤慎悟・向井裕斗
制　作……向井裕斗・伊藤慎悟
協　力……田中亮大・笠原正彰・藤田翔平・佐々木　琢
顧　問……柳本　博・笠井淳三

PROLOGUE

サンダーストーム。
叫び声とともに、幕、ひらく。
音、それは雷ではない。
ブロロロロロ。
爆音。

舞台上に流れる三本のサーチライト。
鮮やかに、縦横無尽に自由自在に。
それはバイク軍団のヘッドライトであることがわかってくる。
舞台せましと交錯するヘッドライト。
たくさんのライト。
声、それは単なる叫びではない。軍団のかけ声。

軍　団　ヒューヒュー！

音楽。
軽快にしてヘヴィなロックンロール。
炸裂。
ノリ。
速度。
疾走感。
鉄パイプを振り回しながら、暴れ回る暴走族軍団。
朝焼けのジョニー、海鳴りのフランキー、地下鉄沿線のマイクの三人組。

すると、もう一つのグループも現れる。
彼らの動きを阻止しようとする三人、久志、健司、真人。
しかし、彼らには、力も武器もなく、バイク軍団に蹴散らされる。

開幕早々、後発の正義の味方組は去る。
邪魔する者は早や存在せず、軍団はセリフに入る。

ジョニー　スピード。
フランキー　おお、神が与えてくれた。
マイク　目もくらむような、
ジョニー　快感に打ち震えるような、
フランキー　スピード。
マイク　日本語で速度。
ジョニー　風のにおい。
フランキー　春まだ浅き草原に頭から飛び込み、
マイク　あの青臭いにおいを全身でかぐような、
ジョニー　かと思うと匂いの頂点を突き破り、
フランキー　無の状態になるような、他の何ものにも替えがたい風のにおい。
マイク　英語でいえば、スメル・オブ・ザ・ウィンド。
ジョニー　スピード。
フランキー　それは俺の命。
マイク　スピードっていっても、解散したクセにチャリティーを理由にしつこくまた再結成する、
ジョニー　あのアイドルグループじゃ、
ゾク全　ないぜッ！
ジョニー　何回再結成すりゃ気がすむんだッ！

久　志　そんなことは、
警備全　分かってるよッ。

正義の味方もやむなく鉄パイプなどの武器を持って再登場。

ジョニー　ヒロ。
フランキー　今井エリコ。
マイク　上原タカコ。
ジョニー　他1名。
警備全　しつこいって。

交錯する鉄パイプ。

ジョニー　ウォーッ。
フランキー・マイク　いやっほーい！
ジョニー　俺たちは、キメるときはキメるぜ。
フランキー　あの真夏の風よりも速く、
マイク　さんさんと照りつける太陽の光よりも速く、
ジョニー　あの、人類がなしとげたという最速のスピード、
ゾク全　時速490キロに向かって突き進むぜッ。
久　志　ホラを吹くのもたいがいにしな。
健　司　そんなスピード出せるワケねぇだろ。
真　人　月の光が笑ってら。
ジョニー　何ごとも気合いよ。
フランキー　できねえことなんざわかってら。
マイク　でもな、そこをめざすのが、
ゾク全　男ってもんじゃねえか。
久　志　だからそんな気休めじゃなくて。
健　司　もっと実体のあるリアルなことをちゃぁんと、さ。
真　人　言ってくれなきゃ。
警備全　人生は短い。
ジョニー　短い人生どこへ行く。

照明あおり、光、交錯。
アクション。

久　志　次の町内対抗！
ゾク全　チキチキチャリンコレースは！
一　同　俺のものだ！

ゾク、強い。
決まる。
二手に分かれる。
出てくる小池コンツェルン。

町　長　ただいまより、小池コンツェルン主催・ご町内縦断チキ

チキチャリンコレースを開始する。肉体を駆使して、究極の耐久レース。みんなガンバレッ！

C子D子　がんばってえっ！

息　子　よーい！

一　同　ころがそうぜっ。

ドキューン！

ハンドルを持って動いていく一同。

一同、リンリンと鳴らしてからこぎ始める。

協力しあうジョニーたち軍団。

ジョニー　ウォーッ！

フランキー　おらおら。

久　志　うあっ。

マイク　とーりゃ。

健　司　ずあーっ。

真　人　やだー。

グレイトと久志たちも協力。

グレイト　行くぜ！

久　志　よしっ。

一気に駆けていくジェットボーイたち。

トップ集団を形成するグレイト、久志、ジョニー。

グレイト　行くぜ！

久　志　おうっ。

グレイト　一足前進！

久　志　おうっ。

グレイト　二足加速！

久　志　ジェット噴射！

グレイト　反応反射音速光速！　ぬおおおおおおっ！

去っていく。

久志とグレイト、ストップモーション。

久　志　人には何か特別な才能があるんじゃないかって思える夕方がある。

黄金色に輝く夕陽を見つめながら、僕には、僕にしかない才能があるんじゃないのかって。

人より運動能力が優れてるとか、声の質がよくて、持って生まれた声で、人を虜（トリコ）にしてしまうとか。

僕にもそういうことがあるんじゃないのかって、思ってた。

グレイト　行くぜ。

久　志　オウ！

ストップモーション、溶け、2人、光速で去る。

SCENE　1　ゾクの狼藉の数々

入ってくるゾク軍団。
三角の隊形。（▽）
扇の要の位置にリーダーのジョニー。

ジョニー　俺の名前は朝焼けのジョニー。ナイスなマスクにハッピーなボディー。これらすべてのアイテムが朝焼けに照り映えるから。いつしか、誰が呼んだか朝焼けのジョニー。

マイク　ホントは自分で呼ぶように強要したんだけどね。テヘ。

ジョニー　（キッ）！

マイク　スンマセン！

ジョニー　朝焼けのジョニーだ。４６４９（ヨロシク）！

二　人　４６４９！

ジョニー　ＮＥＸＴっ！

フランキー　ネクストねくすと……俺の名前は海鳴りのフランキー。グッドなマスクにファンキーなボディー。海鳴りにピッタリだぜ。

マイク　どこが。

フランキー　（キッ）！

マイク　（どうぞとばかりに手を出す）……。

フランキー　海鳴りのフランキー。４６４９！

二　人　４６４９！

ジョニー　ラ〜スト！

マイク　ラスト、ラスト、俺の名前は地下鉄沿線のマイクだ。

二　人　４６４９！

マイク　え。（言いたかったのに）……。

ジョニー、光線のようなにらみをきかす。

マイク　ごめんなさーい。

ジョニー　俺たちＹＹＸ団は、バイク軍団だ。

フランキー　おう。

マイク　おう。

ジョニー　いいか俺たちは暴走族じゃネェ！　ほれ。（アゴをしゃくる）

フランキー・マイク　じゃねぇ！

ジョニー　俺らは交通ルールは正しく守り、市民の安全をさまたげることなどはない、模範ドライバーだ。

フランキー　耳の後ろでヒュンヒュン鳴る風の音、

マイク　ジリジリと焼けつくような夏の陽ざし、

ジョニー　だけを、それだけをこよなく愛する俺たちだ。

風の音。

陽ざしがジリジリこげつくような擬音。

しばらく味わい、うっとりする3人。

2　人　ジリジリ……ヒュンヒュン……！

ジョニー　気が済んだか？

2　人　オゥ。

ジョニー　暴走族じゃねえ。でも不良だ。悪いことはする。

気弱そうな学ランの生徒（光一）が出てくる。

ジョニー　おっととおせんぼ。

フランキー　とおせんぼぐらいする。

光　一　なんですか。

マイク　金ぐらいとる。

ジョニー　財布出しな。

光　一　……え。

ジョニー　出しな。（腕をブン）

光　一　ハイ。（出す）

ジョニー　（見て）ほう、羽振りがええのう。

フランキー　どれどれ。

ジョニー　ほれ。

マイク　わ、万札。万札やないですか。

ジョニー　もろとくわ。

光　一　困ります。

ジョニー　行け。

フランキー　行かんかい。

光　一　ちくしょう、パパに言いつけてやる。

光一、行く。

フランキー　ざまぁみやがれ、身分不相応なカネなんか持ち歩いてるからや。ねえ、アニキ。

ジョニー　まあな。

フランキー　じゃあ、それ、どうするんでっか。パーッといきまっか。

ジョニー　待て待て、千円札十枚や。（入れる）

マイク　両替でっか。

フランキー　くずしてどないするんでっか！

ジョニー　かさばってしゃあないで。

フランキー　ワル！　悪いでんなあ。さすが朝焼け。

ジョニー　そうだろ、海鳴り。で、地下鉄沿線の。

マイク　へイ。

ジョニー　警察行って落とし物の拾得届だしてこい。

マイク　へい。でも。

ジョニー　でも?

マイク　パパに言いつけられるのが怖いからじゃないですよね。

ジョニー　当たり前じゃ、行きさらせ。

マイク　へイ。

マイク、行く。

フランキー　アニキってば、悪いでんなあ。

ジョニー　でも暴走族じゃねえ。カツアゲはせん。届けりゃカツアゲにはならん。

反対側から真面目そうなブレザー姿の生徒（剛）来る。

ジョニー　とおせんぼ。

フランキー　マタンゴとおせんぼや。

剛　なんですか。

フランキー　携帯ぐらい奪い取る。

ジョニー　ケータイ出しな。

剛　……え。

ジョニー　出しな。（腕をブン）

剛　ハイ。（出す）

フランキー　携帯なんかとってなんか意味があるのだろうか。

ジョニー　行け。

剛　くそっ、ママに言いつけてやる。（行く）

去ったのを見計らって。

フランキー　アニキ、なんか意味あるんでっか。すぐ解約されちまいまっせ。

ジョニー　だいじょうぶじゃ。

ピポパ、パポピと押す。

場内に流れるおなじみのアナウンスをフランキーが。

アナ　こちらはＮＴＴドコモ留守番電話です。ピーと鳴りましたら用件を……。

ピッと切るジョニー。

フランキー　悪いアニキ、どしたんでっか。

ジョニー　これをやな。録音しなおすんや。（再びピポパ。アナウンスの声色で）こちらはＮＴＴドコモ留守番電話サービスセンターです。ピーと鳴りましたら用件の替わりにピーちゃんピロピロと入れてください。

フランキー　なるほど。

ジョニー　これでヤツの留守電にはピーピーピロピロうるさいこと

なるで。

フランキー ワル！　悪いでんなあ。

ジョニー せやろせやろ。

マイク、戻ってくる。

マイク ただいま、戻りました。

ジョニー ご苦労だがなマイク。

マイク ハイ。

ジョニー これ、最寄りのＮＴＴに届けてくれ、落とし物だと言ってな。

マイク ヘイ。でも。

ジョニー でも？

マイク パパに？

ジョニー 違う。

一　同 ウン。（なぜか固い決意でうなずく）

再び、三角形。

ジョニー 俺たちゾク軍団は、バイク軍団だ。

フランキー おう。

マイク おう。

一　同 でも決して暴走族じゃねえッ！

小池の息子、登場。

息　子 やめんか！

一　同 誰じゃ！

息　子 僕じゃ！

ジョニー あ、坊っちゃん。

息　子 「あ、坊っちゃん」じゃないぞ。違う、おまえらは暴走族じゃない！

一　同 そうだ！

息　子 おまえらが乗ってるのは、

一　同 俺らが乗ってるのは、

息　子 自転車じゃないか！

三人、答えるかわりにハンドルについたベルをチリンチリンと鳴らす。

そう、「スサノオ」の手法。

彼らが中坊（ちゅうぼう）のチャリンコ部隊であることを示して、長いオープニングは終わる。

息　子 パパー。

小池パパ、二人の娘を連れて現れる。

ジョニー　これはこれは町長の小池さん。

町　長　小池コンツェルン会長、そしてこの町の町長、小池栄作です。

息　子　息子のB作です。

C　子　小池C子で〜す。

D　子　小池D子でェす。

息　子　全員あわせて小池コンツェルン。

シャキーン。

息　子　なおれ、休め。

町　長　と、そういうわけで次の夏祭りに行う「小池コンツェルン主催・ご町内縦断耐久自転車レース」。

子供たち　通称チキチキチャリンコレース。

ジョニー　知ってますよ。俺たち賞金狙いですからね。

フランキー　アニキ、そんなにすごいんでっか。

マイク　俺たち知らなかった。

ジョニー　豪華賞品が待ってるんでぇい！　ウォーッ！

フランキー　豪華賞品？

マイク　それ何？

C　子　まさかあたしたち？

D　子　やだわ。

町　長　違うわい。

息　子　ってことは僕？

町　長　違うって。（バコッ）スピードの神髄・極致を見せてくれた人には賞金、なんと三百万円！

フランキー　三百万？

マイク　すっすごい。

息　子　ご町内のレベルでは史上最高。

フランキー　うわ、すげえ。

マイク　アニキがいるからこっちのもの。

ジョニー　そして、こういうことでしたよね。

町　長　B作。（促す）

息　子　発表されるやいなや、各地でセンセーションを巻き起こした「小池コンツェルン主催・ご町内縦断耐久自転車レース」。エントリーされた選手の数は、夏休みの高校生クイズの参加者にも達しようかという数。しかし、そうとばかりも言っていられない。ただのレースじゃないのです。

町　長　ふあっはっはっはっ……。

一　同　はははははは。

笑いながら去る一同。

SCENE 2 スピードの彼方

それまで物陰に隠れていた健司、現れる。
軍団がいなくなったことを確認してから、口笛を吹く。
ヒュー。
手招きすると出てくる真人と久志。

真人 いなくなった？
健司 ああ、行っちまったぜ。
久志 そのようだな。
真人 （虚空にパンチ）畜生、レースの前にかましてやろうと思ってたのに。
健司 おいおい、さっきまでブルブル震えてたんじゃねえのか。
真人 なんだよ、その言い方。
健司 俺は事実を言ったまでだよ。
真人 なんだとー。
久志 ほらほら、仲間割れはよせよ。立ち向かう相手が違うだろ。
真人 ウン、あんな奴らに、いい思いなんかさせるもんか。
健司 そうだな。ブイブイブイブイうるさいもんな。
真人 でしょでしょ。だからこう、僕の必殺の……。
健司 必殺の、何？
真人 エ。
健司 なんだよおまえの必殺って。
真人 いいだろ、いま考え中。
健司 なあ、久志もそうは思わない？
久志 ウン……。
健司 なんだよ、元気ねえなあ。
真人 ノリが悪いよ。奴らをぶっ飛ばすって話がまとまったってのに。
久志 だから心配だろ。ただのレースじゃないんだぞ「小池コンツェルン主催・ご町内縦断耐久自転車レース」は。
健司 どこが。俺の鍛え上げたハガネの力で。（腕を曲げる）
久志 まあな、俺たち自転車愛好会が負けるわけにはいかないもんな。
健司 そこで登場する、俺様のマッスルマッスル。

健司、上半身のTシャツを脱ぎ捨て、筋肉を誇示する。

健司 ランボー。アーノルド・シュワルツェネッガー。ハルク。
久志 よっ、ちまたで話題のマッスル小僧。
真人 だからおまえ違うんだよ。そうじゃなくて、頭も使うんだよ。
健司 アタマ？
真人 知らなかったのかよ。
久志 最短コースをどうとるかは、やっぱりアタマを使うわけ

じゃん。

真人　そうか。チェックポイントはあっても、いちばん短く戻ってくればそれでいいんだしね。

健司　点と線の勝負ね。

真人　ね、アタマ使うでしょ。

久志、正面を見る。

久志　じつは、あの首領の朝焼けのジョニーなんだけど。

真人　いちばんかっこつけてる奴？

久志　幼なじみなんだよ。

健司　へー、そうなんだ。

久志　でさ、頭くることに、奴ら実はすンげえ頭いいんだよ。

真人　あいつらが？

健司　そうは見えねえ、思えねえ。

久志　行ってる学校どこか知ってる？

真人　どこどこ？

久志　秀才学園だぜ。おー、4科のチョモランマ。

真人　チョモ？

久志　最高峰。

健司　はーん。

久志　通ってる学校が違うんだよ。俺らみたいなドッキリ中・高とは違うんだ。

健司　ネタが決め手。

真人　毎日グキリ。

久志　ドキドキするぜ。

三人　ドッキリ高校。

真人　なんてコピーだ。

健司　こないだなんか、総合学習やるっていうから、何かと思ったら鬼ごっこだぜ。

真人　ウチのクラスなんか、「情報」の授業だからパソコンやるのかと思ったら、糸電話だったぜ。

健司　あ〜、何やってんだ俺たちは。

真人　いいのか、こんな毎日。

健司　よくない！

真人　そうだ！

二人　な！

久志　しょうがないだろ、ここしかうかんなかったんだから。しかも補欠だったし。だけどな、勝負はこれからだ。大学入試だよ。

健司　（がくんと首をたれ）もう決まってるような気もするけどな。

真人　俺たちだってだれも好きこのんでアホやってるワケじゃないんだよ。いい成績とりたいよ。でも分かんないんだよ。授業中、よけいなこと考えちゃうんだよ。

健司　K1（ワン）のこと。

真　人　ゲームのこと。
健　司　お気に入りの筋肉のこと。
真　人　お気に入りの女子校のこと。
健　司　寝ること。
真　人　寝ること、そうだね、多いねえ。
健　司　でしょでしょ。
真　人　ま、寝ることってのは考えるっていうより、実行しちまうことなんだけどね。
久　志　おまえ、三角関数と関係代名詞の違い分かるか。
真人・健司　（同時に訊って）分がんね。
真　人　三角関係なら知ってる。
久　志　アボガドロ数とエンゲル係数ってどう違うんだ。
真人・健司　（同時に訊って）知んね。
久　志　高見盛と女盛りの違いは。
真人・健司　（同時に訊って）アイ・ドン・ニョ〜。
久　志　ネギヌタとヘビメタの違い分かるか？
真人・健司　（同時に訊って）なんだそりゃ。
グレイト　そんなことも分からないのかい！

「必殺！」でいえばトランペットのファンファーレが鳴る感じ。いきなり登場するさすらいの素浪人高校生・グレイト辰郎。

久　志　だ、

三　人　誰だ！
グレイト　正義なき力は無能なり、力無き正義もまた無能なり。聞こえる、女、子どもの叫び声。行くぜ、火の中、水の中。さすらいの素浪人高校生・グレイト辰郎！

ポーズ。

グレイトは、そのネーミングのとおり、グレイトな存在感をひけらかしている。
スタイルは当然、ギザ付きの黒革コートに帽子、そして、眼帯。

久　志　グレイト、帰ってきたのか。
グレイト　ああ、次のレース、エントリーすっぜ。
久　志　助かったよ。おまえが来てくれりゃ百人力だ。
グレイト　俺には分かるぜ、世界の平和のために、いろんな場所をグルグル巡回している俺にはな。なんでも訊いておくんなはれ。
健　司　誰この人。
真　人　かっこいいかも。
健　司　そうかあ？　ただの時代錯誤のような気もするけど。
グレイト　ギク。
久　志　こいつも幼なじみなんだ。なんでも知ってるぜ。
真　人　なんでも？
久　志　アタマのよさ、披露してくれるぜ。

健　司　じゃあねえ、じゃあねえ。

真　人　６６×３２１は。

グレイト　人を電卓扱いすんなって。２１１８６だ。

健　司　すげえ。

グレイト　ははは、俺の中の体内電卓がかちかち音を立てたぜ。

真　人　じゃ、９０×５０は。

グレイト　つまらねえな、４５００。

健　司　よし、ベネズエラの首都は。

グレイト　つまらねえって。カラカスだ。

健　司　文句言いながらも正解が出てる。

グレイト　ははは、俺の体の中の体内インターネットが光の速度で反応してくれたぜ。いや体の中の体内ってヘンだな。

久　志　分かったか。彼に手紙を。

真　人　そうか、こないだあのポストに入れといたってのは。

グレイト　届いたってことよ。

真　人　じゃ、つまり、この人が。

久　志　そう、メシア、救世主だよ。この世を救う天才なんだ。

グレイト　はっはっはっ。おっと僕、照れまチュ。

久　志　な。こんくらい奥ゆかしいんだよ。たしかに俺たちはバカだよ。街を荒らし、狼藉の数々を働いているゾクの軍団を止め、レースの勝者になることもできない。でも、体力だけはつけて、自転車愛好会として、そのアイデンティティーを示そうと思ってる。

グレイト　そうなのか。

久　志　俺たちバカだからさ。

グレイト　何か関係あんのか。頭が。

久　志　あるんだよ。（足で地面に線を引く）こっからがおまえで、こっからこっちが俺たちだ。

真人・健司　（同時に訛って）んだ。

グレイト　何ガキみたいなことやってんだよ。

久　志　通知票をもらうたび、ドバドバと真っ赤な血にまみれなきゃならない俺たちの苦しみなんて永遠に分かりゃしないんだって。

グレイト　そんなことないって。

久　志　あるって。おまえみたいな天才児と友達だった俺らが、どんなにみじめだったか。

真人と健司、膝を抱えて座っている。

久　志　おいおい、どうしたんだよ。

健　司　どーせ俺たちなんか。

真　人　頭も悪いしさ。

久　志　なにいまさら気づいてんだよ。

グレイト　そうだよ、少しずつでも努力していけばさあ。

健　司　気休めはよしてくれよ。

久　志　いや、努力って大切だぞ。

グレイト　そうそう。

真人と健司、顔を見合わせる。

健　司　じゃ出すぞ。

真　人　ウン。

健　司　……おまえ出せ。

真　人　いいの。

健　司　ああ。

真　人　じゃ、6×7（ろくしち）。

健　司　6×7。いきなり6×7か。そう来なすったか。

グレイト　おい、たかがかけ算九九だろ。

久　志　待て、こいつらには。

真人と健司、悲惨なまでに真剣。

真　人　ゴメン、ちょっと難しかったかな。

健　司　いいよ。6×7だろ。

グレイト　（久志に）こやつまさか考えてるのか。

健　司　よし、行くぞ。

真　人　どうぞ。

健　司　42だ。

真　人　うーん……（こっちも考えて）正解だ。

健　司　よぉっしゃぁっ！

真人と健司、満面の笑みで握手。

久　志　凄い！

グレイト　スゴイ！

真人と健司、じとーっと二人を見る。

真　人　じゃ、俺たち。

健　司　これで。

久　志　ってどこ行くんだ。

二人、ぴたっと止まる。

真　人　……そうだね。

健　司　どこ行こうか。

真　人　どこ行く？

二人、ケータイを確かめる。

パタッとすぐ閉じる。

久　志　誰からも着信なんかきてないだろ。

二　人　いや。

久　志　誰から。

二　人　（互いを指さす）

久　志　会ってんだから、こうして。どうして、必要なの。

二人、無言のまま去ろうとする。

久　志　あのコンビニだったら、立ち読みがすぎるって出入り禁止だって。

二人、また止まる。

真　人　また新しい店、開発したんだ。

健　司　何時間いても怒られないんだ。

久　志　……おまえらねぇ。

グレイト　虚しくないのかね。

健　司　（去り際に）ところでさ、おまえらも幼なじみってことは、ジョニーもか。

グレイト　ああ、朝焼けのジョニーもだ。

朝焼けのジョニー、登場。

ジョニー　そういうことだ。

真人・健司　で、出たー！（去る）

ジョニー　なんだよ、人をオバケみてえに扱いやがって。

SCENE　3　ニカニカ笑うな

向かい合うジョニーと久志。
ジョニー、グレイト辰郎に目をやる。

ジョニー　なんだよおまえは。

グレイト　俺だよ、二科の辰郎だよ。

ジョニー　二科？

辰郎(グレイ)　そうだよ。

ジョニー　ニカ？　なんざんしょ。

辰　郎　二科だよ2科。

ジョニー　ニカニカ？

久　志　覚えてないのか、四科のお方は。

ジョニー　忘れましたね、はてさて、なんのことやら。

辰　郎　二教科の俺たちは、ただひたすらおまえが羨ましかった。

久　志　夏期講習のときだって、四教科のおまえは午後まであった。

辰　郎　俺たち二科は午前中で終わりだった。

ジョニー　そんだけかよ。それがどうしたってんだ。

辰　郎　四科はキラキラ輝いてた。

久　志　女の子も小六なのに、中三並みに発育ばっちりの子もいた。

辰　郎　二科には男しかいなかった、ような気がするぐらい暗かった。気のせいかもしれないけど、天井の電灯も暗かった。

久　志　あれボク確かめたけど、四科は100ワットなのに、二科は便所に最適20ワット。

二　人　あ〜！

ジョニー　怖いね。

辰　郎　黒板だってボロボロ。

久　志　書いてるとあちら側に突き抜けた。

ジョニー　青空教室かよ。

久　志　最初は僕たちだって、より多くの私立中学受けることができるように四教科とってた。

辰　郎　そうしてより偏差値の高い中学めざしてた。

久　志　だけど、ある日、突然、塾の先生から宣告されるんだ。

辰　郎　死の宣告を。

ジョニー　そんな大げさな。

辰　郎　（先生になる）「久志くん、きみはどうも理科社会が伸び悩んでるようですね」

久　志　はあ。

辰　郎　「もちろん算数国語のほうが配点も高いですから、きみが本当に私立を受けるなら、二科になさい。で、お家のかたと相談していらっしゃい」

久　志　僕の人生の中で、初めての挫折だった。

辰　郎　「四教科、幅広く勉強するより、主要科目の中の主要科目、算数国語の二教科にしぼりましょう。しぼって全力で頭をふりしぼりましょう」

久　志　僕の人生の中で、初めての絞り込みだった。

辰　郎　平たく言えば差別だぜ。

二　人　あ〜！

ジョニー　だからそんな大げさなことかよ。

辰　郎　こういう経験をしてた。そりゃあそうだ。俺たちには絶対に越せない壁が、

久　志　ラインが、

二　人　あった。

久　志　それが二科四科だった。

ジョニー　だから、そんな時代のことなんか忘れちまったって。

辰　郎　思い出せ、このハチマキを。

久志、シュタッと出す。

一　同　「必勝」！

辰　郎　そうだ。この必勝ハチマキが汗と手垢で真っ黒に汚れるまで、俺たちは朝から塾に通った。

久　志　おまえらはエリートの、大学受験で言えば花の国公立を

狙うような四教科。俺たちゃみじめな、二教科だった。

辰　郎　すンげぇあからさまな、露骨な指導方針だったから、四科は全員、ピカピカ輝く金ボタン。

ジョニー　その点おまえらはくすんだ銅ボタン。

久　志　俺らは立ちすくんだ。

辰　郎　銅。

久　志　どー。

ジョニー　銅。

久　志　金と同じと漢字では書くけど、なんのこたない、即戦力から見放された差別待遇だった。

辰　郎　（四科生になる）やーい、二科のバカ。

久　志　二科のバカ。

ジョニー　ニカニカ笑ってんなよ！

二　人　（シチュエーションを忘れて喜ぶ）おおっ！

次第にジョニーにも過去の記憶が鮮やかによみがえってくる。架空の縄で二人を縛りあげ、自分はムチを持つことになる。

ジョニー　おまえら国語と算数しかできねえんだろ。

久　志　それだけで十分だと思った。

辰　郎　それすらも十分大変だった。

ジョニー　そーだねー、きみたちに理科の問題なんか出してもダメだよね。アレ、でもおかしいぞ、小学校ではみんな共通に勉強してんだもんねぇ。きみんとこ塾ではやってなくても、学校には理科社会あんでしょ。

二　人　ああ。

ジョニー　そうだよね。みんな同じことやってるはずなんだからね。じゃ問題出すよ。条件の悪い職場のことを呼ぶ3Kって何？

久　志　クルマ。

辰　郎　（なぜか英訳）カー。

久　志　クッキー。

辰　郎　（またも英訳）クッキー。

久　志　コップ。

辰　郎　カーップ。

ジョニー　違うし！

二　人　エ？

ジョニー　しかも全部Cだろが。

辰　郎　正解は。

ジョニー　暗い、汚い、危険。

久　志　あ、そっか。

辰　郎　オッケー。次、来いやー。

ジョニー　日本国憲法の三大原則は。

二　人　暗い、汚い、危険。

ジョニー　（ムチをバシッ）うりゃっ。

二　人　アーウッ！

ジョニー　そりゃ3Kだ。不正解！
久　志　次！
ジョニー　非核三原則は。
二　人　汚い、危険、暗い。
ジョニー　（ビシッ）！
二　人　アーウッ！
ジョニー　駄目駄目、順番替えてもダメ。
辰　郎　くそー。
ジョニー　あ、分かったぞ。三つ答えがあるからいけないんだ。おまえらボケちゃうもんな。な！
久　志　こ、怖いっス。
ジョニー　おーし、答えが一つしかないの出すかんな。「くらい」って言ったら殺すぞキサマ。（ビシッ）！
二　人　アーウッ！
ジョニー　江戸幕府をつくったのは？
久　志　エドさん。
ジョニー　鎌倉幕府をつくったのは？
辰　郎　鎌倉さん。
ジョニー　違ぁ〜う、徳川家康に源頼朝。
久　志　おいコラ、じゃーエドさんは何したんだよ。
辰　郎　鎌倉さんもだコラ。
ジョニー　知らねえよ、そんなヤツ。（ビシッ、ビシッ）
二　人　アーウッ。
辰　郎　はあ。
ジョニー　つまり社会常識が欠けてるんだね。二科四科の問題じゃないんだね。次、リアス式海岸を示せ。
久　志　今度は本格的「社会」だ。
ジョニー　そういうこと。どうだ、リアス式。
辰　郎　その前にやることあるんじゃないのか。

ジョニー、縄を切る。

二　人　フー。（手首を押さえたりして）
ジョニー　示してもらおうか、リアス式。
辰　郎　任せろ、とうりゃっ。

全身で変な海岸線を示す。すこぶる演劇的だ。

辰　郎　こんなん出ました。（息を切らし）はぁっ……はあっ。どうだ。
ジョニー　ブー。
久　志　行くぞ。（ちまちました動き）
ジョニー　ひきこもりかよ。
久　志　うほっ。（へこむ）
ジョニー　こうよッ。「出はいりの多い複雑な海岸線と急斜面の崖が特徴の海岸」。これぞリアス式。

実演する。
思わず、場内大拍手。

辰　郎　す、
久　志　凄い。

そして……。

ジョニー　地球の真ん中には何がある。
二　人　おいおい。
久　志　何言ってんだ。
辰　郎　バカ言っちゃいけねえ。
久　志　そうだよ。
辰　郎　そんなの分かるワケねえじゃねぇか。な。
久　志　うん。
ジョニー　そうかあ？
久　志　あ、僕、ちょっと思い出した。
辰　郎　何ッ！
久　志　聞いたことある。
辰　郎　うんうん。
久　志　ま、ま……。
ジョニー　おお。
久　志　……だ、だめだ。
ジョニー　おーぅ。
辰　郎　分かった、マントラ！

大音響のマントラ（仏教のおまじない）、流れる。
袖、奥、舞台のあちこちから、客席からすらも、たくさん出てくるマントラを唱える人々。
小池コンツェルンの面々だ。

久　志　な、なんだ！
C　子　マントラ。
久　志　そりゃ、仏教用語だろうが。
C　子　え？
久　志　あの、ガッデム・オウム真理教で有名になった仏教のおまじない。
C　子　ん？
ジョニー　駄目駄目、不正解。

小池たち、ピタッと止まる。

C　子　解散。
D　子　逃げロー。

一同、去る。

久　志　なんだなんだ。あいつが指揮をとってるのか。
辰　郎　そうみたい。
久　志　大変だろうな。
辰　郎　ああ。……って何が。
久　志　ウン。
ジョニー　なに和(なご)んでんだよ、おまえら。そんなことより、地球の真ん中。
辰　郎　だから、マントラ。

また、大音量のお祈り。
また、出てくる。
今度は全員下着姿の白装束。

C　子　最高ですかー？
D　子　最高でーす。
久　志　な、なんだ？
C　子　最高ですか？
D　子　最高でーす。
久　志　やめ、やめ！　なんじゃそりゃ。全然最高じゃないよ。それにそのネタ、どう考えても古いぞ。去れ。
C　子　解散。
D　子　逃げろー。

一気に去る。

ジョニー　おまえだおまえ！　元はといえば、間違いを正さないおまえ！　おかしかねえか。なんで繰り返す？
辰　郎　何が？
ジョニー　おまえがおかしなこと言うから、必ずおかしなのが出てくるじゃねえか。おかしいぞ。
辰　郎　おかしいね。
ジョニー　おまえが言うなよ。
辰　郎　じゃ、どうすりゃいい？
ジョニー　答えろ。ちゃあんと答えやがれ。このヨゴレ。
辰　郎　なんだと。
ジョニー　だろうがよ。
久　志　まあまあ。
ジョニー　じゃ答えろ。地球の真ん中にあるのは。
辰　郎　……マントラ。

大音量のお祈り三たび。
また、出てくる。
今度は全員半裸。

小　池　きゃっほーい。
ジョニー　去れ！

一同、去る。

ジョニー　なんだったんだ。

久　志　新興宗教から、原始時代の宗教まで表現したつもりなんでしょう。

ジョニー　もういいから、やめとけ。真面目に考えろ。

久　志　……んとねー、んとねーえー。……。（頭蓋骨を抑える）ぬー。

辰　郎　どうした。ムツカシイこと考えると頭いたくなんのか？

久　志　……はっ。

辰　郎　おっ、蘇生したな、よみがえったな。

久　志　んとねー、問題。

辰　郎　ハイ。

ジョニー　ってなんでおまえが問題考えるんだ。

久　志　もっと分かりそうなの云ってよ。

ジョニー　ああ。次の問題、「ゲームの種類を言え」

一瞬の沈黙のあと。

二　人　（挙手）ハイハイハイ！

久　志　プレステ。

辰　郎　プレステ2。

久　志　セガサターン。

辰　郎　ニンテンドー64。

久　志　ドリームキャスト。

辰　郎　ゲームボーイ。

久　志　ゲームボーイアドバンス。

辰　郎　ポケモン。

久　志　テトリス。

辰　郎　マザー。

久　志　サカつく。

辰　郎　首都高バトル。

久　志　テニスの王子様。

ソフトの種類まで、楽しく必死に答えているうちに、いつのまにかジョニーはいない。

久　志　あれ、いない。

辰　郎　どこ行った。

久　志　うん。（キョロキョロ）

辰　郎　なるほど、この誤魔化し方。

久　志　さすがは四科。

どうしても四科礼賛になってしまう二人なのであった。

久　志　でもな、辰郎。

辰　郎　え。

久　志　じつは僕、宣告されて二科になったわけじゃないんだ。

辰　郎　え。

久　志　じつはな。夏期講習のとき、矢印があったんだ。

辰　郎　矢印？

久　志　うん。でな、それにそって歩いていくと、あかずの間があったんだ。

辰　郎　なんで矢印なんだよ。

久　志　僕、矢印があると、そっちのほう行っちゃうんだよ。

SCENE　4　なぜバカになったか？

回想シーン。

久志の姿かたちは別キャストに変身。

あかずの間にやってきた久志、しばしたたずむ感じ。

そこへ、音楽とともに現れる怪しい三人組。久志を取り囲む。

久　志　なんでこんなところに？

部下1　フハハハハハ、ようこそ。

部下2　どうでェ、俺らの仲間にならねぇかッ。

久　志　だから妙な矢印が。何者だッ。

首　領　フフフハハハハ、我々はＹＹＸ団だ。

久　志　おのれ、怪しい奴。名を名乗れッ。

部下2　お前、聞いてなかったのかよ。ＹＹＸ団だよ。

久　志　ＹＹＸ？　何だそれ。

首　領　Ｙ。（の形を全身でとる）

部下1　Ｙ。（の形を全身でとる）

部下2　Ｘ。（の形を全身でとる）

首　領　フフフフフ、どうだ、ＹＹＸ団だ。

部下1　怖いだろ。

部下2　まいったか。

久　志　なんだそりゃ。

部下1　プロフェッサー、ビビッてませんぜ。

部下2　（外国人ふうに両手を広げている）珍しい奴だ。

部下1　やめやしょうぜ。こいつ、頭が悪い。

首　領　フフフフフ、よし、入団テストを始めるか。

部下1〜2　おうッ。（位置につく）

部下2　プロフェッサー、入団テストの隊形、整いました。

首　領　ご苦労。では第一問、ある日、太郎君はお母さんと遊園地に来ました。さて、花子ちゃんの体重は何キロでしょう。

久　志　誰だよ花子ちゃんて。

首　領　さぁ、答えてみろ。カッツッカッツッ。

部下1　（発見）あ、花子ちゃんがいません。

部下2　（驚愕）し、しまったぁッ、迷子になったか。

久　志　どこにいる。もともといないじゃないかッ。
首　領　そーだ。迷子センターに連絡だ。さがせッ。

ＹＹＸ団、散開。一人取り残される久志。

久　志　（今度こそ何だろうと首を傾げる）……

一同、またやってくる。

首　領　フフフフ、ＹＹＸ団。
久　志　待て、一人足りないぞ。

確かに。首領と部下1、顔を見合わせる。

首　領　フフフフフ、ＹＸ団だ。
久　志　いきなり名前を変えるなッ。

部下2、遅れてくる。

部下２　す、すいません。花子ちゃん、お母さんと一緒に帰っちゃったみたいです。
久　志　何だ、そりゃ。
首　領　フフフフ、ＹＹＸ団。
久　志　元に戻すなッ。
首　領　そして君が入ればＹＹＸＸ団になる。
部下１　どうだ簡単だろ。
部下２　ワクワクするだろ。
首　領　どうでぇ、俺たちの仲間に入らねぇかい。
部下１　ねぇかい。
部下２　かいぃぃぃ。

と、三人、ウィーン少年合唱団になる。
決まった、と満足げな表情になった瞬間、

久　志　断る。
首　領　（愕然）な、なぜだッ。
久　志　だって、得体の知れない人たちの仲間になっちゃいけないって言われたもん。
首　領　誰に。
久　志　ママに。
部下１　そりゃそうだ。
部下２　おまえが納得してどうするッ。
部下１　すいません。
部下２　ママだとぉ、ハハーン、さてはおまえマザコンだな。オッパイ飲んでんだろー。
部下１　ウッハーイ、乳もめ乳もめ〜イッ。

部下1〜2　ババババブ。

首　領　バカタレーッ。（首領パンチが炸裂する）

部下1〜2　うひゃー。

部下2　バカタレって何？

部下1　バカのたれだよ。

部下2　ふーん。

久　志　きみたちいつまでもやってれば、僕は帰るから。

首　領　待てぇーい。君の好きな矢印はもうないよ。

久　志　あれ、ない。

首　領　我々は得体の知れない集団ではなーいッ。

部下1〜2　ウンウン。

首　領　ネプチューンでもなーいッ。

部下1〜2　ウンウン。

首　領　人数の足りないドリフターズでもなーいッ。

部下1〜2　ういーっす。

首　領　見たところ、その冴えねぇツラ、オドオドした物腰、シャキーッとしねぇ態度。

部下2　しかもマザコン。

首　領　おまえ、自分の人生に、一切、なんらの自信も持てねぇんだろう。俺らの仲間になって、人生に自信を持って、肩で風切って歩いていかねぇかいッ。

部下1〜2　いかねぇかいッ。

久　志　よ、よく分かんないんですけど。

首　領　三人合わせてＹＹＸ団、ワァーオッ。

一　同　ワァーオッ。（手を振り上げる）

久　志　それは分かりました、もういいですよ。

一　同　おう。（下ろす）

久　志　大体、すべての団体とか組織には、目的ってもんがあるでしょ目的が。サッカー・チームはサッカーする、俳句のサークルは俳句を詠む。なんなんですか、ＹＹＸ団って。

首　領　単純なことよ。昔なつかしいＴＶ番組を見て批評しあうこと。

久　志　それだけか。

三　人　（胸を張って）そうだッ。

久　志　帰る。

三　人　（ドテッ）……！

首　領　待てぇーいッ。おまえは簡単にそれだけと言うが、果たしてそうかな？

部下1　シンプル・イズ・ディープ。

部下2　単純こそ深い。

部下1　昔の番組は深かった。

部下2　鋭かった。

首　領　我々のノスタルジーを刺激する。

音楽、高鳴る。

部下2　出たな、キン肉マン。
首　領　マスクを脱げッ。
部下1　よくマスクだと分かったな。
首　領　でやーッ。（と部下1を投げ飛ばす）
部下1　ダメです。あたしもうダメですコーチ。
首　領　負けるなヒルむな岡ひろみ。
部下2　おっほっほっほ。
首　領　お蝶夫人に勝つんだ。エースをねらえ！
部下1　とぅッ！
部下2　あッ。
部下1　見えない。どうなったのあたしのスマッシュは。
首　領　（二本指を立てる）ふんっ。
部下1　Vサイン？　ということは勝ったの？　勝ったのねコーチ。
首　領　うんにゃ。
部下1〜2　え？
首　領　二位だ。
部下1　えーい、まぎらわしいんじゃい！（飛び蹴り）
部下2　この、手がギュイーンと伸びる特異体質め！（こっちも飛び蹴り）
首　領　（倒れながら）名前……知らないのかよ、ルフィーだよ。

首領、倒れる。

二人並ぶ、部下1と2。

部下1　飛雄馬よ、行くのじゃ、あれが巨人の星じゃ。
部下2　父ちゃん、俺は野球ロボットなんかじゃないッ。
部下1　何を言うかッ。
部下2　俺だって、野球以外の遊びがしたい。
首　領　飛雄馬。
部下2　姉ちゃん。
部下1　えーい、ガラガラドッシャーン。（ちゃぶ台をひっくり返す）
部下2　バイちゃ。
部下1　どこへ行くスッパマン。
部下2　立て、立て、立つんだジョー！
部下1　おしっこジョー。
部下2　違うジョー。
部下1　（バイキンマンになる）これで終わりだアンパンマン。シャキーン。
部下2　あ、水鉄砲。
部下1　（水鉄砲を打つ）ドピュドピュ。
部下2　うわぁー、顔が濡れて力が出ない！
首　領　（バタ子さんになる）アンパンマン、新しい顔よ。ヒュルルルル、スポーン。
部下2　元気百倍、アンパンマン！　アーンパーンチ！

部下1　バイバイキーン！（キラリーン）
部下2　ドラえもーん。ジャイアンが僕のこといじめるんだ。
首　領　大丈夫だよ、のび太くん。タケコプター。
部下2　え、どこかつれてってくれるの？
首　領　どこでもドア。
部下2　もしやいじめのない世界に。
首　領　たずね人ステッキー。（出す）
部下2　……おまえただ並べればいいと思ってるだろ。
首　領　よくわかったねのび太くん。そして僕もわかったんだよ。きみはのび太くんじゃないね。
部下2　え？
首　領　本物ののび太くんは僕の隣にいるんだ。見ろ、このいじめられやすそうな顔を。
部下1　ノビのび太です。
部下2　そうだよ、僕はスネオだよ。
首　領　しずかちゃんは、ただ、おふろに入っているだけであった。
久　志　なっつかし〜。

やっと緊張がほどける。

首　領　どうだ、分かったね。僕たちのＴＶに対する深い愛情。
久　志　はい。
部下2　名前は。

三人の虚しさを超越したＰＯＷＥＲに取り込まれそうになる久志。

久　志　ハ、ハイ、僕は久志。神宮司久志。
部下2　ついに、ついに名乗ってくれましたあッ。
部下1　よし、分かってくれたな。
首　領　おうよッ、バンザーイ。
一　同　バンザーイ。
首　領　作戦開始だ。

スローモーション。

久　志　こいつらは勉強ができないため、あかずの間に押し込められていた2科の奴らだった。

スローモーションのＹＹＸ団。

久　志　そして、正真正銘のアホだった。

スローモーションでアホを示すＹＹＸ団。

久　志　僕はこいつらの口車に乗って午後からＴＶを観続け、飽きたらゲーム、疲れたらビデオの日々。結局うかったのはドッキリ中学だけだったんだ。

スローモーションで去っていくＹＹＸ団。
現在の久志、出てきてあのころの久志と会話をする。

ヒサシ　元気かい。
久　志　きみはどうだい。
ヒサシ　僕はご存じのとおり、小学校6年のときの僕なんだ。変わりっこないよ。
久　志　そうか、そうだよね。
ヒサシ　で、どうなんだい。きみは。
久　志　まあ、なんとかぼちぼちやってるよ。
ヒサシ　それはよかった。学校のほうはどう？
久　志　エ？
ヒサシ　いや、僕が夏休み、ビデオにうつつをぬかしてさ、勉強しなかったから。
久　志　アホな生活も、慣れちまうとなんとか楽しいよ。
ヒサシ　そうか、そりゃよかった。
久　志　で、いまごろどうしたんだい。なんで僕のところにやってくるの？
ヒサシ　うん、あのときのこと、覚えてるかなって思って。
久　志　あのとき？
ヒサシ　ほら、きみたち三人が決定的に仲違いをしたあのときだよ。

出ていくヒサシ、入れ替わりに辰郎とジョニーが来る。

久　志　あのときなんだ。
辰　郎　いつだよ。
久　志　そうか、思い出したぞ。ほら、あれだ。
辰　郎　だからなんだよ。

小学校時代を振り返る三人がいる。

久　志　思い出せよ、小学校六年の夏休み。俺たちは中学受験の夏期講習をズル休みして、一泊二日の家出という快挙に出た。
辰　郎　そうだ！　そうだった、懐かしいなあ。
久　志　だろ、だろ。
ジョニー　おいちょっと待てよ。
辰　郎　なんだよ、人が十分盛り上がってるところを、水さして。
ジョニー　だいたいな、なんだよ家出って。
久　志　おまえ忘れたわけ？　あんなに盛り上がってたクセに。
辰　郎　そうだよ、ジョニー、いやさシンノスケったら。

ジョニー　本名で呼ぶなよ。朝焼けのジョニーだ。
辰　郎　じゃいいよ。ジョニー、おまえ、「俺こんなにワクワクするの、幼稚園のおゆうぎ会以来だあ」って叫んでたじゃないかよ。
ジョニー　違うよ、おかしくねえか。
二　人　何が。
ジョニー　なんだよ「一泊二日の家出」って。
二　人　ギク。
ジョニー　ことばから言ったって、矛盾があんだろがよ。
二　人　オッホン。
ジョニー　一泊二日なんて、家出とは言わねえよ。
辰　郎　甘いんだよなあ、そこが。
ジョニー　どっちがだよ。
辰　郎　人生に対する読みだよ。
ジョニー　そうかよ。
辰　郎　ズル休みといったら怒られる。
久　志　でも、家出といったら心配される。
辰　郎　同情される。
久　志　そういう計算ずくだったじゃないか。
辰　郎　ずるいこととは知りながら。
久　志　仮病もすべて使いつくした。
辰　郎　「家庭の医学」をひもといて、成人男性しかかからない病気ですら、僕んチのお父さんの研究室から用紙取りだして書いたじゃないか。
久　志　前立腺肥大に糖尿病。
辰　郎　それはフツウ大人しかかからない。
久　志　子宮ガンに乳ガン。
辰　郎　それは女の人。僕たちに子宮はない。
久　志　高血圧で低血圧。
辰　郎　本当ならそんなのありえない。
久　志　両極端。
辰　郎　でも書いたじゃないか。
ジョニー　なんで、なんでそうなったんだよ。
久　志　だから思い出せよ。俺たちは、イヤんなってた。
辰　郎　朝から晩まで続く夏期講習の嵐に。
久　志　でもそこで僕たちは出会ったじゃないか。
辰　郎　すぐにウマがあった。意気投合しただろ。
ジョニー　あ、ああ……まあな。
久　志　いまほどオチャラケた授業態度じゃなかった。
辰　郎　たしかに。俺たちには中学受験っていうハッキリした目標があったからな。
久　志　カリカリカリと、まるで彫刻刀で机を削っているかのように、ひたすら勉強また勉強。
辰　郎　授業が続いて、シャーペンにぎってる右手のひらの腹の部分が黒く汚れて、それまでの夏休みのように、首筋が黒く日焼けするのとはワケが違った。

久　志　テストのとき、その沈黙の教室にふと聞こえてくる、海へ山へと行楽に出かける人たちの楽しそうな笑い声。
辰　郎　聞こえてきて、僕たちはすごくムズムズした。
久　志　え、おまえもか。
辰　郎　うん、僕も。
久　志　一度しかない、今年の夏。
辰　郎　このまま二度とない今年の夏休みを終えていいのか。
久　志　中学にうかるかどうかは別にして。
辰　郎　まったく何もないのはどうにも納得がいかない。
久　志　ひとつぐらいは思い出がほしい。
辰　郎　もうその年にはなかったけど、もし宿題があったら、絵日記に書けるような。
久　志　そういう思い出のひとつがほしい。
辰　郎　そうだ！
久　志　休み時間にそうツレションしながら、言ってたら。
辰　郎　ジョニー、おまえがおっきいほうのトイレから出てきて、「のった」って言ったんだ。
久　志　そうそう。
ジョニー　違う！
辰　郎　俺ものったって。
ジョニー　違うよ、違うって。
久　志　どこが。
ジョニー　トイレ。
二　人　ハ？
ジョニー　だいたい、大きい方のトイレには入れないんだよ。みんなにいろいろ言われるから。俺もツレションに来ただけだ。
辰　郎　なァんだ。
久　志　そっちかよ。
ジョニー　たまたまだ。たまたま聞いちまったんだ。
辰　郎　で、思い出した？
ジョニー　あ、ああ。
久　志　そういう気分だったじゃないかよ。
辰　郎　気分か。
久　志　いつもそうだ。肝心なときになると、思いが僕をとらえ、僕から眠りを奪う。想い出という思いだ。こいつは重い、とってもヘヴィだ。
辰　郎　シャレか。シャレなんか聞いてるヒマないからな。
ジョニー　そうそう、俺たち忙しいんだから。
久　志　いいから最後まで聞けよ。あのときもそうだった。
辰　郎　だからいつだよ、あのときってのはさ。
ジョニー　そうそう、ノスタルジックな気持ちになったって……。
久　志　俺たちは、基地をつくってたじゃないか。
二　人　（ビク）ェ。
久　志　俺たちは秘密基地をつくってたじゃないか。
辰郎・ジョニ　基地！

彼らの中で、さまざまな反応が広がる。

辰　郎　あー。

ジョニー　おー。

久　志　思い出したか？

辰　郎　たしかに、すごく懐かしいな。

ジョニー　合言葉か。

辰　郎　そうだな。

ジョニー　なんだっけな。なんかあったよな。

三人、エロ本を読む。
三人、のびをする。

三　人　あぁ～……。

久　志　飽きたなあ。

辰　郎　飽きた飽きた。

ジョニー　ホント。

久　志　何度目だろ、こうやって同じ本を宝物みたいにして遊ぶの。

辰　郎　結局同じ本なんだから、特に目新しいことはないよね。

久　志　そうなんだよ、そこなんだよ。

ジョニー　どこだよ。

久　志　俺たちは刺激がほしい。

辰　郎　まあな。

久　志　母親のこごと。

辰　郎　親父の愚痴。

ジョニー　うっとうしい家族。

久　志　そんなものからオサラバして、刺激を求めて、俺たちはここに来た。ところがだ。この虚しさはなんだ。

ジョニー　最初はよかったな。

辰　郎　秘密基地をつくろう。誰が言い出したんだっけ。

ジョニー　久志だ。

久　志　憧れてたんだよ、自分たちだけの場所。親も教師もいない、誰からも縛りつけられない俺たちだけの場所。

辰　郎　いろんなモン、持ち込んだよな。

ジョニー　壊れかけて、FMの入らないトランジスタ・ラジオ。

辰　郎　お気に入りの野球カード。

久　志　たくさんのマンガ。

ジョニー　拾ってきたエロ本。

辰　郎　ボードゲームにゲームボーイ。

久　志　ゲーム、ゲーム、ゲーム。

辰　郎　でもなんかこう、ないよなァ、最初のころのトキメキが。

久　志　虚しいったらありゃしない。

音楽。

久　志　小学校二年のころ、クラスでいちばん強いガキ大将がいた。なんでかわかんないんだけど、友達とどっちが早いか競走しだした。そしたらゴールに決めてた電柱のワキで、すべって転んでスネから血を流してた。あわてて僕は自分の半ズボンのポケットからポケットティッシュを出してふいてあげた。そのあとなんでか捨てることができなくて、その血のついたティッシュがカラカラに乾くまで大切にしまっておいた。

辰　郎　小学校三年のころだ。運動場と学校の敷地内を仕切る囲むチェーンがあった。それはちょうどジャンプすると越えることのできる高さだった。バイクと自転車は入れない仕掛けになっていた。そこを通るとき、よければいいのに、いつもみんなジャンプしていた。いつもは越えられたのに、そのときはチェーンに足を引っかけ、僕は地面に叩きつけられた。僕は気絶したらしい。気がつくと、まぁるく僕の顔を覗きこんでる人たちの顔が見えた。僕は恥ずかしくって、何ごともなかったかのように立ち上がった。

ジョニー　だめだね、想い出にひたってたってさ。

辰　郎　シンノスケ。

ジョニー　ジョニーだよ、朝焼けの。

久　志　ジョニー。

ジョニー　このままじゃ腐っちゃうぜ、俺たち。おまえ、二教科になったんだろ。やる科目少なくていいな。俺、四教科だからさ。倍、あるんだ、やることが。

辰　郎　なんだよ、いまさら。その言い方は。

ジョニー　チンタラここで遊んでりゃいいさ。俺は、出てくから。

久　志　シンノスケ。

ジョニー　ジョニーだよ、朝焼けの。

久　志　ジョニー。

辰　郎　おまえ、俺らの友情にひびを入れるつもりだな。

ジョニー　悪いか。

辰　郎　ああ、とっても悪い。いいじゃないか、ただの息抜きなんだ。

ジョニー　おまえも、……だもんな。

辰　郎　え？

ジョニー　じゃあな。（去る）

久　志　どうしたんだ。

辰　郎　いや、なんでもない。ただ……。

久　志　ただ？

辰　郎　いや、なんでもないって。

久　志　そ、そうか。おまえも実は隠れ四科だったんだよな。

辰　郎　エ？

久　志　思い出した、いま思い出したよ。結局俺はみんなに裏切られちまったんだな。

辰　郎　そんなこと言うなよ。昔のことじゃないか。

久　志　ウン……。

二人、出ていく。

入れ替わり、凄いスピードで入ってくるフランキー。

追ってマイク。石を蹴るフランキー。

マイク　どうしたんだよ！

フランキー　なんかバカバカしくなっちまってな。

マイク　逃げンのか！

フランキー　逃げねえよ。

マイク　まさか走らないつもりか。

フランキー　そうだよ。

マイク　それを逃げるってんだよ。どうすんだよ。俺たちが走らないでどうすんだよ！

フランキー　だから走らねぇって。

マイク　まさか、あの女のところに行くのか。

フランキー　そうだ。

マイク　ノブヨのとこか。

フランキー　あぁ。

マイク　のぶよのどこがいいんだ。

フランキー　か、か……。

マイク　顔か。

フランキー　いや、か、か……。

マイク　体か。

フランキー　いや、か、か……。

マイク　かかとか？

フランキー　なんだよかかとって。金だよ。

マイク　マネー。金か、そんなに金が必要なのか。

フランキー　だしょ。おまえ、いまいくら持ってんだよ。

マイク　（あさる）……。（ドイツ語を言う）……。

フランキー　ドイツ語で言うなよ。

マイク　25円。

フランキー　それで何が買えんだヨ！

マイク　うまい棒二本とおつりが来るぜ。

フランキー　虚しくないのか。

マイク　エ？

フランキー　おまえいくつだよ。

マイク　よんしゃい。

フランキー　14歳だろ。人間、12歳を超えたら、もうおしまいなんだ。いつまでも可愛い可愛い言われないんだよ。

マイク　のぶよは何歳なんだよ。のぶよのおもちゃになりやがって。

フランキー　おまえだって金が欲しいだろ。

マイク　そうだよ欲しいよ。でもな、おまえみたいに汚いやり方でもらおうとは思ってないよ。自分の足と根性でゲットすんだよ。

フランキー　それで三百万かよ。俺はのぶよにせびれば五万でも六万でも。

マイク　そういうヤツだったのかよおまえは。（殴る）青春パ〜ンチ！

フランキー　そんなの効かねえよ。現実パ〜ンチ。

殴り合う二人。！ごとにパンチ。

マイク　なんだよおまえのその白目。おまえみたいに汚い白目したやつみたことねえよ。誠実！

フランキー　何言ってんだ、世間の風は冷たい！

マイク　昔に戻れ。純粋！

フランキー　ほざくな、きれいごと！

マイク　人生！

フランキー　計算！

マイク　友情！

フランキー　妥協！

マイク　愛情！

フランキー　偽善！

殴り合いながらスライドして去っていくと、反対側から真人と健司も。

真人　浅はか！　単純！　単細胞！

健司にパンチの真人。

真人　なんでだよ、バカヤロー！

健司　そこまで云うことないじゃん！

真人　だっておまえ、鍛えるっていうからどこ鍛えてるのかと思ったら。上半身だけじゃん。

健司　仕方ないだろ、見た目が肝心なんだから。

真人　そんなこと云ったってな、足が肝心なんだぞ。足が。自転車の選手ってのは、太股がこんなぶっとくて、それで始めてこげるってのに。なんだよ。

健司　分かったよ、悪かったよ。じゃ一緒に鍛えよう。

真人　僕も！

健司　そうだ鍛えろ！

真人　おう！

健司　人類最速のスピード、４９０キロだよ。

真人　そうだね、人類最速の４９０キロだね。

健司　おうよっ。

真人　でもさ。

健司　あん？

真人　それって飛行機だから出るスピードじゃないの？

健司　違わい。人間にだって不可能はないよ。

真　人　そうかなあ。
健　司　いいから細かいこと気にしないで、鍛えろ鍛えろ。
真　人　何で？
健　司　ダンベル！（振る）
真　人　ハードル！（挙げる）
健　司　ヒンズースクワット！（やる）
真　人　うさぎ飛び！（飛ぶ）
健　司　ジャンプ！（跳ぶ）
真　人　フライング！　……それは無理。

必死に自分を鍛えるレース前夜。

SCENE　5　レース

出てくる一同。

息　子　よォーしッ、これで準備運動、ウォーミングアップは終わりましたね。
一　同　オーッス。
息　子　いよいよチキチキチャリンコレースの始まりだあっ！
町　長　ただいまより、小池コンツェルン主催・ご町内縦断チキチキチャリンコレースを開始する。究極の耐久レース。
みんなガンバレッ！
C子D子　がんばってえっ！
息　子　よーい、（ドキューン）
一　同　ころがそうぜっ。

ハンドルを持って動いていく一同。
一同、リンリンと鳴らしてからこぎ始める。
協力しあうジョニーたち軍団。

ジョニー　ウォーッ！
フランキー　おらおら。
久　志　うあっ。
マイク　とーりゃ。
健　司　ずあーっ。
真　人　やだー。
健　司　変な声だすなー。
真　人　だってヤなんだもん。

グレイトと久志たちも協力。

グレイト　行くぜ！
久　志　よしっ。

一気に駆けていくジェットボーイたち。
トップ集団を形成するグレイト、久志、ジョニー。

グレイト　行くぜ！
久　志　おうっ。
グレイト　一足前進！
久　志　おうっ。
グレイト　二足加速！
久　志　ジェット噴射！
グレイト　反応反射音速光速！　ぬおおおおおおっ！

駆け去る。

ジョニー　俺は簡単には負けねえんだよッ！　ウォーッ！

駆け去る。
海鳴りのフランキーと地下鉄沿線のマイク。

フランキー　ぬおーっ。
マイク　すたーッ。
フランキー　やー！　快調！
マイク　たー！　好調！
フランキー　気持ちいいなー。
マイク　あー。
フランキー　気持ちいいとやりたくなるな。
マイク　何をー。
フランキー　行くぞ、得意のモノマネ。（やる）
マイク　似てない似てない。
フランキー　じゃ、次のネタ！（やる）
マイク　これはちょっと似てる。
フランキー　とっておきのネタ。
マイク　またマニアックな。
フランキー　教科書ガイドか。
マイク　それはマニュアルだ。
フランキー　そうかー。
マイク　そうだー。
フランキー　おまえもなんかやれー。
マイク　うん、じゃー、得意の歌。チューブ！（ワンフレーズ唄う）
フランキー　なかなかご機嫌じゃーん。
マイク　そうかい？
フランキー　おーし、こげこげこげーッ。
マイク　うーん、いつもと違うッ。
フランキー　何がッ。
マイク　街ッ。
フランキー　だろッ。

マイク　なんか……。
フランキー　なんか？
マイク　映画の風景みたい。
フランキー　（うまく行ったと微笑む）……。
マイク　あ、可愛い（女）……。
フランキー　（コケそうになる）……バッキャロー、人間なんてチンケなもん見てんじゃねぇッ。こげこげこげー、ひたすら、こげこげこげーッ。

真人、健司たちも来る。
一団となる。
三人のゾクグループVS3人の街を守る少年たち。

ゾク全　ぬおーっ。
警備全　ぬーっ。

音楽だけが高鳴り、いろんな角度からこぎつづける一同。

息子　（実況アナウンス）おっと。ここで後ろから来た二周目のグループが追いついた。
一同　へっへっへ。
ジョニー　ぬおーっ。
一同　ウォーッ。

争いながら去っていくジョニーたち。
こちら、諦めてない健司と真人。

健司　ちくしょ、周回遅れだ。
真人　いいんだよ、先行ってくれても。
健司　どうせなら、一緒に行こうぜ。
真人　ありがとー。でもさ。
健司　ん？
真人　人類最速のスピードって夢の夢だね。
健司　またいつかだよ。
真人　いつか、か。
健司　あ、都庁だ。でっかいなー。
真人　何考えてんのかな、石原慎太郎。
健司　まばたき多いよなー。

スピードを上げる。

真人　両国国技館だ。あ、浅草花やしきだ。お、サンシャイン60だ。
健司　ああ。……ってオイ、ご町内縦断レースだろ。東京都縦断じゃないんだぞ。なんで見えんの。
真人　遠視なんだ。
健司　そうか。

真人　頑張れよー、ロボコップみたいな動きの高見盛。

健司　誰だよ、それ。

真人　おっ、中村俊輔だ。

リフティングをしている中村俊輔、一瞬通り過ぎる。

健司　行きたかったな、コンフェデレーションズカップ。

真人　残念だよな、日本戦。

健司　もう一息だったんだけどね。

真人　うん、でも、まだまだジーコジャパンは始まったばかりなんだから。

健司　ドイツワールドカップがある。

真人　うん。

健司　お、東京ドームだ。あ、こどもの城・青山円形劇場だ。

真人　おまえも。

健司　そう、遠視。

真人　やっぱり。

健司　行きたかったな、モーニング娘。

真人　おまえ、あぶないよ。

健司　どうしてー。

真人　いいだろ。

健司　あっ、皇居だ。広いなー。はぁ。（溜息）

真人　どうしたんだよ。愛子さまの成長の度合い、心配なの。

健司　興味ねえよ、あんなガキ。

真人　（気づく）ハッハー。

健司　なんだよ。

真人　やっぱり気があったんだろ、マコ様、カコ様。

健司　じ、じつは。

スピード上がり、一人突進する真人。健司、置いていかれる。

健司　ど、どうしたんだよ。待ってよー。どっちなのー。

トップグループ。
こぐ、こぐ、こぐ。

ジョニー　速度計はすでに振り切れ、両側では町が弓矢のように後ろへ流れ、前を行く道路はひたすら一直線。ひとつの点のようになってるぜ。

グレイト　説明ゼリフとは余裕だな。

ジョニー　ああ。フフフ。（スピードを上げる）

グレイト　うっ。

トップグループは同時にチェックポイント。

息子　チェックポイントです。

ジョニー　朝焼けのジョニー。

息　子　朝焼けのジョニー、トップ通過。

出ていく。ヒュン。

グレイト　二着か。

息　子　そうです。

ヒュン。

久　志　三着ね。

息　子　がんばってっ。

ヒュン。

グレイト　ついてこーいっ。

久　志　待ってよぉー。

グレイト　しょうがねぇな。（スピードを落とす）

久　志　ごめんごめん。

前にはジョニーが見える。

グレイト　いいか。この直線道路だ。

久　志　ウン。

グレイト　直線でスピードがグーンと上がる。

久　志　うん。

グレイト　そうすっとマシンのすぐ後ろには真空状態ができる。

久　志　真空状態ね。

グレイト　そう、マシンのすぐ後ろにだ。

久　志　マシン？

グレイト　俺のチャリだ。

久　志　そう。

グレイト　その真空状態は、スリップ・ストリームってんだ。後ろにちゃんとついてれば、おまえのチャリのスピードも一瞬上がる。いいか、一瞬だぞ一瞬。

久　志　うん。

グレイト　その一瞬を利用して俺のこと追い抜くんだ。

久　志　えっ。

グレイト　ジョニーもすぐそこだ。いいな。

久　志　う、ウン。

グレイト　行くぞー！

スピード。懸命についていく久志。スリップ・ストリーム、起こる。

SCENE 6 グレイト

グレイト あっ、あそこだッ！

すんごく早い朝焼けのジョニー。

ジョニー ふっふっふっ。

久　志 どうしても抜けないー。

グレイト 大丈夫だ。これで。

久　志 えっ？

グレイト スリップストリームだけじゃない。

久　志 え？

グレイト もうおまえには実力はあるんだ。

久　志 そんな！

グレイト 世の中、自信さえあれば、だ。

久　志 そうか！

グレイト 行け！

久　志 ぬっ。

グレイト もう少し！

先行しているジョニーにもう少しで追いつく久志。

ジョニー 負けるか。

久　志 くっ。

グレイト ぬおっ。

三人、一線に並ぶ。

ジョニー 抜かれてたまるかー。

三　人 ぬおおおおー。

光があふれる。
よく見るとそれまで声援していたみんながストップモーションになっている。
思わず止まっている三人。

ジョニー 何ッ。

グレイト どうしたんだ。

久　志 え、どうしたの。

ジョニー おかしい。前に進めない。

久　志 止まった？

ジョニー まさか！

グレイト 超えたぞ。

久　志 何ッ？

グレイト 臨界点だ。

久　志 え？

ジョニー　これがあの。
グレイト　そうだ。
久　志　なんなの、いったいなんなの臨界点って。
ジョニー　ふんっ。

ジョニー、手を振る。
すると、それはかまいたちとなって二人に襲いかかる。

久　志　うわっ！
グレイト　これは。
ジョニー　かまいたちだ。
久　志　おかまのいたち？
ジョニー　違う。臨界点を迎え、物質はまた別の物質へと変化した。
強大な力を持ったのだ。
グレイト　そうか、そういうことか。
ジョニー　行くぞ、朝焼けのジョニー・キィーック！

キック炸裂。吹っ飛ぶ2人。

二　人　ウワーッ！
ジョニー　どうだ、強烈だろ。
久　志　きゃー。
グレイト　大丈夫か。
久　志　あ、危ない！

起きあがったグレイトに対して、

ジョニー　ジョニー・パァーンチ！
グレイト　うっ。

したたかにコンビネーション・ブローを喰ったグレイト辰郎、
ダウン。

久　志　大丈夫？
グレイト　平気だ。
久　志　血が出てる。
グレイト　なんのこれしき。
久　志　無理しちゃダメだよ。
グレイト　ここで行かなきゃ男がすたる。それに。
久　志　それに？
グレイト　奴が強大な力を発揮できるってことは、
久　志　まさか！
グレイト　俺にだってその力は宿ってるってことじゃないか。
久　志　そうか！　ってことは僕にも。ふんがーっ！

久志、ジョニーに向かう。

ジョニー　ふんっ。

すぐさま、蹴り。

久　志　うーわーっ。

吹っ飛ぶ久志。

ジョニー　甘いんだって。俺様とは持ってる実力の基準値が違うんだよ。まるで二科と四科のようにな。

グレイト　まだ言うか。

ジョニー　ついて回るんだよ、一生な。永遠にズルズルとな。

久　志　くそーっ。（泣く）

ジョニー　ハハハハ、四科光線。

ビビビビビ〜。

グレイ・久志　うあーっ。

ジョニー　どうだどうだ。苦しめ苦しめ。

グレイト　きゃつめ、光線まで。

久　志　でも、そうか。僕にだって。

手をクロスさせて光線を出す。ビビビ……。

グレイト　弱い。

ジョニー　効かんわ、二科の出す光線なんて。

久　志　ちくしょう。

グレイト　そうなのか。

久　志　ちょっと、グレイトおまえは隠れ四科だろうが。

グレイト　そうか。そうだったな。隠れ四科バリア。（バリア、張る）

ジョニー　ぬぬっ？（効かない）……？

久　志　ふう。これで一安心。

グレイト　でどうしよう。

ジョニー　それだけじゃないぞ。四科ビーム。

久　志　うあっ。

グレイト　イッツ・オーライ。バリアがあるだろ。

久　志　そうか、そうだったね。

ジョニー　まだまだ、四科スラッガー。

ぶったぎる。

グレイト　そうか！

久　志　何？

グレイト　昔のことをいつまでもくよくよするような奴になるな。そのつながり、ここでぶったぎってやるよ。

グレイト、ジョニーに立ち向かう。

自分も四科スラッガーを出そうとするが、落とされる。

グレイト　あっ。

ジョニー　フッフッフ。

ジョニー、腕をつかんで、ボディーに連打。

ジョニー　甘いんだって。坊や、甘ぁい夢を見るのはやめにしな。現実は現実、過酷な現実なんだって。

グレイト　そんなことはねえ！

ジョニー　オラオラ。

グレイト　（打たれて）うっ……うっ！

ジョニー　悪の魅力全開、フルスロットルだぜ。

久　志　グレイト！

ジョニー　無理だよ無理。もう、悪の魅力はパッカリ花開いちまったんだって。

グレイト　ううっ。

ジョニー　さあて、仕上げと行くか。

グレイト　くくっ。（ダウン寸前）

ジョニー　俺の思いのこもったハイキックを。

グレイト　思いのたけならこっちだって。

二人、同時にジャンプ。

交錯。

強烈なバックライト。

☆★☆★★☆☆★☆★★☆！

グレイト　おまえの頭のよさは分かったからさ。せっかくだから、こっちで勝負しようぜ。

鉄パイプを如意棒のように、あるいはスターウォーズのライトセーバーのように出す。

ジョニーとグレイトの長もの勝負。

アクション。

パンチ。

キック。

パイプの衝撃音。

よろよろと立っているグレイト。

地面に大の字に伸びているジョニー。

久　志　やったアッ！

音楽、高鳴る。

ゆらりと倒れそうになるグレイト。支える久志。

久　志　やったね。

グレイト　ああ、思いが強い分、俺のほうが力を発揮したようだ。
久　志　凄い。（肩を握る）
グレイト　痛い。
久　志　ご、ごめん。
グレイト　いっっっっ……。
久　志　どうしたの、僕にも力がついてるってこと？
グレイト　自信だよ。自信が、おまえさんを強くしたんだろ。
久　志　自信か。

久志、正面を指さす。

グレイト　いよいよ、ゴールだ。ゴールが近い！
久　志　ああ、一直線だ！
ジョニー　なんの、これしき。

よろよろと立ち上がり、ゴールをめざすジョニー。

ジョニー　まだまだ。
グレイト　勝負だぜっ。
一　同　うおーっ。

グレイトと久志、手をつないでゴールイン。

息　子　優勝！　同着です！

EPILOGUE

小池コンツェルンの人々、入ってくる。

息　子　おめでとうございまーす。
町　長　オメデトー。
息　子　賞品の贈呈式でーす。
C子・D子　（賞品贈呈曲）パーンパーパパーンパーン。……。
町　長　優勝したグレイト辰郎くん、久志くんには賞金3百万円を贈呈する。

渡す。
一同、拍手。

ジョニー　やられたぜ。おめでとう。
一　同　おめでとう。
グレイト　ああ。
息　子　中をご覧になってください。

グレイト、袋を開ける。

グレイト　なんだこれ。
久　志　現金ないじゃない。
グレイト　これは。（紙を出す）

久　志　八月六日。日付だ。
グレイト　有効期限？
久　志　つまり今日？
グレイト　おっと。

中にはカギが入っている。

グレイト　カギだ。
久　志　こっ、これは。もしや？
グレイト　なんだよ。
久　志　新たな冒険の始まり？
グレイト　エ？
久　志　臨界点を飛び越えて、新しいレベルに達した新人類の僕らへの、新たな旅立ちのしるしじゃないのかな？
グレイト　まさか。どこへ。
久　志　少なくとも、こう言えるだろう。ここではない、どこかへ。
グレイト　ここではない？
久　志　どこかへ。
グレイト　そうか。

二人の瞳、キラリと輝く。

息　子　あの、盛り上がってるところ申し訳ありませんが、それよく見てください。
二　人　え？
グレイト　なんだこれ。
久　志　２８番？
グレイト　カラオケ小池？
息　子　そういうことでーす。
町　長　「小池コンツェルン」の主催する「カラオケ小池」で一日三百万円分、使える券なのじゃ。
グレイト　何ィ？
久　志　なんだよそれ。
町　長　すごいぞ。三百万円分のＶＩＰ　ＲＯＯＭを今日一日、貸切だ。唄い放題、飲み放題。もちろん未成年だからジュースだけだけどな。
グレイト　（あきれて）なんだって。
町　長　だけど凄いんだぞ、未成年だけだけど、な、なんとホステスまでつくんだからな。
久　志　それってまさか。

Ｃ子とＤ子がいつのまにかネグリジェ姿になっている。

Ｃ　子　早くしてね。
Ｄ　子　これからあたしたちチャーリーズ・エンジェルのオーディションがあるんだから。
グレイト　何？　チャリティー・プチエンジェルか？

C　子　イエローキャブに呼ばれてるしィ。
D　子　グラビアアイドルなのよ、あたしたちのこのJカップは。
C　子　Jカップって言っても、サッカーじゃないからね。
久　志　わかってるよ。
D　子　スイカップとも言うのよ。
グレイ・久志　いらんわー！

二人の熱のこもってないキック。

C　子　きゃあー。
D　子　うひゃあー。

去る。

グレイト　大体、三百万円のルームってそんな価値あんのかよ。
久　志　んなわきゃねーだろ。

再び現れるジョニー、握手を求める。

ジョニー　負けたよ。
グレイト　ああ。
ジョニー　おまえにも。（久志にも握手を求める）
久　志　僕？　僕は別に。
ジョニー　いや、ここまで俺を追いつめたのは。
グレイト　そうだ、俺一人の力じゃない。
ジョニー　自信をつけたな。
久　志　お金じゃないんだ。なんか、それより大切なものを身につけたような気がするよ。
グレイト　久志。
久　志　僕は僕なりに勉強をしてた。でも、あるとき気づいたんだ。僕は天才じゃないって。そんなに才能があるわけじゃないって。だからがんばんなきゃいけないって。
グレイト　そんなことで悩んでたのか。
久　志　なんかここんところ、そういうことがね。
グレイト　でも大丈夫だよ。ほら。
健　司　やったね久志。
真　人　よくやった。
久　志　ああ。
健　司　俺たち自転車愛好会の名誉、
真　人　守ってくれました！

自転車に乗った全員、出てくる。
群唱。

真　人　僕は、語ろうと思う。
健　司　かつて訪れた海のことを。その波のことを語ろうと思う。
二　人　山沿いの道を乗り手もなく行く自転車のことを語ろうと思う。

グレイト　円い輪を支えている銀色のスポークを見ていると、いまにも路上に転がり出て行きそうだ。

真　人　銀色のスポーク。

健　司　この美しい車輪を自分の足で動かすということは、

二　人　世界の夜明けだ。

少し離れたところに立ちつくしている久志。

グレイト　外せよ、補助輪。

久　志　え。

グレイト　おまえの補助輪をさ。

久　志　……分かった？

グレイト　ついてただろ。

久　志　……ウン。

みんな、チリンチリンとベルを鳴らす。

ゆっくりと移動し、一つの隊形になる一同。

一　同　人はだれもひとつの島ではない

自分ひとりだけで完璧な人はいない

人はみんな大きな陸地のひとつながり

だからその土を波が来て持って行かれるのは、とても悲しい

友達や自分の大切なものを持っていかれるのと同じだ

だから

だれかが死んだり傷ついたりするのは

自分が傷つくこととおんなじ

だれもがみんな人類の一員

だから訊かないで

「誰（た）がために鐘は鳴る」と

あの鐘はあなたのために鳴っているのです

（ジョン・ダン『誰がために鐘は鳴る』より）

グレイト　一足。

一　同　前進！

グレイト　二足。

一　同　加速！

グレイト　ジェット噴射！

一　同　反応反射音速光速！

久　志　あ……。

チリンチリンのベルの音が、どこかの鐘の音に重なる。

高らかに、鳴り響く鐘。

あなたのために、僕たちひとりひとりのために。

鐘の音の中……

幕

2003年8月、東京MXテレビで『僕らの夏は終わらない』としてドキュメンタリー放送される。

東京都高校演劇コンクール中央地区大会
2003　上演作品
獨協高等学校　演劇部上演台本
『スポチャン』

柳本　博

登場人物

黒木研之介（黒ケン）……杉田健介
神宮司久志……塚原　望
藤本伝造（テンパッチャー伝造）……伊藤慎悟

STAFF

演　出……杉田健介
照　明……森川佑介・伊藤慎悟
音　響……今福武士・加藤智之・杉田健介
装　置……塚原　望・福島　真・宇都宮成典
小道具……森川佑介・塚原　望
衣　裳……伊藤慎悟・向井裕斗
制　作……向井裕斗・伊藤慎悟
協　力……田中亮大・笠原正彰・藤田翔平・佐々木　琢
顧　問……柳本　博・笠井淳三

PROLOGUE

海は、近くにあったのだ。
郷愁を誘う波の音。
波の磯辺を叩く音。
波しぶきが防波堤に跳ね返る音。
ひとしきり。
そしてアナウンス。

ア　ナ　椅子ヲ調節シテ下サイ。
……目線ヲ決メテ下サイ。

波、砕け散る。

ア　ナ　オール・クルー、アテンション・プリーズ。
オール・キャスト、テンション・プリーズ。
一速、前進。
二速、加速。
三速、上昇。

幕ひらくと、刀を振る男たち。
彼らの持つ刀がきらめく。

上手には何やらポスター。
下手の掲示板にも何枚か。
いまはもう朽ち果ててしまった神社の境内。
お祈りをしたり、遊んできた広場。
黒木研之介（黒ケン）と久志。
境内に二人の気合いがこだまする。
ここに、「疾走する物語。沸騰する殺陣。驚愕のラスト」60分が始まる。

ケン　よぉし、ここまでッ。
久志　ありがとございました。
ケン　よーしよォしッ、よくわからんけど今日も快調だな。
久志　ああ。
ケン　なんだどーした元気がないぞ。
久志　そうかなぁ。
ケン　元気出せよ。よくわからんけど、快調。これこそが人生の真実だ。
久志　でもなぁオイ。
ケン　お、出たよ、「でもなぁオイ」。このあと、出んだよ、いま現在、自分のやってることに対する疑問がよ。
久志　……え。
ケン　ほら来いよ。言ってみろよ、言いたいんだろ、存在理由。
久志　僕にだって耳はあるよ。
ケン　まぶたはあっても耳ブタはないからな。
久志　いまから言おうとしてる内容の予告までされたら言えないよ。
ケン　いいから言ってみろよ。せぇの、
二人　「ホントにこれでうまくなってんのかなあ」

途中から図星をさされて言えなくなった久志、目をまんまるに。

久志　ア。
ケン　やっぱな。そうか？
久志　そうだよ。
ケン　大体アレだよ、おまえ、始めたばかりの人に「上手いか下手か」なんて判断できるか。
久志　そりゃできないけど。
ケン　だろ、始めたばかりの人には判断できないだろ。
久志　ああ。
ケン　でおまえは始めたばかりだろ。
久志　ウン。
ケン　おまえには判断できないだろ。
久志　まあ、昔、やったことはあるけどね。
ケン　昔のことはいいんだよ。ありゃあ違う。分かるな。この分かりやすい三段論法が意味するところは、おまえの悩みには意味がないってことなんだよ。

久志　ウン……。

ケン　芸事、習いごとが身についたかどうかってのは、自分では判断できないんだよ。すべてはハタから見たもの。そのまんま。言ってみりゃ透けてないコップみたいなもんだ。注いだ水があふれるまでは、わからない。どこまで溜まったか分からない。あふれるまで時間がかかる。で、コップの縁まで満ちて満ちて、表にドバッとあふれて初めて誰の目にも分かる。

久志　あぁ……。

ケン　おお、こぼれた。俺の力も上達した。おぉ。（久志に）な。

久志　まあな。

ケン　分かったな。分かったら、稽古。稽古。

久志　はい。

再び構える二人。

ケン　円月殺法！（やる）

久志　円月殺法！（真似る）

ケン　真空斬鉄剣！

久志　真空斬鉄剣！

ケン　ウルトラスーパースペシャルぶった斬り！

久志　ウルトラスーパースペシャルぶった斬り！　ふぅ……。

また、くたびれた、とばかりに座りこむ久志。

ケン　体力ねえなあ。

久志　ああ。

ケン　いいか、あの空の彼方に真ん丸のお月さまが上がる。俺たちはあの月に届くようなスピードで……。

久志　それって光速ってこと？

ケン　そう、光速で剣を振らなきゃいけないんだよ。じゃ。（行こうとする）

久志　光速か……って、ちょっと待ってよ。

ケン　なんだよ。おまえの学校、中間テスト近くないの。

久志　まだまだ先。

ケン　ウチのガッコ、もうすぐだからさ。

久志　ウチの学校、テストはヤだって言うと、受けなくていいんだよ。ほら、手がストとか言って。

ケン　すげぇな、さすが偏差値29だな。じゃ。

久志　待ってよ。（立ち上がる）

ケン　おまえ大きいな。

久志　……ウン。（猫背になる）なんでここで刀合わせてたんだよ。忘れたのか。

ケン　なんで。

久志　忘れたのか。待ち合わせだよ。

ケン　ここで？　誰か来んのかよ。

久　志　……内緒。
ケ　ン　内緒じゃねえよ。誰なんだよ。
久　志　なーいしょ。会えば分かるよ。
ケ　ン　女？
久　志　ブー。
ケ　ン　帰る。
久　志　おいおい。
ケ　ン　いいから、忙しいんだって。
久　志　研之介〜。
ケ　ン　暇なお方は、自主練でもしとけよ。
久　志　ウン。
ケ　ン　ただな、こういう女には気をつけろよ。（ポスターを指す）じゃあな。

ケン、出ていく。
久志、反芻する。

久　志　円月殺法。真空斬鉄剣。何がなんだか、さっぱり分かんないよな。ふー。（ため息）

そのとき、正真正銘のサンダーストーム。
雷鳴のように、声がする。

声　そんなことも分からないのかい！
久　志　だ、誰だ！

SCENE 1　謎の出戻り転校生

テンパッチャー伝造、推参。
ポスターの一隅がパカッと開き、そこに首を突っ込んでいた。
そしてカポッと引き抜き、全身あらわになる。
スタイルは当然、メタリックなギザ付き黒革コート。

伝　造　正義なき力は無能なり、力無き正義もまた無能なり。聞こえる、女、子どもの叫び声。行くぜ、火の中、水の中。さすらいの素浪人高校生・テンパッチャー伝造！　カムバック・トゥー・ジャパァーン！

ポーズ。

久　志　誰かー。こんなところに郷ひろみがー。ヒロミ・ゴーが！
伝　造　違ぁ〜う。
久　志　誰かー。変な人ですよー。変態だよ変態だよ大変だよー。
伝　造　それも違ぁ〜う。待てコラ、誰が変態なんだ。
久　志　だっておまえ、その時代錯誤のメタリックなロングコー

トの下、何も着てないだろ。

伝造　バカなこと言うな。そんなワケねえだろ。

久志　そうかなあ。（のぞきこもうとする）

伝造　やめんか。

久志　おっと。

伝造　懐かしいな、この街の匂い。何度も何度も想像したぜ。遥か遠くの異国の地でな。どこまでも続くビル平線。

久志　ビル平線？

伝造　地平線でも水平線でもない。おぉ、ジャパァーン。東京23区か……。かぁー、珍しいぜ、こんなにどこまでもビルが続いてる街ってのはな。見てみろよ。コンクリートとアスファルトのストリート・ジャングルじゃないか、まさにここは。

久志　でもなんか気づかない？

伝造　そういえばなんか海が遠くなった気がするな。やっぱ俺が成長したからか。ん？　いや、それならば逆に近くなるよな。

久志　埋め立てだよ。

伝造　ずるずる。（うどんをすする）

久志　それはゆでたて。

伝造　（謝罪）

久志　埋め立てられたんだよ。

伝造　猫背のおまえがか？

久志　違うよ。で、僕、アリンコが好きでね。

伝造　アリンコ？

久志　昔、部屋で飼ってたんだ。お酒の空きビンに土を盛って。

伝造　ほうほう。

久志　庭の土入れて、捕まえたアリンコ入れたら、アリンコたち、一生懸命、土を掘って地面に巣を作ってた。暗くて黒い土のなかにいくつも迷路のように。

伝造　暗くて、黒い。

久志　ウン。

伝造　迷路？

久志　ああ。

伝造　ひきこもりかよ。

久志、そのことばにビクッと反応する。

久志　エッ！　違わい違わい！

伝造　分かったよ。

久志　ウェーン、……わいわい。

伝造　分かった分かったって。何必死コイてんだよ。

久志　……あ、ウン。

伝造　落ち着けよ。

久志　ああ。

伝造　で？

久志　え。……で、ついこないだ、なんか懐かしくなっちゃって、アリンコ見つけようと思って街をさまよったんだけど、それこそ道という道、全部舗装されてて。

伝造　ああ、土の部分ってないよな、このジャパン。

久志　だからここが貴重なんだよ、この夕立神社の土がさ。懐かしいだろ。

伝造　ああ、覚えてる。

久志　え？

伝造　やったじゃないか。一対一の合戦を始めるお侍さんが「やあやあ」と言って、自らの名乗りをあげるように。

久志　え？

伝造　夕暮れの神社の境内。おまえが伊賀、俺が甲賀の抜け忍だった。

久志　はぁ？

伝造　ならばこうとも言う。おまえが宿場荒らしの大悪党。俺が越後屋に雇われた用心棒だった。

久志　なんのことやら。（行こうとする）

伝造　「待ちやがれ！」

ビクッと止まる久志。

伝造　「この宿場界隈（しゅくばかいわい）で賭場（とば）を荒らして金銀財宝あらかた根こそぎ持ち出しやがって、そのままでお天道様、拝めるとでも思ってるのか」

久志　ケッ。

伝造　えぇい、えいえい。なおれ、その場に。

久志　けっ。しゃらくせえ。そういうきさまは悪代官。

伝造　カッハッハッハッ。苦しゅうない苦しゅうない。（悪代官となって帯をほどく）

くるくる回る久志姫。

伝造　ほーれほれほれ。

久志　あーれえ。（くるくる）

伝造　よいではないか、よいではないか。

久志　お許しくださいまし。お許しくださいま。

伝造　ほれほれ。

久志　あーれえ。

伝造　近ぅ寄れ。もそっと。もそっと。

久志姫、帯をぶったぎる。

久志　やっ。

伝造　お縄、頂戴。

久志　きさま、十手を持ってお奉行様（ぶぎょう）を気取ってるが、その実、ただの雇われ根無し草じゃねえのか。

伝造　そういうこと。
久志　くせ者！

二人の刀、ガッシ。

伝造　思い出したな久志。
久志　ああ！　伝造。ハハハー。
伝造　ハハハ、思い出してくれて嬉しいよ。
久志　何年ぶりだろ。帰ってきたんだ。
伝造　ああ。毎日の決闘場、この夕立神社の境内に、何やら大事な忘れ物をしたような気がしてね。
久志　帰国したんだ。帰国子女だね。
伝造　……ウン。で、おまえ何やってんだ。
久志　わからない？

持っていた刀をビュン！

久志　（決まったとばかりにポーズ）へへへ。
伝造　分かんねえ。
久志　（こけそうになるが、またも刀、一閃）とっ。
伝造　分かんねえって。
久志　これでも？（またも斬る）……！
伝造　だから訊いてる。
久志　普通さ。（ビュン）
伝造　剣道？
久志　みんなそう言う。
伝造　じゃ合ってんの？
久志　違う。（ビュン）
伝造　フィッシング？
久志　なんで、それを言うならフェンシング。
伝造　じゃ、合ってるの？
久志　違うけど。さ。（ビュン）
伝造　機動隊？
久志　なんだよそれ。
伝造　いや、なぜアゴを突き出す。まずそこを言え。フラフラするな。なんでフラフラするか言え。それから言え。
久志　んとー、アゴと連動して。
伝造　連動するな。やれ。
久志　（ヒュン）
伝造　居合い？
久志　惜しい。（ビュビュッ）
伝造　ゴルフ？
久志　遠い。（シュタッ）
伝造　分かった。
久志　分かった？
伝造　テニス！

久志　えっ！　いーよもー、わかったよ。素人さんにはケガさせたくないけど、どっからでもかかってきな。

伝造　お。久しぶりに再会した友達に対して言っちゃうワケ？

久志　いいから来いよ、ケガしても知らねえぜ。

伝造　行くぞ。

向き合う二人。

すぐさま、足を打つ久志。

伝造　おっと、足、足。

久志　へっへー。

伝造　おい、なんだよ、剣道は足、禁止だろ。なんで打つんだよ。

久志　反則じゃないんだよ。

伝造　？

久志　「スポチャン」だよ。

伝造　スポチャン？

久志　うん、スポーツ・チャンバラ。（シャキーン）

伝造　へーぇ、あの、チャンバラが、スポーツなの。

久志　聞いたことない？

伝造　ないなあ、サッパリ。（きっぱり）

久志　そう。

伝造　マニアックなんだろ〜。（ニタニタ）

久志　そんなことないよ。

伝造　ふぅん。

久志　スポーツ・チャンバラは、ただの遊びじゃない。ルールが整備されて、ひとつのスポーツとして、認知されようとしてるんだ。国内競技人口は15万人を越えてて、世界大会もある。ちゃんと世界的な協会組織まであるんだよ。

伝造　ホントに？

久志　ああ、防具をつけて、寸止めじゃなくて相手と打ち合うんだ。もちろん日本から生まれて、この夏の世界選手権は、なんと29回目を迎えたんだ。

伝造　ほう、そんなのやってんだ。

久志　まあね、僕もまだ始めたばっかりなんだけど。

伝造　そう。

久志　で、おまえも久しぶりだねえ。

伝造　ああ。

久志　いつからだっけ。

伝造　中学入試を終えてからだから、5年ぶりか。

久志　どこ行ってたんだ、どこの国？

伝造　いろいろ回ったよこの5年。まるで、世界の平和のために、いろんな場所をグルグル巡回してたみたいにだ。

久志　まるで救世主みたいだね。

伝造　さ、なんでも訊いておくんなはれ。

久志　え？

伝　「おはようございます」、グッモーニン、いろんな国の言葉で言えちゃったりなんかするんだぜ。

久志　ちょっと自慢はいってる？

伝造　あ、ごめん。

久志　いいよいいよ。じゃ、スペイン語。

伝造　ブエノス・ディアス。

久志　イタリア語。

伝造　ブォン・ジョルノ。

久志　ドイツ語。

伝造　グーテンモルゲン。

久志　中国語。

伝造　ニーツァオ。

久志　土佐弁。

伝造　お早ぇぇこって。

久志　凄い。

伝造　ハハハ。だろ。次、日本の呼び名。

久志　スペイン語。

伝造　ハポン。

久志　古代ギリシャ語。

伝造　ヤーパン。

久志　中国語。

伝造　リーベン。

久志　朝鮮語。

伝造　イルポン。

久志　英語。

伝造　じゃぱぁーん。

久志　やっぱ、気のふれた郷ひろみは怖いよ！

伝造　何を言うか、ふかわりょうのくせに。

久志　えっ、ええっ！

久志、それだけは言われたくないとばかりに髪を乱す。

久志　ぐふ、ぐふぐふ。

伝造　ごめん、それは言わない約束だったな。

久志　いいんだけどさ。（怒）

伝造　おまえはジャッキー・チェンだよ。

久志　もういいって。

伝造　アチョッ！

久志　それはブルース・リーだろ。

伝造　あ。

久志　もういいって。だいたい、いろんなこと言ってたけど、僕にはホントかウソかわからないんだからね。おまえが適当に言ってても。

伝造　信用してないのか？

久志　信用してないね。

音楽。
照明も唐突に劇的に変わる。
いきなり回想シーンになる。

伝　造　俺は、ただひたすら逃げ回った。

飛行機の音。
爆撃音。
逃げまどう人々の叫び声。

伝　造　あっ、危ない！

手を差し伸べる。
明かり、絞られ、テンパッチャー伝造ひとりになる。

伝　造　内戦のボスニア。争乱のソマリア。爆撃は情け容赦なく一般市民の元にも襲いかかる。どしゃぶりのように降り止むことのない爆弾。破裂音。昨日は隣の家が爆撃された。爆発。そして、今日は。いつしか、俺は明日をも知れぬ自分の命の灯をひたすら祈り続けるようになっていった。
しかしそのうち自分がいまのままでいいのか疑問を感じるようになっていた。だから俺は伝説の薬草を体に巻きつけた。すると、体はみるみるうちに巨大化し、見上げるような、大山のような高さにまで成長した。そして、緑のモンスターとなって、ジャンプした。
俺の飛翔能力は、爆撃機には届くほどだった。飛び上がった俺の拳は一機、また一機と爆撃機を破壊していた。

いきなり意味不明の気合いをかける伝造。

伝　造　エルニーニョ！

跳躍。

伝　造　アセトアルデヒド！

飛翔。

伝　造　ヒポポタマス！

炸裂音。
落下傘をつかまえるかのようにジャンプする伝造。

伝　造　そして、そこに、いままさに悪漢の手に落ちようとしている少女がいる。

「この手につかまれ」
「いやよ。離して」
「何をいうんだ。危ないよ。僕はきみを助けに来たんだよ」
「ウソよ」
「ウソじゃない。このままではきみは敵の術中にはまってしまうよ」
「ウソ」
「違う」
「だって、目が危ないわ」
「いや、目は危ないかもしれないけどウソじゃない」
俺は少女を抱え上げようとした。

久志　ウソだろ。

音と明かり、元に戻る。

伝造　え。

久志　ウソつくなよ。だいたい、ボスニアとソマリア、どっちにいたの。キミのお父さん、従軍記者？　戦場カメラマン？　「地雷を踏んだらサヨウナラ」の一ノ瀬泰造（たいぞう）かよ。

伝造、ジャンプして両足を空中で当てる。

久志　それは原田泰造だろ、ネプチューンの。

伝造　おおっ、おっおっおっおっお。

久志　それは江頭2・50（にじごじっぷん）だろ。

伝造　ごめんなさい。

久志　だいたい、緑のモンスターってそんな、超人ハルクじゃあるまいし。

伝造　ごめん、つい調子に乗ってしまった。

久志　じゃ、今の何？

伝造　え？

久志　いまの描写すぎる描写はさ。

伝造　ああ、街から街へ流れていくときに聞いた、悲しいおとぎ話かもしれない。

久志　夢だろ。寝言は寝てから言えよ。

伝造　いや、しかァし！

久志　なんだよいきなり。

伝造　ある種の夢はすべて現実もしくは過去のメタファーだ。きみにもあるね。いまでも身を焦がすような、いつまでも歯をギシギシ言わせるような凄まじい想い出が。

久志、静かに頷く。

伝造　いつだ。

久志　それは、中学入試のときだ。

伝造　やっぱり。

久志　そういや、どこ行ったんだい。中学入試の勉強、してたじゃないか。いつも一緒に。

伝造　ま、俺もね。うかったことはうかったんだけど、春休み前にすぐさま転校するハメになっちゃったからね。

久志　そうか。

伝造　おまえは。

久志　訊いてくれるな。

伝造　そんな。おまえがいま通ってる学校だろ。

久志　恥ずかしいよ。ほら、俺、理科社会ができなかっただろ。二科受験だったからな。

伝造　そんな。俺だってそうだったじゃないか。

久志　そうだっけ。

伝造　そうだよ。で。

久志　ん？

伝造　あいつ、どうしたっけ。仲良かったあいつ。

久志　黒ケンか。

伝造　そ、黒木研之介。あいつ、どこ行ったんだっけ。

久志　秀才学園。四科の最高峰。

伝造　ああ、あいつは、理科も社会も万遍なくできたもんな。

久志　勉強はできるし、カッコはいいし、あいつモテモテだったもんな。

伝造　おまえはどうなんだよ。

久志　偏差値29のドッキリ高校なんて、誰も相手にしてくれないよ。

SCENE 2　ニカニカ笑うな

音楽。

入ってくるケン。

殺気にあふれた二人。刀を合わせる。

伝造　おまえも忘れ物をしたか。

ケン　何ッ。

伝造　忘れたか。

ケン　知らん。

伝造　俺だよ、二科の伝造だよ。

ケン　二科？

伝造　そうだよ。

ケン　ニカ？　なんざんしょ。

伝造　二科だよ二科。

ケン　ニカニカ？

久志　覚えてないのか、四科のお方は。

ケン　忘れましたね、はてさて、なんのことやら。

伝造　二教科の俺たちは、ただひたすらおまえが羨ましかった。

久志　夏期講習のときだって、四教科のおまえは午後まであった。

伝造　俺たち二科は午前中で終わりだった。

ケン　そんだけかよ。それがどうしたってんだ。

伝造　四科はキラキラ輝いてた。

久志　女の子も小六なのに、イエローキャブみたいに発育ばっちりの子もいた。

伝造　二科には男しかいなかった、ような気がするぐらい暗かった。気のせいかもしれないけど、天井の電気も暗かった。

久志　あれボク確かめたけど、四科は100ワットなのに、二科は便所に最適15ワット。

二人　あ〜！

ケン　怖いね。

伝造　黒板だってボロボロ。

久志　書いてるとあちら側に突き抜けた。

ケン　青空教室かよ。

久志　最初は僕たちだって、より多くの私立中学受けることができるように四教科とってた。

伝造　そうしてより偏差値の高い中学めざしてた。

久志　だけど、ある日、突然、塾の先生から宣告されるんだ。

伝造　死の宣告を。

二人　アウ。（十字架になる）

ケン　そんな大げさな。

伝造　（先生になって、十字架の久志をなじる）「久志くん、こっち来なさい」

久志　は。

伝造　「きみなにやってるの」

久志　あハイ。（十字架、ほどく）

伝造　「きみはどうも理科社会が伸び悩んでるようだね」

久志　はあ。

伝造　「もちろん算数国語のほうが配点も高いですから、きみが本当に私立を受けるなら、二科になさい」

久志　僕の人生の中で、初めての挫折だった。

伝造　「四教科、幅広く勉強するより、主要科目の中の主要科目、算数国語の二教科にしぼりましょう。しぼって全力で頭をふりしぼりましょう」

久志　僕の人生の中で、初めての絞り込みだった。

伝造　平たく言えば差別だぜ。

二人　あ〜！

ケン　だからそんな大げさなことかよ。

伝造　こういう経験をしてた。そりゃあそうだ。俺たちには絶対に越せない壁が、

久志　ラインが

二人　あった。

久志　それが二科四科だった。

ケン　だから、そんな時代のことなんか忘れちまったって。

伝造　思い出せ、このハチマキを。

久志、シュタッと出す。

一同　必勝！

伝造　そうだ。この必勝ハチマキが汗と手垢で真っ黒に汚れるまで、俺たちは朝から塾に通った。

久志　おまえらはエリートの、大学受験で言えば花の国公立を狙うような四教科。俺たちゃみじめな、二教科だった。

伝造　すンげぇあからさまな、露骨な指導方針だったから、四科は全員、キラキラ輝く金ボタン。

ケン　その点おまえらはくすんだ銅ボタン。

久志　俺らは立ちすくんだ。

伝造　銅。

久志　どー。

ケン　銅。

久志　金と同じと漢字では書くけど、なんのこたない、即戦力から見放された差別待遇だった。

ケン　（四科生になる）やーい、二科のバカ、二科のバカ！ニカニカ笑ってんなよ！

二人　（シチュエーションを忘れて喜ぶ）おおっ！

次第にケンにも過去の記憶がよみがえってくる。

架空の縄で二人を縛りあげ、自分はムチを持つことになる。

ケン　うりゃ。（ビシッ）

二人　アウッ！

ケン　おまえら国語と算数しかできねえんだろ。

久志　それだけで十分だと思った。

伝造　それすらも十分大変だった。

ケン　そーだねー、きみたちに理科の問題なんか出してもダメだよね。アレ、でもおかしいぞ、小学校ではみんな共通に勉強してんだもんねぇ。きみんとこ塾ではやってなくても、学校には理科社会あんでしょ。

二人　ああ。

ケン　そうだよね。みんな同じことやってるはずなんだからね。じゃ問題出すよ。条件の悪い職場のことを呼ぶ三Kって何？

久志　クルマ。

伝造　（なぜか英訳）カー。

久志　クッキー。

伝造　（またも英訳）クッキー。

久志　コップ。

伝造　カーップ。

ケン　違う！

二人　エ？

ケン　しかも全部Cだろが。
伝造　正解は。
ケン　暗い、汚い、危険。
久志　あ、そっか。
伝造　オッケー。次、来いやー。
ケン　日本国憲法の三大原則は。
久志　暗い。
伝造　汚い。
久志　危険。
ケン　（ムチをバシッ）うりゃっ。
二人　アーウッ！
ケン　そりゃ三Kだろぉが！
久志　次！
ケン　非核三原則は。
久志　汚い。
伝造　暗い。
久志　危険。
ケン　（ビシッ）！
二人　アーウッ！
ケン　順番替えてもダメだ。
伝造　くそー。
ケン　あ、分かったぞ。三つ答えがあるからいけないんだ。おまえらボケちゃうもんな。な！

久志　こ、怖いっス。
ケン　おーし、答えが一つしかないの出すかんな。「くらい」って言ったら殺すぞキサマ。（ビシッ）！
二人　アーウッ！
ケン　江戸幕府をつくったのは？
久志　エドさん。
ケン　鎌倉幕府をつくったのは？
伝造　鎌倉さん。
ケン　違ぁ〜う、徳川家康に源頼朝。
久志　おいコラ、じゃーエドさんは何したんだよ。
伝造　鎌倉さんもだコラ。
ケン　知らねえよ、そんなヤツ。（ビシッ、ビシッ）
二人　アーウッ。
ケン　つまり社会常識が欠けてるんだね。二科四科の問題じゃないんだね。次、人間は何を吸って生きてるか。
久志　空気。
ケン　空気じゃなくて酸素。
久志　酸素なんて見たことないよ！
ケン　屁理屈言うな！
久志　決めつけはよくない。
伝造　そう、決めつけはね。
ケン　次、簡単なのいくから答えろや。信号の問題。青は進め、赤は。

伝造　（すかさず）止まれ。
ケン　まだだよ。
伝造　違うの。
ケン　そりゃ合ってるよ。
久志　凄い。
伝造　ヒュウ。（口笛）
久志　さっすが。
ケン　その程度で喜ぶなよ。問題はまだ。
伝造　来やがれ。
ケン　青は進め、赤は止まれ。じゃ、黄色は。
伝造　あのな、いーかげんバカにすんな。
ケン　じゃ、答えろ。黄色は。
久志　伏せろ！
二人　エー！

伝造も唖然。

ケン　おまえ、ホントにそうしてたのか。
久志　伏せてた。
伝造　お、あぁ、そういや、こいつ信号の前で伏せてた。
久志　当たり前だろ。
二人　はぁ……。
ケン　そうか。（問題を出しまくる）酸性とアルカリ性の中間って何だ。
久志　女子校生。
伝造　オットセイ。
ケン　H２Oって何。
久志　コピーの機械。
伝造　Hなおじさん二人。
ケン　臨界点ってなんだ。
二人　エ？

ピタッと止まる三人。

ケン　（何事もなかったかのように）次、リアス式海岸を示せ。
久志　今度は本格的「社会」だね。
ケン　そういうこと。どうだ、リアス式。
伝造　その前にやることあるんじゃないのか。

ケン、縄を切る。

二人　フー。（手首を押さえたりして）
ケン　示してもらおうか、リアス式。
伝造　任せろ、とうりゃっ。

全身で変な海岸線を示す。すこぶる演劇的だ。

伝　造　こんなん出ました。（息を切らし）はぁっ……はあっ。
　どうだ。
ケ　ン　ブー。
久　志　行くぞ。（ちまちました動き）
ケ　ン　ひきこもりかよ。
久　志　うほっ。（急にへこむ）
伝　造　リアスさんがたくさんいる海岸。
久　志　リアス式っていう、とっても難しい公式が発明された海岸。

二人、あっちだ、こっちだとかいいながらボケまくる。
じりじりしていたケン。ついに……。

ケ　ン　こうよッ。「出はいりの多い複雑な海岸線と急斜面の崖が特徴の海岸」。これぞリアス式。

実演。思わず、場内大拍手。

伝　造　す、
久　志　凄い。

そして……。

ケ　ン　まだわかんないのか。
久　志　……んとねー、んとねーえー。……。（頭蓋骨を抑える）
　ぬー。
伝　造　どうした。ムツカシイこと考えると頭いたくなんのか？
久　志　……はっ。
伝　造　おっ、蘇生したな、よみがえったな。
久　志　んとねー、問題。
伝　造　ハイ。
ケ　ン　ってなんでおまえが問題出すんだ。
久　志　もっと分かりやすいの云ってよ。
ケ　ン　ああ。次の問題、「ゲームの種類を言え」

一瞬の沈黙のあと。

二　人　（挙手）ハイハイハイ！
久　志　プレステ。
伝　造　プレステ2。
久　志　セガサターン。
伝　造　ニンテンドー64。
久　志　ドリームキャスト。
伝　造　ゲームボーイ。
久　志　ゲームボーイアドバンス。
伝　造　ポケモン。

久志　テトリス。

ソフトの種類まで、楽しく必死に答えているうちに、いつのまにかケンはいない。

久志　あれ、いない。

伝造　どこ行った。

久志　うん。（キョロキョロ）

伝造　なるほど、この誤魔化し方。

久志　さすがは四科。

どうしても四科礼賛になってしまう二人なのであった。

伝造　なんであんなやつと。

久志　じつは、スポーツチャンバラの大会のとき、矢印があったんだ。

伝造　矢印？　なんで矢印なんだよ。

久志　僕、矢印があると、そっちのほう行っちゃうんだよ。

伝造　分かりやすい奴だねぇ。

久志　だから、よくお葬式とか出ちゃって、一度も会ったことのない人のためにお焼香したりして。

伝造　それはいいことだ。

久志　だから姿勢もよくなったんだ。

二人、歩きながら出ていく。

SCENE 3　大会

一人、光の中に立つケン。

ケン　スピード。これこそがスピードの神髄。刀を動かすスピードの速さ、刀の動きの正確さで争われるスポチャン高校生大会。常人には考えられないようなスピードを達成したそのとき、人は臨界点を超えることができるのだ。

大会。

観衆のざわめき。

アナウンス　赤。秀才学園、黒木研之介くん。

ケン　ハイ。

アナ　対する白、花葉学園、会津兼次（かねつぐ）君。

相手は、空いてる者が防具で変装して演じる。

アナ　始め！

ケン　イヤァーッ！

気合い、一閃。
見事なケンの殺陣。
縦横無尽に動く。
圧倒的な美しさを見せるケン。
難なく二本先取。

ケン　スポーツチャンバラの目的は、決してストレス解消だけではありません。剣道の礼儀作法・型などの規制にとらわれず、三分間で二本とったほうが勝ち。面打ち、小手打ち、胴打ちだけでなく、足打ち、突きなどの決まり手もあります。防具は保護面をつけ、短刀、小太刀、長剣のほか、二刀流も認められています。

続いて、もじもじしている久志。

アナウンス　白。ドッキリ高校、神宮司久志くん。

久志　……ハイ。

アナ　対する赤、仏虫学園、尾張安綱(やすつな)君。始め！

久志　イヤァーッ！

気合い、入らない。
ぎこちない動き。
簡単に二本取られる。

ひとり、たたずみ、打ちひしがれている久志。
その脳裏に、伝造の声がこだまする。

伝造　問題は才能なのかもしれないな。二科しかできない奴なんて、もうこれからの人生すべてにおいてダメなのかもしれない。
いつか塾の先生に言われたように、社会ができないヤツには社会性がない。理科ができないやつには理性がないのかな。

ひとり、とぼとぼ出ていく久志。
また境内に戻る。
入ってくる伝造とケン。

ケン　久志のやつ、最近来ないんだよ、スポチャンの練習に。

伝造　知らないのか。あいつ、引きこもりになっちまったんだよ。

ケン　引きこもり？

伝造　ああ、学校休んでて、家から全然出てこないし。からっきしダメだよ。

ケン　引きこもりじゃないよ。

伝造　え。ゲームとマンガ。昼夜逆転してんだぜ。

ケン　違う。

伝造　どうして。

ケン　あいつは、引きこもりの反対。言ってみれば、「押し出しまくり」だな。

伝造　なんだよ、それ。

ケン　押し出しまくりだよ。引きこもりの反対。

伝造　そんな。

ケン　あれだよ。

ロボット登場。
いや、ゲームで武装した久志である。
手にはゲーム。モニターと本体を背負い、ディスプレイは目の前に。

ケン　久志！

伝造　どうしたんだ久志！

音にならない音声。
ことばにならない声を発する久志。

久志　ウィーン、ガックンガックン。カックンコ。ピピピピ、ビシビシ、ヌワーット。

伝造　ダメだ、まったくこっちのことばが通じない。

ケン　意志の疎通はできるのか。

伝造　やってみる。

ケン　頼む。

伝造　ウィーン、ガクガク。

久志　ガガガ……。

伝造　……ピーポ、ガガガガガ。ピピピピ。

久志　……。

動き、止まり、反応しない久志。

伝造　……カカカカピピ。……グガギガビ。

久志　……。

伝造　ピピペペグギガ。

久志　……。

伝造　ピピピガ。

久志　ガ。

伝造　ピピピピ。

久志　……ピピ。

ケン　おお。

伝造　グギガギガ。

久志　ベベガグガ。

ケン　おおっ。何か通じ合ってる。

伝造と久志、身振り手振りを交え、機械音で会話している。

伝造　ギガギガ、メグゴビド。
久志　グギヌベガ、ゲゴガグ、ブー。
伝造　プシュッ、ビー。
久志　プシュッ、バー。
伝造　プシュピ。
久志　プシュピ。
伝造　ピギピポー。
久志　ピポグバピ、ガガガガ。
伝造　ピピピポー。
久志　ガガガガ、ギガンデ。
伝造　カッカッカッ、ギー。
久志　カッカッカッ、ゴー。
ケン　何か通じ合ってるようだが、はたからはただのアホの会話だ。
伝造　ガッガッガッ、ピー。
久志　ガッガッガッ、ポー。

二人、笑ってるようである。
スキをみてケンのもとにやってくる伝造。

ケン　どうなんだ。
伝造　深刻だな。
ケン　どうして。いま通じ合ってたじゃないか、話。
伝造　内容だよ。
ケン　内容？
伝造　危ないね。地球の危機とかなんとか言ってる。
ケン　あっちゃあ。
久志　ピポピホピー。
伝造　ピピピポー。
久志　ピポピ、ガガガガ。
伝造　ピピピポー。
久志　ガガガガ、ギガンデ。
伝造　ガガ、ガギガンピ。
久志　ガッガッガ、ガンデ。
伝造　ガガ、ガギガンピ。
ケン　……なんだって。
伝造　重症だよ。
ケン　待ってました。
伝造　え。
ケン　こいつを戻そう。
伝造　え。
ケン　大丈夫だ。ここは、俺たちが小さいころよく遊んだ境内だ。
伝造　なるほど。夕立神社。海のにおい、いつでも僕らは戻れる。あのときの風のにおい。
ケン　汽笛。

久志　ポー。
伝造　海岸線。
ケン　遠くを行くポンポン船。
久志　ポンポンポン。
伝造　そうか。久志をあちらの世界から戻すのには、うってつけだ。

音楽。
徐々に着替える三人。
久志も入る。

三人　イェーイッ！

跳ね回り、転げ回り、何が嬉しいのか大声で笑いまくる。

ケン　おまえ、ドブの中にズブズブ入った。
伝造　おまえこそ興奮してションベン洩らした。
久志　たははは―。

笑い転げる。

一同　ウワーイ！
ケン　わーい、缶蹴りやろうぜ！
二人　いいねー。
久志　やろうやろう、じゃ鬼、研之介。
ケン　なんでだよー。
久志　言いだしっぺー。
伝造　言いだしっぺー。
ケン　分かったよ、じゃあ数えるよー。
二人　オッケー。ワー。
ケン　1、2、3……。
久志　伝造、あっちねー。
伝造　OKOK。
ケン　いいねー。

伝造、忍法で隠れてる（つもり）。

ケン　（見て）
伝造　……。
ケン　伝造、消えてないよ。
伝造　え、おい！
ケン　伝造、みっけ。
久志　（そのスキに蹴る）オラー。
伝造　俺らの作戦勝ちー。
ケン　くっそー、飽きたから他のにしようぜー。
伝造　え、もうかよー。

久志　じゃー、色オニやろうぜ。
ケン　イェー。
伝造　なんだよ色オニって。オニが色気づくのか。
久志　色オニってのはさー、色さわるんだよー。
伝造　えー？
ケン　だからオニが「色くださいな」って言って、
久志　それを「色なんですか」って返すワケよ。
伝造　ほうほう。
ケン　で、オニが色言ってその色に触る前にオニにタッチされたらそいつがオニになるわけさ。
伝造　へー、なるほどなんか面白そうだな。オニだーれ。
ケン　言いだしっぺでしょー。
久志　ジャンケンしようよー。
伝造　ほら、早く、オニ！
久志　うーん、じゃあ行くぞー、色くださいなー。
二人　色なんですかー。
久志　ピンク。
二人　あわわ。

何とか触る。

久志　うー、やるな。じゃ、もう一回。色くださいな。
二人　色なんですかー。
久志　じゃあ、メタリックブルー。
二人　あわわ。

何とか触る。

久志　うー、あるんだ。んー、じゃもう1回。色くださいな。
二人　色なんですかー。
久志　じゃあ、玉虫色。
二人　あわわ、そりゃないよ。
久志　へへへ。
二人　あった。
久志　それ玉虫色？
二人　ウン。
久志　認めない。
ケン　いま玉虫いたけどつぶしちゃったんだよ。
伝造　そうだよ。な。
ケン　ウン！
久志　なんだよ玉虫色の決着かよ。
ケン　飽きたから違うのやろうぜ。
伝造　いいね、やろうぜー。
ケン　じゃ〜、次なにやる？
久志　俺たちもう出したんだから次おまえ考えろよ。
伝造　そうねー、じゃあねー、だるま落とし。

二人　え。
伝造　あ間違えた。それを言うなら、
三人　だるまさんがころんだ。
二人　おーし、はじめの一〜ッ歩。

二人、臨界点のジェット坊主となり、至近距離まで接近。

伝造　だるまさんが……。
久志　タッチ。
伝造　アレ、ずるーい、一歩じゃないじゃん。
ケン　えっ、一歩だったよな。
久志　ああ。
伝造　じゃいいよ。見てるから跳んでよ。
ケン　ちぇっ。

二人、今度はちゃんと、控えめな一歩。

伝造　だるまさんがころんだ。
二人　（ポーズ）
伝造　だるまさんがころんだ。
二人　（すごいポーズ）
伝造　ダルマさんがころんだ。
二人　（もっとすごいポーズ）
伝造　ダルマ……。
二人　タッチ。イェーイ！
伝造　えー、もうヤだ。やりたくねーだ！
ケン　勝てないからってテンパるなよ。
久志　そうだよ。
伝造　だって勝てないんだもん。
ケン　おまえがポーズとってどーすんだよ。
久志　分かった、これで勝負だ。
ケン　戦おうぜッ！
二人　オウッ！

刀を合わせ始める。
久志とケン。

ケン　北辰（ほくしん）一刀流！　やぁッ！
久志　柳生新陰（やぎゅうしんかげ）流！　とぅっ！

入り込もうとする伝造。

伝造　すいとんの術。……板壁の術。……筒抜けの術。ハッ。

構えをほどく久志。

久志　おい。

伝造　ぬぬぬっ。

久志　忍法じゃないんだよ。剣術。

ケン　そうそう、おまえがやってるのは、

三人　忍術。

久志　俺たちのが剣術。

ケン　いいね、分かったね。力、抜けるからさ。

伝造　おう。

別の構えに入るケンと久志。

ケン　やっ。

久志　スサッ。

伝造　忍法、壁抜け。ハッ。

なんかからんでる伝造。

ケン　やあっ！

久志　たあっ！

伝造　忍法、縄抜け。ハッ。

ひとりでやっている伝造。
ケンと久志は互角の打ち合い。

ケン　やっ！

久志　たっ！

伝造　忍法、亀仙人。

ひとり、ちぢこまる。

伝造　忍法、陰陽師（おんみょうじ）！（ひとりで変な呪文）

久志、絶好調。
ズブバシュッと音がして、敗れ去るケン。
ケン、去る。

伝造　おまえ、昔は元気よかったんじゃないの。

久志　まあね。

伝造　最初は元気だったじゃないか。

久志　最初はバカに元気だったんだ。

伝造　うんうん。

久志　で、最初はバカで元気でもあった。

伝造　でも。

久志　元気がなくなって、ただのバカになっちまったんだ。

立ちつくす二人。

SCENE 4　過去の傷

ケン、出てくる。

ケン　四科とってる俺はさ、二科のおまえとはつきあえないんだよ。

久志　え？

ケン　なんだよ、子犬がすがるような目をしちゃってよぉ。それでいままで施(ほどこ)しをしてもらってきたんだろうがよ。もう通用なんかしねえんだよ。こっちを見るな！

久志　そうかな？

ケン　そうなんだよ。おまえは子犬以外の何ものでもないんだよ。くやしかったらしてみろよ、それ以外の目をよ。

久志　こう……こうかな……。こう？

いろいろ動かしてみる。

ケン　ケッ！

久志　伝造〜。

伝造　すまん久志。じつは俺……。

久志　知ってたよ、伝造。凄くアタマがいいし。

伝造　俺、隠れ四科だったんだ。

久志　エ？

伝造　すまん。

久志　やっぱりなー。二科に頼ってる僕はダメなんだよなー。でもさー。（パシッ）なんか悔しいなぁ。どうすればいいのかな。隠れ四科だったか。じゃあ、まさかおまえ。

伝造　ああ、答えは分かってた。

久志　じゃあ僕に合わせてワザと。

伝造　答えなかった。

久志　（パシッ）ちょっと辛いな〜。

ケン　ヤだね、見せかけだけの友情。そんな友情ごっこ、犬も喰わねェよ。おっと、子犬の目はダメだよ。犬、なーし。

久志　僕、思うことがあるんだ。
人には何か特別な才能があるんじゃないかって。
黄金色に輝く夕陽を見つめながら、僕には、僕にしかない才能があるんじゃないのかって。
人より運動能力が優れてるとか、声の質がよくて、持って生まれた声で、人を虜(とりこ)にしてしまうとか。
僕にもそういうものがあるんじゃないのかって、思ってた。
僕も頑張ってるのにな。僕もみんなと同じぐらい努力してんだけどな。なんでかな？

ケン　それがセンスの違いなんだよ。ハーッハッハ！

ケン、去る。

伝造　ごめんな。……いままで隠してた分、俺は悪い奴かもな。つーかさ、俺まだ隠してたことあんだ。俺ちっとも救世主なんかじゃないんだ。いろいろ回ってるのも、家がこっぱみじんになったからなんだ。

久志　え。

伝造　ああ。

久志　木っ端微塵ってなんで？

伝造　それだきゃあ訊かねえでくれ。（なぜ訊る）

久志　あ、……うん。

伝造　で、帰国子女じゃないんだ。

久志　エ？

伝造　行ってたの外国じゃないんだ。

久志　そうだったの。じゃどこ？

伝造　高知。

久志　え。

伝造　坂本龍馬のふるさと。

久志　高知、四国か。

伝造　そ。だから、四国子女。

久志　なんでそんな。

伝造　最初は帰国子女って言ったんだけど、訊ってたのかな。おまえが外国外国って言うから冗談のつもりでそれにあわせて。

久志　外国語は？　あんなにいっぱい言ってたじゃない。

伝造　半分は出まかせだ。すまん。

久志　そう。

伝造　だから、元気出せよ。いつまでも二科四科じゃねぇだろ。世の中には、不意に爆撃されて、路頭に迷っちまってる不幸せな人もいるんだ。そんなふうにいじけてたら、いつまでも朝焼けを見ることなんかできねえぜ。今年、なんの年だか知ってる？

久志　え？

伝造　一九六三年、ジョン・F・ケネディ大統領が暗殺されてから40周年なんだ。

久志　なんか関係あんのか。

伝造　あんまり。

久志　じゃあ……。それに。

伝造　それに？

久志　僕、あんまりアメリカって国が好きになれないんだ。世界の警察たるアメリカは、その傍若無人にもほどがあるやり方で平和な社会に恐怖を植え付けてきた。それでいいのか、本当に。俺たちにできることはなんかあるんじゃないのかな。

伝造　分からないワケじゃないけど。

久志　そう。

伝造　で、再会したときおまえが言ったとおりだよ。このたいそうな服の下も、じつは何も着てないんだ。

久　志　……っ、辛いのは僕だけじゃないんだね。

久志、頷く。

証拠を見せる伝造。

いらんわ、とばかりに久志、渾身(こんしん)のビンタ。

伝　造　アウッ！

走り去る二人。

SCENE 5 進路

ケン、入ってくる。

進路面談に答えている感じ。

ケ　ン　はい、私はこのスポチャンの技能を最大限に生かし、その普及に努める気持ちは……ありません。ただ単に、学生時代のときだけスポチャンを極めようと思っているだけです。

刀を振る。

ケ　ン　……スポーツチャンバラは段とか級が授与されるのではなく、そのスピードによって、優秀者にはジェットボーイの称号が与えられるのです。それが叶わない奴はチェリーボーイ。

ジェットボーイめざして、出来る限り許された時間、仲間と切磋琢磨していきたいと思っています。

ゆっくりと入ってくる伝造。

伝　造　俺、久志に話したんだ。

ケ　ン　何を。

伝　造　グラウンド・ゼロのこと。

ケ　ン　グラウンド……。

伝　造　世界貿易センタービルの跡地。爆心地だ。

ここだけはホントに行ったことがある。

もちろんガレキの山も片づけられた。何もない。

でもあれから二年たってのに、まだ煙がくすぶってる気がした。

目を閉じて耳を澄ますと、助けを求める人々の声が聞こえてくる気がした。

俺の人生、このままでいいのかって思った。

21世紀になっても、戦火の耐えない世界になるなんて、考えたくなかった。

ケン　同情なんかするより、自分の地に足をつけた、人生のビジョンを極めたほうがいいんじゃないのか。

伝造　久志なんだけど。

ケン　あン？

伝造　俺の話にいたく共鳴してね。

ケン　いいこった。

伝造　俺はそんなつもりはなかったんだ。ただ単に励まそうとしただけなんだ。でも、行くっていうんだ。

ケン　どこへ。

伝造　イラク。

ケン　何？

ゆらーりと現れる久志。何かぶつぶつつぶやいている。

久志　（ぶつぶつ）……ボスニア、……アウンサン・スーチー、ホメイニ、アラファト議長。

ケン　久志！

伝造　どうしたんだ久志！

久志　ああ、おまえらか。

ケン　スポチャンどうするんだ。

久志　決めた！　俺、ボランティアになる！　戦場に行く。

ケン　バカか、おまえ。いったい何ができるってんだあ！

久志　救うんだ。世界を。

伝造　待てよ！

久志　イラクはどうすんだ。罪もないイラクの人々を殺したんだぞアメリカは！

ケン　だからってイラクになんか。

久志　もう決めたんだ。

伝造　そりゃたしかに俺はおまえに話したよ。そういう事実があるってことはさ。でも、実行する奴なんかいないぜ。

ケン　ワケ分からん。

久志　ワケっておまえ、なんであの子好きなんだ？

ケン　え？

久志　誰か好きになるのに、理由が要るか？　理由なんかなくたって、ヒトは誰かを好きになる。

伝造、遠くを見ている。

ケン　ん？　おいおまえ何、和んでるんだよ。

伝造、テンパる。

伝造　フガー。

ケン　あン？

伝造　い、いや、恋愛と行動することは別だ。ヒトを好きになるのに理由はないかもしれないが、戦場に行くのにはそ

れ相応の理由があるはずだ。

ケン　そうだ。おまえ、他にやることあるんじゃないのか。

久志　何だよ。

伝造　親御さんだって何つってた。

久志　エ？

伝造　話したんだろ、学校やめて行くって。

久志　ああ。

伝造　言われただろ。学校やめることなんかない。卒業してからだって遅くないって。

久志　ピンポン、正解。よく分かりまちたね～。

伝造　てめえ、なめてんのか。

ケン　誰だってそう言うに決まってるじゃないか。大学へも行かないで未成年のおまえに何ができるってんだ。

久志　関係ないっス。被害にあってるのは、俺らよりも年下の子どもたちなんスから、一刻も早く行ってやんなきゃなんねえっス。

ケン　だから他にやることがいくらでもあるじゃないか。

久志　何。

伝造　百歩譲って自衛隊に入るとかならまだ分かるよ。

ケン　募金とか、間に合うぜ。歳末助け合いに。

久志　だから、カネだけ出して血を流さないこの国は嫌いなんだよ。雀の涙程度のカネで、何が変えられるって言うんだ。あぁン？　何か変えられると思う？

ケン　思ってないよ。だからさ、おまえ自身がそんなことしたって。

久志　マスコミには宣伝したよ。日本の一少年、ボランティアで傭兵部隊に。

伝造　傭兵？　傭兵になんのか！

久志　ああ。俺が池に石を投じるんだよ。波紋を起こすんだ。

ケン　そんな、おまえ自身が石になって、どうすんだよ。沈んじまうだけだろ、石なんて。

伝造　こいつ意地んなってんだよ。な、そうだろ。

久志　なってねえよ。理不尽な巨大な権力に対する怒りにかられ、正義に燃えてるだけだ。

伝造　だから正義ったってなあ。

久志　俺たち一人ひとりの可能性は無限だ。それだけの力はあるはずだ。俺は気に入らないんだ。我慢がならないんだ。ぬくぬくと惰眠をむさぼってる奴らが。俺は小学校の卒業アルバムにこう書いた。「この世から戦争をなくしたい。この世の辞書から戦争ということばをなくしたい」と。ただ、それだけだ。そのときの自分に返っただけだよ。そしてスポチャンを生かすんだ。

伝造　そんな。

久志　スポチャンを活かせる道が見つかったんだ。

伝造　ただのチャンバラじゃねえか。

久志　俺は誇りを持ってる。

伝造　竹槍で飛行機を落とそうとするようなもんだぜ。
久志　（胸を押さえ）ここだよ。気持ちだよ、すべては。

立ちつくす久志。

ケン　分かったよ。
伝造　（ケンに）おい。
ケン　おまえの決意は分かった。でもな。
久志　なんだ。
ケン　どけ！
久志　やだ。
ケン　どけッ！
久志　……はい。
ケン　ここに世界地図があるとする。

宙を舞う。

久志　え。
伝造　何ッ。

虚空に世界地図を描き出すケン。

ケン　いいか、ここがアメリカ大陸。太平洋を挟んで、こっちがアジア。そしてここがいま俺たちが足を踏ん張ってる日本だ。
伝造　ジャパァーン。
二人　（キッ！）……！
伝造　ごめん、つい。
ケン　で、イラクってどこにあんだよ。どこにあるか示してみろ。
久志　え。
ケン　さあ。
久志　んー、ここ。
ケン　そこはオーストラリアのあたりだな。
久志　（もっと上）はい。
ケン　そこまでいくとスカンジナビア半島だな。
久志　ここ。
ケン　モスクワ。
久志　こっちか。
ケン　モンゴル。
久志　ここ。
ケン　上海。……シベリア特急に乗ってるんじゃねえんだぞ。ほらほら自分が助けに行くんだろ。
久志　ぬぬぬー。
ケン　いいか、赤道はこのライン。
久志　じゃ、ここだ。

ケン　南極だろ。
久志　くー！
伝造　久志！
ケン　ラストチャ〜ンス！

久志、かなり上のほうを指す。

久志　ふぬっ！
ケン　そこは北極！
久志　かぁーっ！
伝造　これでまじめにやってるんだから、怖い。
ケン　おまえ。
伝造　ここ。（指す）
ケン　惜しい。そこはサウジアラビア、もうちょっとこっち。
伝造　勉強になります。
ケン　おまえらやっぱ駄目な。
二人　くー。
ケン　戦場なんてのは、条件の悪い職場の三Kなんてもんじゃない。暗い、汚い、危険の極致なんだ。南極とイラクの区別もつかないような奴に、どうして世界平和が守れるんだ。
久志　ああー……。

ひざまずく久志。

伝造　久志、俺もそう思うよ。
久志　俺は中学受験のとき二教科だったかもしれない。社会性も理性もないのかもしれない。社会に適応できないのかもしれない。でも、そんな僕でも。
伝造　そうだよ、デモだよデモ。
久志　デモ？
伝造　デモをすりゃいいじゃないか。プラカード持って、戦争ハンターイってさ。
久志　反対？
伝造　やろうぜ、日本で。それなら協力できる。
ケン　デモデモ言ってる奴はデモすりゃいい。ハイハイ言ってる奴は這いつくばってりゃいいんだ。
伝造　まずは沖縄。基地問題だよ。
久志　でも僕。
伝造　な、そうだろ。デモだよ。
ケン　大体、青は進め、赤は止まれ、黄色は、伏せろ。
久志　なんて言ってる奴がだよ。世界を救うことなんかできないって。
ケン　だろ。
久志　いや、僕の気持ちはただひたすらいちずに。
ケン　まだ分からないのか。じゃ、こっちで勝負しよう。それほど言うなら、俺を倒してから行け。

ケン、ぬぉぉぉと立つ。

伝　造　スポチャンか。

ケ　ン　ああ。

久　志　俺もいつまでも今までの僕じゃない。僕も、僕だって。

ケ　ン　最後の稽古から何日たったってんだ。三日ぐらいじゃないか。

久　志　男子三日会わざれば刮目(かつもく)して見よ！

ケ　ン　ほう。すぐ片づけてやるぜ。見届けてくれよ。

伝　造　ああ。

ケ　ン　いいか。ハンディはやる。三本勝負のうち、1本でもとれば、おまえの思い通りにしてやる。

久　志　ああ。

伝　造　よし、準備を。

ケンに向かう久志。

伝　造　始め！

簡単に一本先取するケン。

ケ　ン　な、言っただろ。

久　志　まだまだ、もう一本。

臆せず向かう久志。

鍔(つば)迫り合い。

大きく振りかぶるケン。

久志の裂帛(れっぱく)の気合い。

久　志　きぇーっ。

久志、胴を射抜く。

伝　造　一本！　やったな久志。

久　志　ああ。

伝　造　すごいぞ。

ケ　ン　コップから水がこぼれたようだな。

久　志　ああ。

ケ　ン　そのスピード。臨界点を超えたわけだ。

久　志　臨界点？

伝　造　臨界点ね。

久　志　知ってるのか。

伝　造　ああ、ひとつのものが別のものになる瞬間のことだよ。

ケ　ン　おまえは別のものに変身したんだ。超えたんだよ、臨界点を、さ。

久　志　……ああ。

久志、立ちつくす。

EPILOGUE

冒頭のアナウンスが聞こえる。

ア　ナ　椅子ヲ調節シテ下サイ。
……目線ヲ決メテ下サイ。

音楽。

ア　ナ　オール・クルー、アテンション・プリーズ。
オール・キャスト、テンション・プリーズ。
一速、前進。
二速、加速。
三速、上昇。

指をつきつけ、笑顔で出ていく久志。
スローモーションで駆けていく。
時間がたつ。
25歳。
そして、二〇一〇年、久志が帰ってくる。
自信がみなぎる久志の姿
雄々しく。
サンダーストーム。

久　志　正義なき力は無能なり、力無き正義もまた無能なり。聞こえる、女、子どもの叫び声。行くぜ、火の中、水の中。神宮司久志！　カムバック・トゥー・ジャパァーン！

ポーズ。

ケ　ン　お帰り。
伝　造　お帰り。
久　志　ただいま参上ッ。

三人、リズムに乗ってカンカンカンと刀を合わせる。
そのまま、流麗な立ち回りとなる。
うなる剣。
避けてはよけ、よけては打つ。
それまで、彼らを見守っていたはずの神社の鈴。
成長した彼らを祝う、くす玉のように割れる。
三人、満面の笑み。

幕

〈解説〉
八月に上演した『臨界点のジェットボーイ』を高校の大会に出すため書き直した。登場人物を三人に減らし、自転車からスポーツチャンバラにアイテムを変更。タイトルも『スポチャン』とした。

(写真19)

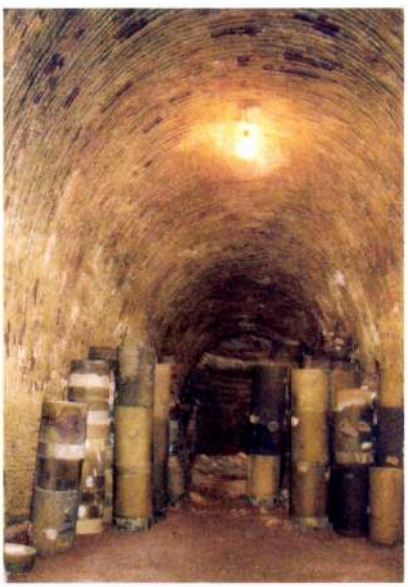
(写真20)

(写真21)

(写真13)

(写真14)

(写真15)



(写真16)

(写真17)

(写真18)

（写真７）

（写真８）

（写真９）

（写真10）

（写真11）

（写真12）

（写真１）

（写真２）

（写真３）

（写真４）

（写真５）

（写真６）

泉州市市街图

泉州市政府
Quanzhou Municipal Government
泉州水上乐园
清源街道
鲤城区
北门街
西门街
元宵街
涂店街道
江滨公园
Jin River
晋江
晋江市
中央公园
北岭
丰泽街道
泉秀街道
泉州市

風が心地いい。料理は、麺か粥しかなさそうなので、粥を注文。セットにするかと聞いてきたのでそれにしたら、しょっぱい卵（アヒルの卵）とピーナッツなどがのった皿がついてきた。一人10元。食事時間のピークをすぎたのか、乗務員も朝食を食べていた。（写真 21）

10時30分　上海駅到着。

＊今回の旅行を手配した銭さんと落ち合う場所に通じる階段が工事中だったので、場所を変更。無事会えた。新井氏と向氏はそのまま駅近くのバスターミナルから高速バスで寧波に行くことになっていた。私は新井氏の荷物を復旦大学の寮に届け、そのまま空港に向かい北京へ行くので、上海駅で別れた。

その後、わたしは新井氏の荷物を復旦大学に届け、タクシーで虹橋空港に行き、4時の北京行きに搭乗した。ところが、夕方北京が雷雨となったようで、いったん離陸した飛行機が2時間後ふたたび上海にもどるというアクシデントに遭遇した。しかし、何とかその日のうちに北京にたどり着けた。北京では予定通り用事をすませ、友人たちとも再会でき、11日に帰国した。

私にとって今回の福建省・江西省訪問は、中国における水上交通の重要さを気づかせてくれるものとなった。私たちはどうしても日常生活の経験から生まれたイメージをもとに未知の社会の事象や風景を想像しがちだ。環境やスケールのちがう中国社会に何度も足を運んでいるにもかかわらず、無意識のうちにこうしたイメージで捉えようとしてしまう。私が今までイメージしていた河川交通で使われる船の姿が、今回見た宋代輸送船の船底部分から復元できるものとスケールにおいても大きく異なっていることに愕然としたとき、「勝手に作り出した」イメージというものがなかなか抜き去りがたいことに改めて気づいた次第である。異なる社会を正確に見つめることの難しさを感じた。

また今回の踏査旅行は中国の普通の人々といろいろなことを話す貴重な機会が多かった。厦門―景徳鎮間の列車での会話や、アクシデントで上海にもどった機内で見た中国人同士の口論の場面の迫力、隣り合わせた乗客に相談し、なんとか北京にたどりついたことなどである。そうした中で感じたことは、中国社会の「近代化」がインフラ整備や貿易額の拡大といったハードな部分にとどまらず、確実に日常生活のなかに浸透しつつあるということであった。今後、中国社会の変質がどこまですすむのか、そして生活の「近代化」は中国人の価値観の変質をもたらすのか否か、興味は尽きない。機会が得られるうちは中国に足を運び、自分の目で見つめてみたいと思っている。

2004年9月成稿

※ 新井氏は2004年9月に帰国されている。

た。この楊梅亭付近には登り窯も見えた。

最後に、街に近いところにある湖田古窯遺跡をみた。ガイドブックや地図には「湖田古窯遺址陳列館」となっているが、チケットは「景徳鎮民窯博物館」とあった。

近くまで来たが道路工事中だったので、下車し博物館前まで歩く。しかし、門は閉まっていて、チケット売り場もない。戚さんが聞いてみると、門の横の土産店でチケットを売っていた。一人20元。チケットを購入し、中に入った。老人が展示館の鍵を開けてくれた。

説明文を読んだ後、発掘された宋〜元時代の製造所と窯跡を見学する。中国のこの手の博物館は、発掘現場をそのまま囲って展示場にしてあり、結構リアルにみえる。製造所跡は、いくつかの作業工程が集まってグループを作っている形をなしているのが特徴か。(写真 20)

次の展示場は窯跡で、宋元時代に使われていた「馬蹄窯」跡があった。ここも発掘したものをそのまま展示してあり、磁器の破片なども残っていた。

15時　ホテルへもどる。

＊すでにチェック・アウトしているので部屋には入れず、ロビーの喫茶店で休んだ。その後、戚さんに泉州で買った陶器を見てもらった。

17時ホテル出発。

17時20分　景徳鎮駅到着。接待所で待機。

5時50分　改札

＊列車は鷹潭から上海にいく列車だった。6時03分発というので大丈夫かと思ったが、一番近いホームだったので、十分間に合った。今回は一等寝台車。4人部屋で、一人中国人が同室することとなった。前の寝台車に比べて確かにきれいだが、静かで、どことなくよそよそしい感じがした。前の二等寝台車のにぎやかさが妙に懐かしく感じた。

出発してからまもなく、同室する中国人が入ってきたが、彼は数人のグループのひとりで、あぶれたらしく、最初から話をする気がなかったようだ。われわれとはまったく会話がなかった。静かなうちに列車は東へ向けて走る。

8月9日（月）

5時40分　起床。

＊目覚めてまもなく南京駅に到着した。2年ぶりに見る南京だった。

8時　朝食。

＊ちょうど隣の車両が食堂車らしく、コークスを車両の端に積み上げ、傍らで料理している厨房が見えた。そこで、3人で食事をすることになった。冷房はなく全開の窓から入ってくる

8月8日（日）

7時　起床。

7時40分　朝食　（粥2杯）。

＊昨晩から少々腹痛をおぼえる。疲れがたまっているという感じがする。大体中国に来ると体調は5日目くらいが最悪で、それを過ぎると慣れてくるのがいつものパターンである。この日もそのような状態だった。

9時出発。景徳鎮陶瓷館見学。

＊景徳鎮陶瓷館はホテル前の公園を出てすぐのところにあるので、いくらも車に乗らないで到着した。ここは陶磁器の博物館で、景徳鎮陶磁器の変遷がわかる。戚洪さんの説明で、染付けの名称の違いや、瓶形の名称などを教えてもらった。この中の販売部で「陶瓷習俗」という本をかった。

10時　文物商店のぞく。

10時20分　景徳鎮佳洋陶瓷有限公司で買い物。

＊この製造兼販売店がどの辺にあるのか、場所がよく分からないが、有名な景徳鎮磁器の仿製品を販売していた。

12時前　ホテルにもどり昼食

＊3人ともあまりお腹の調子がよくなさそうなので、野菜類を中心に注文する。おかず3品とご飯、粥で33元。

13時　再度出発。東に向かう。

＊午後は戚さんの案内で、東南郊外にある磁器の土の製造現場と元明時代の窯跡を見学した。

景徳鎮磁器の原料はカオリン（高嶺）であるが、実際のカオリンは主に長石類岩石を砕いたものと泥を混ぜて作ったもので、今回は磁土製造場を見た。製造場といっても、それは南望石塢という山中の集落地区にある水車小屋だった。しかも屋根だけある施設。2台の水車で粉を挽くように、砕いたカリオンの小石を粉状にするのだ。水車の隣に水槽のようなものがある。戚さんによると、泥を入れて沈殿させ（何回か繰り返す）、挽いた石と混ぜ合わせるそうだ。（写真 17・18・19）

昨日の景徳鎮古窯陶瓷廠見学で磁土に触らせてもらい、その滑らかさに驚いたが、そこまで石を粉状にするのは、かなり時間のかかる作業だということがわる。水車を利用する理由もこの辺にあるようだ。

何軒かの水車施設を見ながら、さらに山中をすすみ、採掘場を見た。その後、同じ道を引き返し、途中にあった（楊梅亭）景徳鎮陶瓷芸術苑で、五代～宋元の窯を復元した施設を見

＊ホテルは景徳鎮賓館（合資）。街の北にあり、ホテル前の公園はなかなか趣があるが、部屋は地方のホテルの普通ランクといったところか。三ツ星。

12時25分　ホテル２階のレストランで昼食（麺を注文）。

13時　ホテル出発。

13時10分　龍珠閣見学

＊最初に訪ねた龍珠閣は明清時代の官窯のあったところで、窯跡から見つかった破片を接合して復元した磁器を展示していた。４階建ての最上階に上ると官窯の敷地を戚さんが教えてくれた。戚さんが示してくれた場所をみると、数百メートル四方のかなり広い範囲になり、官窯工廠はかなり規模が大きかったことがわかる。

　戚さんは、陶磁器を収集したり、窯跡をたずねたりするのが趣味だそうで、相当に窯業や焼き物に詳しく、大いに勉強になった。

２時30分　景徳鎮古窯陶瓷博覧区見学。

＊この施設は一種のテーマパークで、景徳鎮の中心から西に向かい、昌江を渡ったところにある。最初に入ったのは景徳鎮古窯陶瓷廠で、ここでは磁器の製造工程を見学した。職人が轆轤を木の棒で回しながら造形し、次に整形をする。釉薬をかける工程などをみた。その後、窯を見学。最近はガスを使って焼くが、かつては松の薪で焼いたそうで、ここではそれを再現し、年一回窯入れをしているとのことだった。（写真 15・16）

　窯の見学の後、販売部で小休止し、次に敷地内の清代の邸宅を見て、見学を終了した。

17時　ホテル着。部屋にもどる。

18時夕食

＊景徳鎮では食事はすべて泊まったホテルのレストランで取った。かなり疲れていたし、ホテル周辺は公園でレストランがなかったので、考えてみれば一番よい形だったかもしれない。ただし、それほどうまくはなかった。食事代はその場で支払う。３人で昼食時のビール代も含め127元だった。

20時　食事を終えて部屋にもどり、そのまま寝込んでしまった。

＊毎日暑いなか見学するので、着るものが次第になくなっていく。どこも１泊ずつなので、なかなか洗濯できないのが悩みだった。

ンパートメント様式になっていて、1ボックス6人で、左右にそれぞれ上・中・下3つの寝台がついている。廊下とボックスを区切るドアはない。

出発して30分くらいすると、列車の窓からバナナ畑の広がる景色が見えた。珍しいので写真を撮っていたら、同じボックスにいた中国人が話しかけてきて、それから拙い中国語と筆談を併用しながら、さまざまなことを話した。彼らは停車した駅で窓越しにバナナを買ってくれた。美味だった。途中からやはり同じボックスにいる女性も加わってかなりにぎやかに過ごした。彼女は帰省するところで、故郷は貴州省の省都貴陽の付近の凱里という所だそうだ。彼女はミャオ族という少数民族の人だった。他の2名の男性は景徳鎮の手前の万年県という地の出身者で、仕事の関係で厦門と万年県をよく行き来しているとのことだった。夢中になって話しているうちに8時か9時ごろになり、電気が消されたので、そのまま寝てしまった。

8月7日（土）

6時　起床。

＊慣れていないせいか、熟睡はできなかった。トイレに行き顔を洗う。トイレは思ったよりも丁寧に使ってあり、驚いた。ごく普通の地方の庶民のほうが、よほどマナーがいいのではないか、などと考えてしまう。同室の中国人がすでに起きていて、早くも話し始める。中国人の話好きは相当のものだ。

王（ミャオ族の女性）さんも起きてきて再び話をする。前日の話では、彼女は今上海で仕事をしているが、仕事とは別にミャオ族の文化を紹介する活動もしていて、上海博物館に展示してある民族衣装の飾りつけに行ったりしているそうだ。そんな話から、持っている銀製のブレスレットをみせてくれ、できれば日本でもミャオ族の文化を紹介しもらいたい、といってブレスレットをプレゼントしてくれた。最初躊躇したが、知り合った記念にということなのでいただいてきた。彼女は「鷹潭」という駅で下車した。そこで貴陽行きに乗り換えて凱里まで帰るのだが、あと40時間くらいかかるという話だった。（写真 14）

その後は同室の中国人二人と話す。台湾問題を切り出したら話が止まらず、30分は一人でしゃべり続けていて、こちらも相当疲れた。

終点の景徳鎮につくころには乗客はほとんどいなくなっていた。

11時30分　景徳鎮着。ガイドさんと合流。ホテルへ直行。

＊今度のガイドさんは戚洪さん。女性で、後でわかったことだが、埼玉大学に留学していたことがあるとのこと。しかも、友人が獨協大学にいて、戚さん自身獨協大学の経済学部のゼミに出ていた経験があり、新井氏の顔を知っていた。そのため、新井氏と駅で会ったとき、びっくりしたといっていた。そんなことで急に話題が増えていった。

12時　ホテル着。チェック・イン。

20時過ぎ　ホテルへもどる。入浴、就寝。

8月6日（金）

6時　起床。

7時　朝食（粥、野菜炒め、豆乳など）。

9時ホテル出発。

9時50分　コロンス島着　見学。

＊初日に訪れた公園から渡し舟に乗って、5分でコロンス（鼓浪嶼）島についた。厦門島の西南に位置するコロンス島は、面積1.78平方キロメートルの小島である。しかし、南京条約による開港後の1902年、ここに共同租界が設けられ、領事館・病院・教会などが建てられた。したがって、島全体がいまでも西洋風の町並みを残している。

到着後、徒歩で日本領事館・イギリス領事館・オランダ領事館などの建物をみて回った（日本領事館が一番大きい。現在は厦門大学の教員の寮になっている。 写真 13)。さらに、共同租界時代の建物の残る路地を通り抜け、洋館の立ち並ぶ中を通って、厦門博物館に行った。特に目新しい展示物はなかったが、日本領事館に関するものがあった。

11時30分　昼食。

＊11時過ぎコロンス島からもどり、少し早い昼食をとる。市内の飲茶店にいき、ゆっくり昼食をとる（料金は記載漏れで不明)。

14時　厦門駅前到着。

＊列車は15時40分発。景徳鎮まで20時間の旅となるので、駅に隣接するショッピングセンターで食料を買い出し。暑いので、なるべく保存がきき、腹に負担が少ないものということで、果物とパンを買い込んだ。買い物後、5階の喫茶店で時間をつぶす。

日本では、いわゆる「喫茶店」はだいぶ減ったが、最近の中国では若い人が珈琲などを飲むようになったせいか、喫茶店が逆に増えてきている。この店もそのような店の一つで、映画関係の雑誌をたくさん置いていた。

15時20分　厦門駅に入る。

15時47分　厦門駅発。

＊ガイドの朗さんがホームまで来てくれた。観光客はほとんど利用しないので気をつけるように言われる。座席は2等寝台「硬臥」だった。定刻よりやや遅れて出発。寝台車の中はコ

7時　朝食（粥、野菜炒めなど）。

8時30分　ホテル出発。

9時　后渚港見学。

＊「泉州に来たからには港を見よう」という新井氏の提案にのって泉州港を見る。許可は取らなかったが、事情を話したら入れてくれた。ただ、現在は厦門の方が貿易港としても大きいので、泉州港は緑黄岩などの資材の積み出しが主なようだ。特産の緑黄岩が積んであった。港の風景を撮る。干潟に、沖縄の船とよく似た、舳先の両側に目が描かれた小船があった。（写真 11）

10時　市内に戻り、関帝廟と街中散策。

＊もとの涂門街にもどり、人が集まる廟をみる。祭ってあるのは岳飛だった。その後、昼まで街を散歩。昨日行った古玩街と、水路をはさんだ向かい側の骨董店街を見る。（写真 12）

12時10分　集合、そのまま昼食。

＊昼食も、昨日夕飯をたべたのと同じ店に入った。歓待してくれる。麺を食べる。1人5～6元だった。

13時　出発。

14時30分　厦門市にもどり、南普陀寺見学

15時10分　胡里山砲台見学

＊この胡里山砲台は1891（清光緒17）年、当時のドイツのクルップ社から購入した28インチの大砲を要する軍事要塞で、最近まで使用可能だった（？）という説明のついている全長約14メートルの大砲が見もの。数年前に一般公開されたようだ。夏休みということもあり、混んでいた。それにしても非常に暑い。普段は金門島が見えるということだったが、この日は見えなかった。

16時30分　ホテル着、チェック・イン。

＊ホテルは「金戚飯店」。つい最近オープンしたという感じのホテル。

17時15分　ホテルロビーで待ち合わせ、外出。

＊夕食は3人で食べに行く。ガイドさんに紹介してもらったレストランに行くのに道を間違え、かなり時間を費やした。あげくのはて、ようやくたどり着いたら、そこはホテルのすぐ近くにあった。海鮮料理が中心だったが、魚類は注文しなかった。全部で160元くらいだった。

展示館をたてるための工事だ」ということだった。(写真 7)

陳列館には昔の周辺の写真が数枚掲げられ、また、概略図があり、当時の市舶司の各施設の位置が図示されていた。(写真 8)

その後、一人の老人が案内をしてくれるというので、ついていった。市舶司跡は現在、文字通り住宅街で、民家が密集していた。倉庫跡とか当時の井戸(現在も使われている)なるものを見せてもらった。たしかに何も残っていなかったが、水路の位置はそれほど変わってはいないだろう。おそらく泉州の港から晋江をさかのぼり、さらにこうした水路を通って市舶司まで往来していたと思われる。(写真 9・10)

18時　市舶司跡見学終え、夕食場所をさがす。

18時50分　チェック・イン。

＊適当な夕食場所が見つからなかったので、とりあえず先にホテルに入った。ホテルは「泉州華僑大厦」で、清浄寺に近い。

19時15分　ホテルのロビーで待ち合わせ、夕食をとりに外出。

＊ホテルから涂門街という東西に走るメインストリートまで歩いて3分。涂門街に出たら昼食をとったレストランがすぐわかった。そこで食べるのもつまらないので、少し戻ったところに「素食」と書いてあるレストランを見つけた。結構人が入って繁盛しているのでそこに決めた。席についてから料理を5・6品たのみ、ビール3本を飲んだ。満腹になって全部で65元は安い。「素食」とは精進料理の意味だが、肉料理もあった。

食事後、散歩がてら「古玩街」に行く。いわゆる古道具屋街で、その中の一軒に入って、1時間くらい見ていた。この街は小さいわりにこうした店が多い。

22時　ホテルにもどり、24時就寝。

8月5日(木)

5時　起床。

6時30分　散歩。

＊ホテルの前に「閩南書院」という看板を掲げた建物があった。おそらく私的教育施設なのであろう。ホテルの部屋から建物の中庭が見え、その一角に「夏季絵画養成コース募集」と書いた横断幕がかかげられていた。壁で隔てられたとなりの公園では「夏季少年武術入門講座」が開かれていて、「ラジオ体操」ならぬ武術訓練が行われていた。おもしろそうなので、ホテルを出て散歩しながら様子をながめた。

ある。

展示館は1階に出土した船底部を展示していて、ちょうど船底の周りを一周しながら2階に行く形になっている。2階には、同時に出土したものが展示してあった。搭載した荷物についていたと思われる荷札などがあった。しかし、何といっても、3重にできている宋代輸送船の船底部分は立派なものだ。中国の各時代における人的物的移動の状況を考える際には、海上貿易はもちろんのこと、河川交通の重要性を考慮に入れなければならないと感じた。それほどまで宋代の輸送船は構造的にも優れていた。(写真 4)

15時15分　海外交通史博物館参観

＊車で10分くらいの移動で海外交通史博物館に着いた。少々疲れたせいもあって、1階の「泉州港と古代海上交通陳列館」のみ見学した。展示は比較的きれいであったが、ライトが点灯しないコーナーもあり、よく見えなかった。東晋代の磚と泉州陳氏の墓誌を見た。

東晋時代の磚は、以前に揚州博物館や寧波の天一閣博物館で見たものと同形式のもので、年号が印刻してあった。2点展示。泉州陳氏墓誌は五代のものか。

1階ロビーで小休止した後、書籍販売コーナーを覗いて造船関係の書籍を購入した。そこで向氏が居合わせた女性に泉州市舶司跡の所在地を尋ねたところ、すぐに場所を教えてくれた。ただ、車は入れない上、入口も見つけづらいというので運転手さんに来てもらい、地図で説明してもらった。謝意をいって、泉州市舶司跡の見学に向かった。

16時30分　泉州市舶司跡見学。

＊市舶司とは、唐代から明代まで海港に置かれた官署で、唐代は広州に、宋代には広州・泉州・明州（現在の寧波）・杭州などにおかれていた。そこでは、港に出入りする船舶の管理、貿易商税の徴収、外国商人の管理、専売品の購入などを行っていた。その長官は市舶使といい、初期は知府・知州などが兼任していた、という（『中国歴史大辞典　宋史』）。その後提挙市舶司として専任化していった（『角川世界史辞典』市舶司の項）。南宋末からその任にあったアラブ人蒲寿庚のことはあまりにも有名である。その官署跡を訪ねようというのである。世界史の教科書にも載っている市舶司だが、現在その跡がどうなっているかなどはほとんど記されていないし写真もない。今回訪れることになって大いに期待した。(写真 5・6)

市舶司跡は市内の中心地を通っている中山南路の水門巷口というところにあった。そこに行き着くまでに少々時間がかかった。「水文巷」という横丁に車が入るのが無理そうなので、下車して歩く。退勤時間でもあり、買い物客と住民で混雑していたが、少々歩き「竹街」という道にはいり、そのまま進むと水路があり、「鵲鳥橋」という小さな橋を渡って右折し、水路に沿って歩くと「宋泉州市舶司遺址」と書いてある真新しい石碑が目に入った。その隣には陳列館があった。しかし、決して大きくはない。大体12・3畳くらいのスペースだ。

われわれ 3人が陳列館とその周辺の写真を撮っていると、老人たちが集まってきた。彼らの話によると「陳列館の周辺から表通りの中山南路までが市舶司の敷地跡で、今は何も残っていない。しかし、歴史的に貴重な場所なので市政府に史跡整備の要請をしたが、なかなか支援が得られない。そこで、自分たちで資金を出し合って建物を立て整備をしている。隣は

街の南にある天后宮は、媽祖神を祭った廟。媽祖神は海の神として信仰されているとのことで、かつて海上貿易の拠点として唐代以来栄えた泉州にふさわしい信仰の場といえる。建てられたのは1196（南宋慶元２）年で、現存する媽祖廟としては最古のものだそうだ。媽祖神信仰は、泉州人の海外移住と海外活動の拡大によって各地に広がったようだ。本殿の天后殿は木造建築で、媽祖神像の前の祭壇やその他の装飾品が台湾の信者からの寄付であることが銘文でわかり、民間での台湾との往来の盛んなことがうかがえる。そういえば、厦門の運転手も「今は何でも『開放』の時代。台湾との取引なんて何の問題もないよ」といっていたことを思い出した。（写真 1）

本殿の後方に寝殿と日月池があり、寝殿が泉州閩台関係史博物館になっていたので、一人４元を払って見学した。展示品のなかに「石敢当」が２点ほどあり、沖縄で見たものと同じ様式で、沖縄の風俗が福建地方の風俗と関係の深いことを改めて確認した。

12時　涂門街で昼食。

＊以前、向氏が入ったことがあるという「緑州餐庁」でドライカレーを食した。

13時15分　レストランのすぐ隣の清浄寺見学。

＊清浄寺はイスラム寺院であって、現在でもモスクとして機能している。正門には泉州特産の緑黄岩が使われていた。内部の展示館には泉州の海上貿易の歴史の概略とアラビア人との関係の変遷を展示してあり、この地で没したイスラム教徒の石棺が展示してあった。石棺にはアラビア語が刻まれていたが、アラビア語に不案内な私には判読不能。おそらくコーランの一節か故人の名が記されているのではないだろうか。また、奉天壇跡がある。現在礼拝に使っている施設の入り口には中国語訳（つまり漢字にした）のコーランの数節（例えば「アラーのほかに神はなし」など）が掲げられていた。（写真 2）

14時　開元寺へ移動。開元寺見学

＊開元寺は泉州を代表する寺院で、創建は686（唐垂拱２）年という。五代から宋代に繁栄を極め、125院があったといわれている。ここには２基の五層の石塔が現存しており（東側のものは五代、西側のものは宋代の創建といわれている）、壮観な石塔だった。石塔となったのは、13世紀の修復によるらしい。最初に見たのは甘露戒壇で、釈迦三尊像が安置されていた。中国でも戒壇を持つ寺院は少なく貴重なのだ、と居合わせた老人が語っていた。

甘露戒壇の前方に大雄宝殿があった。殿内には、参拝のためだろうか、年配の婦人たちが集まっていて、それぞれ荷物をもって話に興じている。回廊には物乞いの姿……。「まるで、『一遍上人絵伝』の一場面を見ているようだ」と新井氏が言われたことが印象に残っている。たしかに、そういう風景であった。（写真 3）

大雄宝殿をでて、西塔を見た後、その後方にある古船展覧館を見学する。ここに有名な「宋代古船」が展示されている。この「宋代古船」というのは、1974年泉州湾の后渚港の干潟で発見された、宋代輸送船の船底部分のことなのだが、その船底部分だけで約25メートルもある。この発見は、宋代の造船技術の高さを示す資料として当時大変注目されたもので

重慶でのアジアカップの試合を見ながら食事を取る。

19時30分　部屋に戻り、入浴、就寝。

8月4日（水）

5時30分　起床。

6時20分　朝食（粥・くだもの・野菜炒め）。

7時30分　チェック・アウト。
＊前日に空港までの無料送迎バスがあることを知り、予約をしておいた。8時にホテルを出発するので、余裕をもってロビーで待機。

8時　ホテル出発。

8時30分　空港到着。
＊新井氏は空港に9時半に到着する予定だった。その前に空港内の両替カウンターで換金。8時30分にカウンターの窓口が開いたが、直前に現金を運び込んでいた。その際、ガードマンが自動小銃で武装していて、その辺が日本と違う。

9時40分　新井氏、向氏と合流。
＊ほぼ予定通り合流した。今回の旅行では新井氏のほかに、現在北京大学に留学中の大阪大学院生、向正樹氏が同行した。向氏は元朝時代の海上貿易を研究テーマにしていて、厦門には2回、泉州にも行ったことがあるという。新井氏とは知人を通して知りあったそうだ。中国語も堪能で、今回の見学ではいろいろな面で助けてもらうことになった。また、旅行前の話と違い、ガイドさんと車も手配されていて助かった。
　ガイドの朗曼辰さんは吉林省出身の女性で、旅行会社に就職してから半年という。日本に来たことはないとのことだったが、日本語は驚くほど堪能で、われわれとの会話にはほとんど問題はなかった。中国人の語学のセンスは抜群である、と改めて思う。

9時50分　泉州へ向けて出発。

11時10分　泉州天后宮到着　天后宮見学。
＊空港からワゴン車で高速道路を使い約1時間20分くらいで泉州に入った。泉州は人口約650万人で、中国の都市としては比較的小さいほうだと思う。そのせいか街は落ちついた雰囲気で、印象はよかった。最初に天后宮を訪ねた。

るが、客が集まらないと出ないようで、ほとんど開店休業の状態。しかたなく客引きの喧騒が一段落した後、待っているタクシーを拾ってホテルに向かった。
タクシーの運転手は日本人と見るや「ガイドを紹介する」とか「カラオケしないか」とか次々話しかけてくるが、全部断る。この手のものは危険極まりない。

来る前に、厦門近郊で軍事演習を行っているということを聞いていたので少々心配していたが、来てみると市内には緊張した雰囲気はなかった。現在厦門は経済特区となっていて、南方の貿易拠点である。ここを訪れる日本人は圧倒的に仕事目的の人が多いようだ。

14時　ホテル着。チェック・イン。

＊ホテルは暇日海景大酒店。日本で予約しておいた。一応４つ星。部屋もまあまあきれい。部屋の窓から中庭のプールが見え、中国人の家族が使っていた。部屋に入ってからあちこち電話する。

16時　ホテル周辺を散歩。

＊ホテルは厦門の中心街のやや南にあり、ホテル前の思明南路を北へ行くと中山路に出る。この中山路が厦門一の繁華街である、とガイドブックに書いてあったので、一人で歩いてみることにした。

ちなみに、厦門は漢語では「シャーメン」と発音するが、日本では一般的に「アモイ」という。これは閩南語の音からきているといわれている。

街へ出るとかなり蒸し暑い。小さな書店で安売りをしていたので覗く。その後、日本で言えば「ダイエー」のようなストアに入り、品揃えを見学。食料品のフロアでは、夕方だったのでタイムサービスをしていた。一番人が群がっていたのは小エビの量り売りで、客はそれこそ一1匹ずつ吟味して買っていた。中国人の買い物はいつもシビアである。となりには、生きたカエルが10匹くらいずつ網の袋に入ってつまれていた。もちろん食用である。

ストアを出て、今度は路地に入る。路は比較的細く、ゆるい上り坂になっている。路の左右はヨーロッパ風の２階建てで、テラスがついた建物ばかりだ。路地はやがて右におれて階段になり、降りると表通りに出られた。パリの路地裏と似たような風景だ。

再び出てきた表通りは中山路で、メインストリート。靴屋・ジュエリー店・書店などが軒を連ねる。夏休みのせいか若者でにぎわっていた。

中山路の終わりは海岸沿いに走っている鷺江路にぶつかる。鷺江路を渡ると公園になっていて、対岸のコロンス島へ行く渡し舟の乗り場があった。島端にある鄭成功の巨大な像が見えた。

公園を散歩してからホテルに帰る。かなり汗をかいたので、部屋にもどってすぐシャワーをあびた。

18時　ホテル内で夕食。

＊一人であるし、今後に備えて「お腹に負担の少ないもの」を食べようと、イタリア料理のレストランに入った。パスタは安いが、サラダがかなり高かった（62元）。パスタは33元だった。

中国福建・江西省訪問記

― 厦門・泉州・景徳鎮 ―

教 諭　兼　田　信一郎

中国各地を訪ねるようになってから10年以上になる。しかし、今まで中国南部の沿岸地域といったら寧波くらいまでしか行ったことがなかった。今回初めて福建省の厦門・泉州という開港都市と江西省の景徳鎮を訪ねることになった。

今回の訪問のきっかけは、獨協大学の新井孝重教授からのお誘いによるものである。新井氏は現在、上海の復旦大学で日宋貿易に関する資料の収集に当たられている。夏前に上海から電話をいただき、「帰国前に、日宋貿易の中国側の拠点である泉州・寧波と輸出品である陶磁器の産地景徳鎮などをたずねるが、一緒にどうか」というお誘いを受けた。個人的にはこの夏にどうしても北京に行かねばならない用事があった。また、福建省や景徳鎮は以前から訪れてみたいと思っていた地である。そこで、これを機会に踏査に参加することにした。

行程は、新井氏と厦門で合流して泉州・厦門・景徳鎮をまわり、その後新井氏が寧波に行くために一旦もどることになっていた上海で別れ、単身北京に入ることにした。

以下では、厦門・泉州・景徳鎮の史跡の状況を報告し、あわせてそれぞれの街の様子をレポートすることにしたい。

8月3日（火）

4時　起床。

5時25分　東所沢駅発のリムジンバスで成田空港にむかう。

7時　成田空港着。

9時30分　離陸。

12時45分（現地時間、以下中国時間を記載）厦門空港到着。

＊新井氏と会うのは8月4日だが、あいにく水曜日は日本から厦門行きの直行便がないので、やむなく前日に単身厦門入りすることにした。新井氏とは翌日空港で落ち合う予定だ。

13時30分　タクシーでホテルに向かう。

＊最初『地球の歩き方』にリムジンバスがあると書いてあったので探してみたら、あるにはあ

写真 1-7

写真 1-8

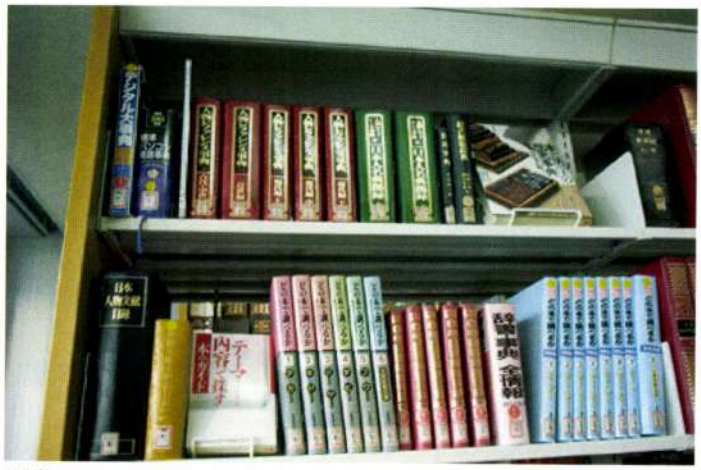


写真 1-9

写真 1-10

写真 1-1

写真 1-2

写真 1-3

写真 1-4

写真 1-5

写真 1-6

H13.5月	全国平均	全国(女)	全国(男)	獨 協
中1	2.6	2.8	2.3	0.7
中2	2.0	2.2	1.7	0.3
中3	1.9	2.2	1.5	0.6
高1	1.1	1.0	1.2	0.3
高2	0.9	1.0	0.7	0.1
高3	1.2	1.3	1.0	0.3
中学平均	2.1	2.4	1.8	0.5
高校平均	1.1	1.1	1.0	0.2

H14.5月	全国平均	全国(女)	全国(男)	獨 協
中1	3.1	3.7	2.5	0.6
中2	2.4	2.8	2.0	0.5
中3	2.0	2.2	1.7	0.4
高1	1.6	1.7	1.5	0.8
高2	1.5	1.4	1.6	0.7
高3	1.3	1.4	1.2	0.2
中学平均	2.5	2.9	2.1	0.5
高校平均	1.5	1.5	1.4	0.5

【参考資料】

- 『ず・ぼん 7』図書館とメディアの本　学校と図書館／非常勤の未来
- 『学校図書館』2003.11　通巻637号　P30 第46回読書調査報告　6）わからないこと、わかりにくいことがあったら、まずどうするか　小学生は「家の人」、中学生は「友だち」に聞く
- 『図書館雑誌』2002.7
  Vol.96, №7 p466「高校生と読書」高橋恵美子
- 『図書館雑誌』2002.9
  Vol.96, №9 p709「大学図書館と学生アルバイト　書架整理業務を中心として」近藤武士
- 『図書館雑誌』2003.6
  Vol.97, №6 p384 「本が読みたくなる環境を」 田中共子
- 『図書館界』March 2002　p526 「学校図書館職員像をめぐって：市民は何を期待し，職員はどう考えてきたか」 宇原郁世
- 『図書館界』September 2002 p137「《座標》司書教諭の発令に注視を」 塩見　昇
- 『図書館界』September 2002 p164「21世紀の学校図書館：宇原郁世「学校図書館職員像」を考える」北村幸子
- 『図書館界』January 2003 p234「「子どもの読書活動推進法」と「子どもの読書活動推進基本計画」」松岡　要

2004.8.16 脱稿

【8.】

・『学校図書館』2000.11 通巻601号 P27 第46回読書調査報告

(4) 本屋に行くか 学校図書館を利用するか 公共図書館を利用するか
読書量が多いと図書館利用も多い

【9.】

・朝日新聞 2004.8.7「be」b3「「いい本」発掘、あの手この手で販売促進 ベストセラーは本屋発」

【平成9～14年5月の、中1～高3男女別「平均読書数」と、「獨協の図書館平均貸出数」対照表】

＊参照文献注：3に記した資料から数値をとって作成した。

＊数字はすべて小数点以下第二位を四捨五入した。しかしこれで男女別の平均値（これを「a」とする）を出し、aを用いて中学・高校の平均値（これを「b」とする）を出すとすると、「b」とSLA発表の中学・高校の平均値（これを「c」とする）が小数点以下プラスマイナス0.1で一致しない場合がでた。これは“読書調査報告”中の、二つの図から本表を作成したためである。利用した図はそれぞれ（“読書調査報告”の年度によって図の表示が多少異なるが)、「a」が「図1－2 5月1か月間の1人当たりの平均読書数」であり、「c」が「図1-1 過去～年分の5月1か月間の平均読書数」である。数値の違いが出た場合、中学・高校の平均値には「c」を用い、本稿表3－2, 3－4で使用したSLAの数値と揃えた。

H9.5月	全国平均	全国(女)	全国(男)	獨 協
中1	2.0	2.7	1.3	1.4
中2	1.5	1.8	1.1	0.1
中3	1.4	1.7	1.0	0.1
高1	1.2	1.1	1.3	0.1
高2	0.9	0.8	1.0	0.1
高3	0.9	0.8	0.9	0.1
中学平均	1.6	2.1	1.1	0.5
高校平均	1.0	0.9	1.1	0.1

H10.5月	全国平均	全国(女)	全国(男)	獨 協
中1	2.2	2.4	2.0	0.9
中2	1.6	2.0	1.2	0.5
中3	1.6	1.8	1.3	0.1
高1	1.1	1.2	1.0	0.3
高2	1.1	1.1	1.0	0.2
高3	1.0	0.9	1.1	0.2
中学平均	1.8	2.1	1.5	0.5
高校平均	1.0	1.1	1.0	0.2

H11.5月	全国平均	全国(女)	全国(男)	獨 協
中1	2.1	2.4	1.7	0.5
中2	1.7	2.0	1.4	0.4
中3	1.6	1.9	1.2	0.4
高1	1.2	1.2	1.2	0.2
高2	1.3	1.6	1.0	0.1
高3	1.3	1.5	1.1	0.2
中学平均	1.7	2.1	1.4	0.4
高校平均	1.3	1.4	1.1	0.2

H12.5月	全国平均	全国(女)	全国(男)	獨 協
中1	2.5	3.2	1.8	0.2
中2	2.2	2.5	1.8	0.3
中3	1.8	2.1	1.4	0.3
高1	1.4	1.5	1.3	0.1
高2	1.2	1.3	1.0	0.2
高3	1.3	1.5	1.1	0.2
中学平均	2.1	2.6	1.7	0.5
高校平均	1.3	1.4	1.1	0.2

・『学校図書館』1997.11 通巻565号 P16 第43回読書調査報告

(1) 読んだ本の量 読んだ本の内容 読まなかった理由　1か月に1冊も読まない者が急増！

・『学校図書館』1998.11 通巻577号 P1 第44回読書調査報告

(1) 読んだ本の量 読んだ本の内容　中学・高校で「不読者」がやや減少

・『学校図書館』1999.11 通巻589号 P16 第45回読書調査報告

(1) 読んだ本の量 読んだ本の内容　小学生の冊数は過去最高

・『学校図書館』2000.11 通巻601号 P16 第46回読書調査報告

(1) 読んだ本の量 読んだ本の内容　小学生の読書冊数は急減

・『学校図書館』2001.11 通巻613号 P16 第47回読書調査報告

(1) 読んだ本の量 読んだ本の内容　小・中・高とも大きな変化なし

・『学校図書館』2002.11 通巻625号 P16 第48回読書調査報告

(1) 読んだ本の量 読んだ本の内容　小・中・高とも読んだ本が急増、不読者は減少

・『学校図書館』2003.11 通巻637号 P16 第49回読書調査報告

(1) 読んだ本の量 読んだ本の内容　平均読書数は上昇傾向が続く

【4.】

・『学校図書館』1997.11 通巻565号 P34 第43回読書調査報告

(4) 学校図書館に行った回数／借りた本の量／読みたい本があるか／あればよいと思う本／行きたいと思う図書館　頼りにされていない学校図書館

【5.】

・『学校図書館』2003.4 通巻630号 P53「統計をもとにした図書館評価」 家城清美

【6.】こちらの学校の生徒1人あたりの年間貸出数は127冊／年（2003年度）であり、1日のカウンター貸出件数は400冊を超えるということである。

・朝日新聞 2004.7.19 13面 12版N

・『学校図書館活用教育ハンドブック こうすれば子どもが育つ学校が変わる』P74「不読者対策月間」 朝暘第一小学校編著 国土社 2003年10月10発行

山形 朝暘第一小学校 貸し出し冊数別人数

年 度	0～49冊	50～99冊	100冊以上	合計人数
平成 7	81	530	155	766
平成 8	69	496	203	768
平成 9	47	483	212	742
平成10	26	403	335	764
平成11	18	384	328	730
平成12	30	370	332	732
平成13	15	382	343	740
平成14	13	246	438	697

【7.】

・少年写真新聞社「図書館教育ニュース」2004.7.8 1023号 P2「書架の間に人影が…③」

伊東由紀子

よって起こる図書館活性化という化学反応をどう引き出すか。私はそれを第1章第2節5.8）の掲示で目指せないかと考えている。「書店組」のなじんだ書店の雰囲気を図書館に持ち込むこと。現在注目される書店主導型の販売戦略【注9.】を見習った図書館掲示のアイディアはまだまだつきないし、書店から大ヒット作品が生まれるようなコメント付ダミー本作戦で、獨協図書館でのヒット作品を年数冊は生み出したいものと考えている。

長い目で見過ぎた、これはもはや不読者対策とは別個の画策かもしれない。しかしである。新鮮な情報の発信源である「書店」と、確立した様式美のある文学の城である「図書館」。その二つがうまく混ざる場、それを持つ人間が上手く混ざり合える場となることができるのならば。「空間」として活気が出ることはもちろん、それ以上にタイプの違う生徒同士で情報の遣り取りが生まれる中、彼ら自身が変わり、成長して行くと思うのだ。あそこに行けば、面白い情報が拾えるかもしれない、という期待を抱かせるような空間に、獨協の学校図書館を今後とも変え続けていきたい。本に興味を持たせること。本以外でも、興味ある外界（知らないジャンルでも、校外の世界でも、未来の自分のあるべき位置でも）にアクセスする何らかの手がかりがえられる場所。それが目指すべき図書館の姿なのだろうと考えている。

不読者対策をはじめとし、獨協は今後、生徒・教諭がどのような図書館像、ひいては自己像を捜し求めていくだろうか。数年で、急成長を遂げつつある獨協であるが、今暫く改革を進め、豊かな学校生活の支えの「空間」となることを常に祈念し努力していきたい。変革期に在籍している今の獨協生たちが、今後校内からでなく、校外から獨協図書館を眺めた際に、「面白い場所であった」と回想してくれる図書館になっていけたらと、この数年そう思っている。

【注】

【1.】本節の文章の概略は、既に以下に文章として発表。

・少年写真新聞社「図書館教育ニュース」2004.2.28 第1011号 P2「書架の間に人影が…①」伊東由紀子

・少年写真新聞社「図書館教育ニュース」2004.6.18 第1021号 P2「書架の間に人影が…②」伊東由紀子

【2.】まだまだ内輪の案ではあるが、以下のような論文（公立図書館の例であるが）も参考に考えていきたい。但し、本校では表2−3などから利用実績が上がっていることは証明されているので、まずは実行あるのみか、とも考えている。

・『図書館界』July 2001 p56「開館時間の延長は効果があったか〜一地区図書館の事例研究〜」田井郁久雄

【3.】第2章の全国数値は、以下からまとめたものである。

・『データに見る今日の学校図書館 '97〜'03』学校図書館白書4　学校図書館協議会編　社団法人全国学校図書館協議会　2004年1月15日発行

表3−7　貸出回数頻度表（2004年度　4.1〜7.31）

回	中学			高校			合計(人)
	1年	2年	3年	1年	2年	3年	
0	20	89	75	114	96	127	521
1	11	21	30	28	18	20	128
2	14	13	29	9	8	1	74
3	7	7	9	5	7	5	40
4	7	10	11	7	6	3	44
5	11	5	7	4	6	2	35
6	8	6	4	8	5	0	31
7	8	6	7	1	7	2	31
8	4	1	1	3	2	0	13
9	8	7	2	1	0	2	20
10	11	0	2	2	1	1	17
11〜20	37	15	18	12	15	9	1.6
21〜30	19	0	4	5	10	3	51
31〜40	14	1	3	0	3	2	23
41〜50	7	4	1	1	2	1	16
51〜100	11	7	2	2	2	0	24
101〜150	1	0	1	0	0	0	2
151〜200	1	0	0	0	0	1	2
201〜250	0	0	0	0	0	0	0
251〜300	1	0	0	0	0	0	1
301〜	0	0	0	0	0	0	0
学年人数	200	204	206	201	189	179	1179
貸出回数	3557冊	1537冊	1112冊	711冊	1017冊	576冊	

長期的展望で考えるならば、学校図書館における不読者（学校図書館で本を借りて読まない生徒）対策としては、私は図書館外で本を読んでいる生徒に対して呼びかけること、彼等に対する図書館からのアピールで図書館におびき寄せることが重要なのではないかと思っている。面白い本は口コミで広がっていく。そこの発信源が、図書館の本であることも、書店の本であることもある。本探しの拠点が図書館である「図書館組」と、書店である「書店組」にわかれる彼等の生態については、学校図書館ニュース第1023号【注7.】にも書かせて頂いているが、書店に行く生徒は図書館にも足を運びやすいとのデータは、「学校図書館」2000.11　第601号【注8.】にも載っていた。

本探し、と考えたときに、図書館だけ、まして学校図書館だけが今時の生徒の全てではありえないだろう。むしろ図書館に足を運ばず書店に通い詰める「書店組」の生徒等の方が、本に対する根源的な直感を働かせ得るレベル（本稿前章で述べている“自分の読みたい本を探せる能力”を有しているレベル、とも言い換えられるか）に至っている場合も多い。彼等良質の「書店組」を学校図書館にどうおびきよせ、「図書館組」とどう合流させるか。両者の出会いに

校図書室長の山田知捷先生には、フェリスの年間貸出数は此処数年３万台であるとの情報を頂いた。正式に統計をとっている資料がみつからず、あくまで聞き及んだ範囲での印象レベルで申し訳ないが、関西でトップをはるには、年間3～4万冊以上の貸出で、関東ならば2～3万冊ということになりそうであった。

このように他校をみていくと、獨協が全国有力校に数えられるにはあともう暫く時間がかかりそうであるが、現在の獨協生ならばその位置を目指せるし、いつか渡り合えるようになるのではないかと考えはじめている。学校図書館は、校内に比較対照する場所を持つことが出来ない。自己評価•批判も、全て他校との比較になっていかざるを得ない。したがって図書館運営を全うしようとしたのなら、学校図書館は、校内で最も対外的に開けた場所にならざるを得ないといえる。外部で得た情報を、どこまでどうやって校内に還元できるのか。それが今後の学校図書館の課題の一つとなるだろう。

続いて最後に残り一つの問題の比較に移りたい。「不読者数」の問題である。以下の表は、同志社女子中学・高等学校 司書教諭の家城清美先生の案からなる不読者を把握するための表【注5.】を元に作成したデータ（表末の「貸出回数」欄のみ加えさせて頂いた）である。他校のデータがおそらく手に入らないため、ここで獨協のデータを提示することは、他校に対し、このようなデータを求めているという狼煙を上げたに過ぎないかもしれない。しかし、論文中で家城先生は「図書館活動の総決算ではないが、統計は、活動の評価を客観的に行える資料となり、図書館活動の進展の一助となる。」と述べられている。図書館活動は、果てのない、情報交換と比較の中で、発展していくものでもあると私は考える。現状では未だ存在していないようであるが、私はいま、インターネット上などで各校それぞれが必要とするデータの公表・交換を、全国の学校間で定期的に行える術があればと願っているのであるが、これは数値が全てと考えてのことではない。ただ、校内で閉ざされがちな学校図書館活動評価の進展のためにも、他校との連携を強く望みたいのである。

それでは表３－７をご覧頂きたい。残念ながら、今年度以前の統計がとれない（既卒者のデータを年度毎に抹消してしまっているため）ため、今年の在校生の2004.4.1～7.31までの図書貸出回数を学年別にまとめたもののみの提示となった。これからの未来の獨協生に、「この数値より下にはいかない」という指針にしてもらいたいものである。

中学１年生の０回貸出者の数には、敬意を表したい。また、この不読者という言葉の定義は、本稿では、学校図書館で本を借りて読まない生徒、ということにした。さてこの表３－７に類した表が、小学校のものであるが山形の朝暘第一小学校の実践例として紹介されている【注6.】。朝暘第一小学校著『こうすれば子どもが育つ学校が変わる』によると、「学期末の1ヶ月間は、不読者傾向の子ども一人ひとりへの個別の取組みを担任と連携しておこないます。働きかける対象の子は、貸し出し冊数の少ない子をリストアップするのですが、年ごとに働きかけをしなければならない対象の児童数がどんどん減ってきているのは驚くほどです。」と記述があり、この方法論を、獨協で行えないものかと考えている。

表3−6　中学•高校別、生徒の年間平均貸出冊数（「貸出数」÷「生徒数（600人）」）

年度	1997	1998	1999	2000	2001	2002	2003	2004 4~7月
中学貸出数	1745	2030	2273	2165	3497	3852	8855	6006
平均冊数	2.9	3.4	3.8	3.6	5.8	6.4	14.8	
高校貸出数	459	874	910	899	2202	2829	4610	2304
平均冊数	0.8	1.5	1.5	1.5	3.3	4.7	7.7	

表3−5，3−6は、獨協の過去8年間の、一年間当たりの平均貸出数である。この数値に対する、比較対照校情報は、2004年7月26〜28日に開催された「平成16年度　全国私立中学高等学校　学校研修会」でお会いした親和中学・女子高等学校司書の藤谷美智子先生、関西学院中等部司書教諭 河野隆一先生等から教えて頂いた主に関西で図書貸出が高い学校である。

現在、学校図書館として全国トップクラスの学校の数値はこうなっているようである。

① 親和中学・女子高等学校　【約13.9冊／年】 一日平均131冊貸出

数値は、H16学校図書館研修会資料より。

② 甲南高等学校・中学校　【23冊／年】

数値は http://www.konan.ed.jp/lib/info/Report.html　2004.8.17HPより。

生徒数1,193名　2003年度中1〜高3の年間貸出数26,694冊

こちらの学校の「貸出冊数の推移」をみると、1997年に「5394冊」だったのが2003年度には「27954冊」（生徒・教職員合計）の貸出数となっており、急成長した学校であることがわかる。

③ 関西学院高等部　【46冊？／年】

数値は http://www.kwansei.ac.jp/HS/library/statistics/index.html

2004.8.17HPより。

HP「2003年度資料貸出統計」より、1〜3年生合計が「17805」点であるので、生徒数（400名弱（386名?））で割ると年間40冊以上の平均貸出になる。（生徒数不明で正しくない数値かもしれません。申しわけありません。）

④ 小林（おばやし）聖心女子学院　【46冊／年】

数値は http://www.oby-sacred-heart.ed.jp/ck/ck-top-frm.htm　2004.8.17HPより。

この他にも名前が挙がったのは、「神戸女学院」「同志社国際中学校・高等学校」などの各校であった。

2004年7月の研修時にお会いした親和の藤谷先生からは、「カウンター貸出が1日100冊超えたくらいならまだまだ大丈夫よ」と励ましのお言葉を頂き、また先生から他校のお話をうかがった中での感触では、関西で貸出数が多い学校となると3〜4万台になるという印象をうけた。またこの研修会で関東の他校の状況を質問させていただいたフェリス女学院中学校高等学

表3−4　1997年度（平成9年）5月　図書館平均貸出数比較

	全国平均	全国（女）	全国（男）	獨協H9	獨協H16
中1	0.9	1.2	0.5	1.4	5.1
中2	0.6	0.7	0.4	0.0	1.7
中3	0.5	0.7	0.3	0.1	1.1
高1	0.5	0.4	0.6	0.1	0.8
高2	0.3	0.4	0.2	0.1	1.0
高3	0.4	0.4	0.3	0.1	0.8
中学平均	0.7	0.9	0.4	0.5	2.6
高校平均	0.4	0.4	0.4	0.1	0.9

男女の違いで、平均値には差があるため、両性のデータ【論文P.30に、平成9〜14年5月の、中1〜高3男女別「平均読書数」と、「獨協の図書館平均貸出数」対照表を附した】を並べてみた。こちらの土俵での比較はどうであろうか。ここでの数値を眺めてみると、表3−2で感じたショックは酷く和らぐ。先に述べたが、この1997年以降、図書館貸出数の全国値が発表されていないため、その後の各年の比較をすることができない。しかし、表3−2にみる、全国の平均読書数の数値がさほど変化を見せていないことを考えると、2004年度（平成16年度）現在の獨協生の図書館利用率は、全国と比べてもかなり期待できるものとなっているのではあるまいか。

表3−4、1997年度では、やはり中2の0.0％が悪目立ちしているのだが、この年度は中1の貸出数が高かったため（2002年度までの6年間、全学年を通じてトップの数値であった。）中学平均値は全国と遜色のないものとなっていた。そして2004年度である。獨協の中学・高校のすべての学年の数値が、1997年度の全国男子平均・全国女子平均値を見事にクリアしている。

しかしここで浮かれている場合ではない。

図書館貸出平均値では、おそらく獨協生は全国値をクリアするまでに至っただろう。だがあと二点、全国比較すべき問題が残されている。そのどちらも、一部学校で発表がある他は、公にデータ発表というものがされていない。既に発表しているそれらの学校に続き、まずここで獨協のデータを知らしめようと思うものである。

一つ目の問題は、学校全体での1人当たりの年間平均貸出数である。

表3−5　全校生徒の年間平均貸出冊数（「貸出数」÷「生徒数（1200人）」）

年度	1997	1998	1999	2000	2001	2002	2003	2004 4〜7月
貸出数	2204	2904	3183	3064	5499	6680	13465	8510
平均冊数	1.8	2.4	2.7	2.6	4.6	5.7	11.2	

表3−2　全国5月平均読書数と獨協5月の図書館平均貸出数の比較

年度	1997	1998	1999	2000	2001	2002	2003	2004
獨協・中学	**0.5**	**0.5**	**0.4**	**0.3**	**0.5**	**0.5**	**1.6**	**2.6**
全国・中学	1.6	1.8	1.7	2.1	2.1	2.5	2.8	*
獨協・高校	**0.1**	**0.2**	**0.2**	**0.2**	**0.2**	**0.5**	**0.6**	**0.9**
全国・高校	1.0	10.	1.3	1.3	1.1	1.5	1.3	*

＊SLAの発表は毎年「学校図書館」の11月号で発表されるため、本稿作成時には2004年度のデータが不明であった。

獨協独自で考えれば、この8年間の平均読書数値の飛躍は喜ばしいものがある。中学生で5〜8倍（2000年度が過去8年間で最も低い数値のため）、高校生では9倍もの平均値数の上昇である。

だがしかし、全国を見た場合はどうであろうか。2004年度に突出した獨協中学生の図書館平均貸出数も、2003年度の全国平均には及んでいないのである。しかも、この2004年の中学平均ですら学年別の差異は非常に大きいため、その点も考慮するとまたなんとも言えない気持ちになる。試みに、獨協の各学年別の数値も出してみることにする。表3−3をみていただきたい。1997年の中2などはなんと0.0%の値が出ているのである。

表3−3　獨協5月の図書館平均貸出数　学年別数値

年度	1997	1998	1999	2000	2001	2002	2003	2004
中1	1.4	0.9	0.5	0.2	0.7	0.6	2.5	5.1
中2	0.0	0.5	0.4	0.3	0.3	0.5	1.6	1.7
中3	0.1	0.1	0.4	0.3	0.6	0.4	0.8	1.1
高1	0.1	0.3	0.2	0.1	0.3	0.8	0.7	0.8
高2	0.1	0.2	0.1	0.2	0.1	0.7	0.6	1.0
高3	0.1	0.2	0.2	0.2	0.3	0.2	0.5	0.8
中学男平均	**0.5**	**0.5**	**0.4**	**0.5**	**0.5**	**0.5**	**1.6**	**2.6**
高校男平均	**0.1**	**0.2**	**0.2**	**0.2**	**0.2**	**0.5**	**0.6**	**0.9**

ここまで比較して、暗雲たる気持ちになったのであるが、しかし重要な事実を指摘しておきたい。それは、SLA発表の全国平均値が、あくまで中高生の5月1ヶ月間の読書量を問うものであり、図書館貸出数とはまた別個のものであるということを。そこで、毎年の「学校図書館」11月号のバックナンバーを当たっていたところ、「学校図書館」1997.11 通巻565号【注4.】に、1997年度の学校図書館での貸出回数を調査したデータが載っていた。その後の調査では、この学校図書館貸出数は調査項目に載っていないようであるが、ともかくその数字と獨協とを比較することにしたものが次の表3−4である。

もしれないと思いはじめると、彼等の読書選択の幅が飛躍的に広がるのである。

また獨協は私立であるので、遠方から電車で通学してきている生徒が殆どである。そのため、「電車の中でも読める本、だから文庫で面白い本を紹介して」という生徒の声・要望もよく聞く。第1章第2節4. の中で四つの会話を紹介しているが、それに続いて五つ目の会話として登場するのが「文庫じゃなくてもいいの？ 文庫じゃないと駄目なの？」なのである。

さて。中学に入学して文庫が読めるようになった。そうして今度は高校に上がった頃のことである。次に彼等の興味は文庫からハードカバーの一般書に向きはじめるのである。人気の本、文庫で知った作家の最新刊、文庫でなくてもいいからとにかく自分に似合う本を読みたい。こんな生徒が出はじめる。そうなってくると、彼等は文庫とハードカバー本の両方を読み進めるようになってくるのだ。この両方の形態の本を読めるようになれば、読みたいと思うようになれば、安心して彼等を学校図書館から世間の中に送り出すことが出来るような気がしている。

学校図書館にある文庫は、児童書から一般書へと読書過程がすすむ彼等のステップアップの素材として、とても重要なアイテムだととらえるべきなのである。

第2節　全国の中での、獨協生の未来

獨協図書館の現状をデータからみてきたが、それでは今度は全国の中で獨協がどのような位置にいるのか、本節ではそれを考えていきたい。

全国学校図書館協議会（SLA）が毎日新聞社と組んで調査している、毎年5月1ヶ月間の読書冊数データ【注3.】と比較しながら、獨協の「図書館、平均貸出数」について以下考察していきたい。

それでは始めにSLAのデータと比較するために、1997年からの2004年までの獨協の毎年5月平均貸出数を算出してみよう。

表3－1　獨協5月の図書館平均貸出数

冊＼年度	1997	1998	1999	2000	2001	2002	2003	2004
中　学	308	300	265	178	313	310	978	1570
高　校	52	128	102	96	127	327	364	524
中学・平均貸出数	0.5	0.5	0.4	0.3	0.5	0.5	1.6	2.6
高校・平均貸出数	0.1	0.2	0.2	0.2	0.2	0.5	0.6	0.9

【注】以下本節での表についての注意を述べる
＊：全国学校図書館協議会（SLA）のデータが毎年5月の調査内容であるため、獨協のデータが残っている1997年度の5月の記録から、全国値との比較を行うこととする。
＊：「平均貸出数」の計算方法は「平均貸出数＝5月の貸出数／生徒数（1200人）」である。
＊：年度により多少の変動はあるが、生徒数内訳も、中学→600人、高校→600人で毎年統一して計算した。
＊：本節、表3ナンバーのものはすべて、小数点以下四捨五入で計算している。

この8年間で貸出数は伸びてきているものの、平均値となるとどうだろうか。特に高校生の1997年度～2001年度あたりの数値は恐ろしく低いことがわかる。さてそれでは、獨協生の図書館貸出数と、全国の中高生の1ヶ月の読書量はどれほど違っているのだろうか。

表2−6　2003年度（平成15年度）図書ジャンル別リスト　＊1

	中1	中2	中3	高1	高2	高3	教員	職員	合 計
空白＊2	2	3	4	1	1	2	2	0	15
0 総　記	76	54	30	25	48	10	16	7	266
1 哲　　学	29	75	71	36	48	8	13	4	284
2 歴　　史	122	64	219	30	57	16	36	4	548
3 社会科学	67	31	110	68	41	20	39	0	376
4 自然科学	120	47	222	75	46	41	32	3	586
5 技　　術	225	139	113	29	22	10	13	3	554
6 産　　業	14	16	22	3	2	3	7	0	67
7 芸　　術	288	93	271	110	64	28	49	2	905
8 言　　語	60	14	42	37	113	28	12	2	308
9 文　　学	1138	649	315	430	438	99	218	6	3293
文　　庫	1712	1082	901	1067	911	294	205	14	6186
新書メイン・小計＊3	**43**	**40**	**124**	**59**	**67**	**37**	**72**	**0**	**442**
ブルーバックス	7	16	37	2	2	10	10	0	84
中公新書	1	3	20	12	23	2	15	0	76
講談社現代新書	12	14	33	27	20	12	13	0	131
岩波新書	5	5	8	15	17	12	27	0	89
岩波J新書	18	2	26	3	5	1	7	0	62
その他・小計　＊4	**53**	**96**	**59**	**74**	**85**	**29**	**15**	**1**	**412**
講談社ノベルズ	20	65	17	48	44	21	6	0	221
徳間ノベルズ	0	16	19	0	0	2	0	0	37
ジャンプJノベルズ	8	4	3	14	14	2	0	0	45
カッパノベルズ	0	0	0	0	4	1	3	0	8
ハルキノベルス	0	1	0	0	2	0	0	0	3
集英社ノベルス	0	1	0	1	2	0	0	0	4
白水Uブックス	0	1	4	5	8	0	0	0	18
角川One	0	0	0	0	1	0	0	0	1
平凡社ライブラリー	1	0	0	0	0	0	0	0	1
岩波アクティブ新書	0	0	0	0	0	0	0	1	1
No ノベルズ類	0	0	0	1	1	0	0	0	2
Nonノン・ノベル	0	1	0	0	0	0	0	0	1
KAWADE 夢新書	1	0	0	0	0	0	0	0	1
集英社新書	2	0	3	0	0	1	2	0	8
新潮新書	3	3	1	1	1	0	1	0	10
宝島新書	0	0	1	1	0	0	0	0	2
PHP新書	3	2	1	1	0	0	0	0	7
洋泉社新書 y	0	0	0	1	0	0	0	0	1
B-C	2	0	0	0	0	1	0	0	3
C.novel	0	0	1	1	0	0	0	0	2
C-r	1	0	1	0	0	0	0	0	2
chi	0	2	1	0	0	0	0	0	3
Dos	5	1	0	0	0	0	0	0	6
Joy	0	0	0	1	3	0	1	0	5
Koc	4	1	2	0	0	0	0	0	7
Hes	1	0	0	0	0	0	1	0	2
Kao	0	0	1	0	0	0	1	0	2
Ko⁺	2	0	2	0	0	0	0	0	4
Kos	0	0	1	0	0	0	0	0	1
Sei	0	0	1	0	0	0	0	0	1
Syu	0	0	0	0	0	1	0	0	1
Wa	0	0	0	0	2	0	0	0	2
	3949	**2403**	**2503**	**2044**	**1943**	**625**	**729**	**46**	**14242**

＊1：網掛けは、各学年で尤も貸出数の高かったものにかけてある。
＊2：新図書館移行時のデータ入力ミスで、NDCの入力の未だされていない図書が残っているらしく、その数が出てしまっている。それを「空白」として、現在統計時には処理している。
＊3「新書メイン」：継続図書として、常に図書館で集めているこれら5タイトルの新書は、新書の中でも統計上別扱いしている。
＊4「その他新書類」：＊3の新書と違う新書をここにまとめている。略号は獨協で独自につけている。

6年間の在籍を、中学1年を「1年次」とし、そこから高校3年を「6年次」として計算したものが上の表である。二重の枠組みで囲った中が、現在在校している生徒達の1年次からの貸出記録である。右端の「合計」欄は、2004年7月までに彼等が各学年で借出した図書館の本の総合計数である。

二重枠組みの下、「2004. 3卒」「2003. 3卒」「2002. 3卒」の3項目は、すでに卒業している生徒の記録で、つまり現高校3年生の3代前まで生徒の貸出記録を参考として載せたものである。

現役の在校生達は当然これからも貸出数が伸びるわけであるが、現状の段階で現役の6学年と、既卒の3学年の、計9学年を比べてみるとどうだろうか。特徴を以下に並べる。

① 現役生達は、2004年7月の現段階で中2, 中3, 高1, 高2の4学年の貸出合計数が5,000冊台で並んでいる。
② 現役高校生達は、1年次から2年次にあがる貸出数が落ちているが、現中3は逆に増加し、現中2も増加しそうな勢いを見せている。
③ 2002年3月に卒業している学年は、3年次を除き、学年が上がるごとに貸出数が落ちていた。これは2003年3月に卒業した学年もほぼ同じ（5年次のみ増加）である。
④ 現高2, 3の学年は、その前後の学年と比べると、明らかに中学1年生時の貸出回数が低い。しかしながら、特に現高2に顕著であるが、学年が上がるに連れて増していく数値は見事である。ちなみに、現高3の入学年度が1999年、現高2の入学年度は2000年。

以上より、着実に、学年を重ねるごとに図書館・読書に親しんできていることが窺える現在の獨協生たちだが、では彼等が読んでいるのはどんなジャンルの本であるのだろう。その傾向をはかるため、表2−6では、2003年度のジャンル別の貸出を統計してみた。

網掛けを見てのとおり、何れの学年でも、「文庫」か「文学」の貸出回数が高くなっている。その他、「芸術」の貸出も高くなっているが、これは美術の時間に使う目的で借りていく生徒が多いためである。

ところで「文庫」の貸出が一番になったのは、1988年に文庫が大量に一括購入されたその年からであるが、「文学」、つまりハードカバーの読み物も文庫の次に貸出がされるようになったのはこの1〜2年の傾向にすぎない。

新図書館移転前の獨協の方針では「文庫は自分で買うこと」というものがあったらしいが、学校図書館における文庫の持つ意味合いは非常に深いと私は考える。中学入学時の彼等は、文庫というものに手が伸びない生徒が多いのである。その彼等に対して、（今まで読んでいた本よりも）活字の小さい文庫だけれど、難しいものだけじゃないんだよ、面白いもの、興味深いものが沢山あるんだよと、個人個人に似合った本を、レベルに合わせて順次紹介していくなかで、実際に手に取らせてみる。中学入学時までに彼等が読んでいた本の種類は、「児童書」と呼ばれるハードカバーものが多い。しかし文庫という新しいモノと遭遇し、自分でも読めるか

非常に助かっている。実は今年は図書委員ではないけれど去年そうでした、という生徒など“準図書委員”と呼べるような生徒たちもカウンターに座ってくれている。人の居なくなった時を見計らって、生徒同士、学年を越えてカウンター業務をリレーしてくれている姿には感銘を受ける。更に昨年から、図書主任がカウンターに座り積極的にカウンター業務をこなしてくれるようになったため、第三の司書教諭が存在するようで（非常勤勤務のため、一日あたり二名の司書教諭しか図書館にはいない）ある。この主任、図書委員、どちらの力添えがなくてもカウンター作業は不可能になってきている。

表1－3、2004年度の項目で、図書委員の広報活動について記しているが、ここで委員会活動について触れておきたい。今年は昨年の図書委員会からの引継ぎが素早く徹底して行われたため、現高2たちが4月の頭から下級生達をしっかりと仕込んでくれていて、本の返却作業も今年度は生徒の方から自主的に当番の合間を縫って行うようになっている。獨協図書委員会は、中学生と高校生の両方に委員長がいるということはなく、あくまで高2が役職の全てを担う体制となっている。1997年度当初にはそもそもカウンター当番すら行っていなかった図書委員会だが、2003年度図書委員長が他学との交流・見学を深め、委員会による活動についての下地を立案した。そして実行は下級生に託したわけであるが、それを受けた現在の高2たちは、下級生指導とともに、自分達で図書館外（各階の掲示板等）にも本のお勧めを定期的に貼り出しに行ったり、模造紙作成も自主的に行ってみたいと申し出てきたりと、見違えるように、自分達の手で図書館運営に乗り出してきている。

本の貸出の増加に伴い、図書委員をはじめとする生徒自身の図書館に対する意識の変化が出てきている。自分達でなんとかしなければ、より使いやすい図書館にはならないと思いはじめたのは短時間での大変な意識変革だったといえるだろう。

そんな彼等の読書量の変化を、卒業までの総貸出回数からみるために表2－5を用意した。

表2－5　卒業までの6年間で読む冊数（学年総合）

	1年次	2年次	3年次	4年次	5年次	6年次	合計(途中)
現・中1	3557						3557
現・中2	3949	1537					5486
現・中3	1705	2403	1112				5220
現・高1	1418	1073	2503	711			5705
現・高2	661	556	1074	2044	1071		5352
現・高3	777	661	1523	1225	1943	576	6705
2004.3卒	1076	904	843	1132	1172	623	5750
2003.3卒	1010	617	592	307	561	432	3519
2002.3卒	＊1996年度入学のため、記録無し	174	337	367	321	309	＊1508（2～6年次の合計）

＊網掛けは、2004.4～7のみの数字。

てきた2000年度からの隔年の状況を比べる表を用意した。

表2−3は、図書の貸出時間の変動をしるしたものである。やはりこの四年間で生徒があらゆる時間、とくに午前中にも図書館に足を運んできていることがはっきりと出ている。早朝の貸出に関しては、2002年度から一部ではじまった朝読書の影響をみなす意見もあるだろうが、毎朝の生徒の顔をみていると、どうも朝読書のためだけに図書館に本を借りにきているというよりは、ただ、読み終わった本の次の本を探しに来るむきが強いように感じられている。

次に表2−4は、その年の6月の貸出状況を、日にち別に統計したものである。また、その合計回数を、開館日数で割ることで、一日平均の貸出回数を出してみた。4年間で、7倍近い利用数の変化があることが見てとれる。

本のみの貸出しで、一日平均百冊を超えるようになると、カウンター業務は依然に比べかなり繁雑になってきている。図書委員のカウンター当番は、基本的に昼休みと放課後であるのだが、毎時間の休み時間にも貸し出しが殺到してきたため、当番日・当番時間以外であっても、図書委員が図書館に顔を出して自分の出来得る時間に自主的にカウンターに座ってくれるようになり、

表2−3　6月の時間別 図書貸出回数

時間＼年度	2000	2002	2004
07:00～	0	0	0
08:00～	0	9	410
09:00～	33	86	181
10:00～	37	88	332
11:00～	17	65	129
12:00～	74	110	370
13:00～	52	156	284
14:00～	24	90	59
15:00～	128	232	716
16:00～	33	55	195
17:00～	11	22	116
合　計	409	913	2801

＊網掛けは、各年度で一番貸出しの多い時間帯につけた。

表2−4　6月の図書貸出回数比較

	2000年度 26日間開館	2002年度 25日間開館	2004年度 26日間開館
1日	20	11	158
2日	10	0	137
3日	10	27	115
4日	0	29	100
5日	15	19	96
6日	22	26	0
7日	9	20	109
8日	21	35	97
9日	11	0	125
10日	12	30	122
11日	0	42	125
12日	25	104	114
13日	26	44	0
14日	13	36	146
15日	11	28	106
16日	21	0	105
17日	10	36	87
18日	0	28	92
19日	14	79	90
20日	14	38	0
21日	19	38	84
22日	16	23	116
23日	18	0	82
24日	18	36	114
25日	0	43	96
26日	23	53	85
27日	13	30	0
28日	10	32	95
29日	12	26	119
30日	16	0	86
合　計	409	913	2801
1日平均貸出冊数	16	37	108

＊平均貸出冊数は、小数点以下四捨五入。

表2−2　時間別 図書貸出人数

年度 時間	1996	1997	1998	1999	2000	2001	2002	2003	2004 4〜7月
(96/0時)	65								
07:00〜	0	0	0	0	0	0	0	19	20
08:00〜	0	22	11	26	19	73	65	235	572
09:00〜	55	167	215	201	224	499	536	676	296
10:00〜	121	450	458	395	354	611	635	1184	816
11:00〜	83	215	256	233	284	425	444	793	544
12:00〜	131	380	535	558	499	647	875	1975	759
13:00〜	122	226	248	290	291	525	456	555	578
14:00〜	51	174	229	157	165	316	447	515	158
15:00〜	204	391	560	677	599	917	1007	1608	977
16:00〜	53	123	163	205	120	260	265	518	310
17:00〜	6	54	49	80	36	80	106	176	134
18:00〜	0	0	0	0	0	0	0	1	0
合　計	注 891	2202	2724	2822	2591	4353	4836	8255	5164
貸出回数(表2-1)からのマイナス	0	−2	−180	−361	−473	−1146	−1845	−5216	

＊表2−1，表2−2：獨協中学・高等学校の時間割では、10時30分〜45分までは15分休みとなっていて、他の10分休みより時間が長いため、10時台の貸出数が高くなっている。
＊表2−1，表2−2：網掛けは、各年度で一番貸出回数（人数）が多い時間帯にかけた。

獨協図書館の開館時間は、8：30〜17：30までである。2003年度から8時台の利用者が三桁にのぼったが、これは朝方、護国寺の坂を登ってきた中1が、校門を入って教室に行くまでの間に一休み、そして本を借りていこうか、という動きが出てきたからである。また、その愛くるしさにほだされた私の先輩の司書教諭が、8時には図書館が開いているように早朝出勤を開始。正式に8時開館になったわけではないのだが、2004年現在では、口コミで「図書館は朝から開いている」と認識されたようで、朝から本を借りるために入口前で本を抱えて待っている姿が見受けられるようになってきている。今後は開館時間を正式に8時かそれ以前にするため、司書教諭の出勤を時差出勤とするか、主任との間で話しが持ち上がってきている状態である【注2.】。

表2−1，表2−2の二つの表から一番に注目して頂きたいのは、生徒の増加数ではなく、生徒の在図書館時間帯の広がりである。先に延べたように、本校では来館者数を未だ数えたことがないので、生徒の在図書館時間というものは、図書の貸出の時間帯で推し量るしかないのであるが、それにしても、①朝の利用者の増加、②放課後五時すぎても図書館に人がいる状況、であることが見てとれるようになっただろう。

また、表2−1，表2−2であると、数字が大きくて漠然とした観しか抱けないきらいがあるため、例年貸出数が1位になる6月（例外の年もあるが）一ヶ月間の図書館の状況を比較してみたい。その際、毎年の比較であると、状況の変化がわかりにくくなるため、私が赴任し

第Ⅱ章　データでみる獨協図書館の姿

第１節　獨協生の変化は数値に表れているのか？

表1-1で獨協の姿の紹介をはじめた本稿であるが、この第Ⅱ章では第Ⅰ章第１節に引き続いて、データからみる獨協図書館の側面を更に検討していきたい。表1-1は年度・月別の統計であったが、次の表2-1，2-2は、年度・時間別に統計をとったものである。獨協図書館のシステムはブレインテックの「情報館」であるが、本稿で紹介する表はすべてそこで集計したデータを元にしている。

さてでは以下の表2-1，2-2を同時に見比べながらご覧頂きたい。合計の欄で最初に目につくのは、1996年度と1997年度の貸出回数と貸出人数がほぼ同数であるということだろう。これは、同じ顔ぶれの生徒が、１人１冊、１回１回本を借り出していたということを意味する。１人１冊以上の借り出しがはじめて起こったのは、1997年度の11時台と17時台である。しかし1998年度になると１人２冊以上の同時借り出しが生じるようになったようである。

また年度毎にどの時間帯に貸し出しが多くなるかは定まっているわけではないが、1997年度と2003年度のように、貸し出しの時間帯のピークが、放課後よりも昼休みまでに来るようだと、その年の貸出冊数は大幅にアップする傾向があるようである（1996→1997年度については、表2-1下の【注】を参照のこと）。

表２－１　時間別 図書貸出回数

年度／時間	1996	1997	1998	1999	2000	2001	2002	2003	2004 4～7月
(96/0時)	65								
07:00～	0	0	0	0	0	0	0	44	29
08:00～	0	22	12	35	22	78	78	393	1001
09:00～	55	167	234	220	272	624	766	1087	481
10:00～	121	450	498	449	423	732	888	2025	1353
11:00～	83	216	266	282	361	583	639	1448	1048
12:00～	131	380	573	613	574	815	1173	3222	1293
13:00～	122	226	260	320	335	640	620	896	897
14:00～	51	174	243	169	194	383	628	782	226
15:00～	204	391	592	775	710	1222	1430	2449	1502
16:00～	53	123	173	221	131	324	332	836	469
17:00～	6	55	53	99	42	98	127	282	211
18:00～	0	0	0	0	0	0	0	1	0
合　計	注 891	2204	2904	3183	3064	5499	6681	13465	8510
		+805冊				+2435		+6784	

【注】1996年度は８月以前のデータがない。そのため、1996.3～1997.3の貸出数「891冊」を７ヵ月で割り、そこから１ヵ月平均値を「127冊」と出す。1996.4～７月の４ヵ月をそこから「508冊」と仮定し、1996年度の貸出総数を「891＋508＝1399冊」と推定しておく。

9）本の平置き展示【写真1-8】

ダミー本展示が成果を収めた結果、本そのものも表紙をみせて書架中に展示するように心掛けることになった。先に名前の出た「キハラのイーゼル」であるが、こちらを利用して、本棚・縦一列につき２冊程度の割合で、全書架で本の表紙を見せた展示（これを獨協図書館では“平置き”と呼んでいる）を心掛けている。8）でも述べたフェアでのイーゼル使用だが、実物と並べての展示が、また効果を高めているようである

10）新中学１年生を迎えるための「帯作り」【写真1-9】

2002年度開始の企画。現図書主任（国語教諭）が授業の一貫として、中学1年生の3学期（春休みの宿題の年もあった）に、図書館で本を借り、それに自分で帯をつけてみよう、としたのがはじまり。出来上がった作品は、新年度初頭から図書館の文庫棚の上に展示。

いざ新学期がはじまると、新入生の人気は手作りの帯のついている本に集中。また学年があがり中学２年になった作成者たちも、自分の本が１年生に人気か心配で頻繁に図書館に顔を出すようになった。そして、中1・中2の人だかりが出来るのを見て、上級生が何事かと本を見に来る。一石三鳥ぐらいに美味しい企画となった。

生徒の作品自体も、一般書店ではここまで手の込んだものを作れないだろうと感心するレベルの帯もあり、また、選ぶ本の種類も、大人視線では気の付かないものを持ってきたり（驚くほど硬派なものあるかと思えば、どこにあったのかという発掘本から）するので、非常にこちらも楽しませてもらっている。

2003年度から図書館企画となり、コンクール形式をとって、一学期末に表彰している。

以上のような工夫を重ねてきた結果、獨協図書館は生徒でにぎわう空間に変貌を果たしたと言えるだろう。休み時間毎に図書館に駆け込んでくる生徒多数。新聞・雑誌を読み寛ぐ生徒の姿をよそに、私にとっての昼休み・放課後は、生徒ごと・友達グループごとに、お勧めの本紹介の“書架廻りツアー（現物を手にとって紹介したいため、生徒を連れてぐるぐる書架をめぐる羽目になっている。私はこれをツアーと呼んでいる。）”を行う時間となっている。ツアーの最中に別のグループが次のツアーの申し込みをしたり、関係のない生徒が一つ向こうの書架から耳をそばだてていたり。また、「次が体育の時間なので今借りれないけど、この前みたいなお勧めの本なにかとって置いて」という要望に応えて、テーマによるが大机に本を１人当たり10冊ほど用意しておいたりする時間になっている。

対応する生徒の数が急増した為、2000年度の頃のように、生徒１人の為のお勧め本リストを作成する時間が持てなくなっているのだが、その分、図書館のいたるところに本の紹介文を貼り巡らせ、一冊でも多くの本を紹介していきたいと思っている。

更に、生徒に本を勧める場合、必ず複数の本を紹介することは、当初から変えず気をつけて実行している。3～10冊程度の本を場合場合で提示してみせ、そこからまず生徒が自分で選んでいくということは、“自分の読みたい本を探せる能力”の小さな発現の場になっていると考えるからである。

は“ダミー本”と呼び習わすことになった。当初は例の江戸川乱歩のために作っていたものだったが、試作品ができたときに気づいたのだった。「軽い」し模造紙に貼っていた一枚の紙状態のものより「質感がよい」ということに。

そこでおもむろに怪人二十面相以外の本のダミー本を大量に作りはじめ、今までフェアの掲示に使用していた書架側面にこのダミー本を貼りつけ、そのすぐ下に小さく切った色画用紙に本の紹介文を書き込んだものを貼っていった。このダミー本と色画用紙での本紹介のワンセットは、急速に図書館中に張り巡らされるようになり、2003年の夏休み前には、図書館入口左手側面のガラス壁面一帯に「夏のお勧め本」を200冊近く一挙に展示するまでにいたった。なにしろ軽いものであるから、至る所に貼ることが出来、ただ一枚の紙を貼るよりも四辺がめくれてみすぼらしい感じになったりしないし、なにより適度な厚みが“本”としての現実感を高めるてくれるらしいのだった。

生徒に対して本の紹介をする時は、基本的に本が配架されている現場に行き、現物を手にして紹介する形を取っている。しかし書架まで行って目当ての本が貸出中であることに気づいた時、このダミー本は大いなる力を発揮するのであった。「残念、いまこの本がないけれど、きっとあなたなら好きだと思う。」と言って、たとえ図書館の端から端に移動するとしても、その本のダミー本が貼ってあるところに生徒をそのまま連れていって、ダミー本の表紙を指し示して「この本だからね。覚えておいてね」と言うだけで効果は上がるのである。借りたい本がその場にない時、生徒は「予約をしたら」というこちらの言葉にも「面倒だから」という台詞を返してそのままになってしまう場合が多い。またその時、後で借りるからと言っても書名のみを耳にしていると、記憶に残りにくいのである。その点ダミー本があると、耳でタイトルを聞き、目で表紙の絵柄をチェックできるので、後々自力でその本を借り出していく確立が高くなるのである。

2004年現在は、図書委員会の活動広報活動が活発化し、ガラス壁面は彼等に明け渡す形（委員会作成の模造紙が、一学期に２～３回のペースで貼りかえられている。）になっているが、その他の書架壁面などを利用したダミー本での本紹介は常設で250冊ほどある状態になっている。一般書架側面は、2004年現在、フェアでの掲示利用よりも、このダミー本掲示と、映画のチラシを利用した本の紹介などで常ににぎわう形になっている。

更に2003年度の終わり頃から、小机（もともと電話を置く為の台だったらしい）を３つほど用務員さんにいただいて、人気作家・お勧め本のミニ特集コーナーを作りはじめた。この時にもダミー本はふる活用している。棚の上にダミー本を置く場合は、キハラのイーゼルを使用し、立てかける形をとっている。このイーゼルとセットのダミー本掲示は、フェアでの文庫棚の上での展示などと共に役立っている。

＊本の表紙をスキャナでとりこみダミー本として掲示するに際しては、著作権の関係で一冊毎に出版社に許可申請を出している。現在では申請した3/5の出版社は気持ち良く「以後の使用許可申請はいりません、どうぞお使い下さい」と返答してくれ、のこり2/5の出版社は、使用許可はきちんと出した上で、「以後もその都度ご連絡下さい」という対応になっている。

を置くことによって大人の視線でなくとも、生徒同士の視線を感じるようになったためか、死角となっているあたりの個人机周辺の使い方が丁寧になってきたようなのだ。

閲覧室の机の配置はよく変えていたのだが、そこからはなれて、図書館全体で配置を考えるのもまた興味深いものだとこの件で教えられた気がしたものである。

6）CDのダミーケース作り

一方で図書以外での工夫も行っている。2003年度からは、私の先輩にあたる司書教諭の方の長年の件案だったという、CDのダミーケース作りが完成した。普段はCDにかぶせていて、カウンターで貸し出し手続を取るときに、ケースの側面（輪になっている方）を面に向けて棚に戻すのである。そのケースの側面にはCDのタイトルと請求記号の外、上部に「貸出中」の文字が緑色テープでわかりやすく貼ってある。CDの検索については、タイトル・曲名のいづれからでも生徒用検索PCまたは紙のファイルで調べられるようになっているが、本よりも寧ろ手にとって眺めたいという要求が強いようで、このダミーケースは、探しているCDが貸出中なのかが直ぐに分かると大好評を得ている。

7）図書館の入口に、貸出上位者の名前を貼る

貸出が増え始めた2002年度の終わり頃からはじめた試みである。当初は教諭•生徒ともに、どういう反応を示すのかわからなかったため、図書館の片隅に誰にもいわずひっそりと貼りつけた、貸出上位者のランキングであったが、蓋を開けてみればこれは好評な企画となっていた。本人たちは自分の名前を見つけると嬉しそうにしているし、友達と一緒になって競っている生徒もいる。ランキングに載りたいがために、わざと読みもしない貸出し手続きを取る生徒が出るのではないかと心配するむきもあったが、まれにそのように生徒が出たとしてもこちらが厳しく指導するし、なによりも、多少のごまかしをしたところではランキング上位者にはかなわないと悟ったり、読みもしないのに名前が載ると友達に叩かれたりと、自浄作用が色々と働くようでとくに問題は生じていない。

教諭のほうでも、気づいた頃には生徒が喜ぶ姿を見ていた為か、好意を持って生徒のクラス以外の姿を知る情報源としても見てくれているようである。

8）ダミー本作成【写真1-6】【写真1-7】

2003年度の初頭、獨協図書館にポプラ社の新装版怪人二十面相シリーズが入荷された。新入生向けに一番目立つ位置になる文庫棚の上において置こうということになったのだが、その際、本が貸出中でも、こういう本が図書館にある、ということがわかるように工夫できないものか、と2003年度からの図書館新主任に打診された。そこから生まれたのが、獨協オリジナルであろう、ダミー本である。

作り方は簡単で、学校という場所柄手に入れやすいダンボール箱を解体し、本の表紙サイズより一回り小さ目にカットする。それに、スキャナ（2003年３月、ついに購入希望が叶った）で画像をとりこんだ本の表紙をまきつけてできあがり、である。これを本校で

スト10の統計を取りはじめてからだった。試みにはじめたこちらの画面であるが、とくに宣伝するわけでもなかったのだが、こんな本が人気なのかと画面を前に友達と話している姿を目にするようになった。先月なにも口頭での宣伝活動ができなかったと思っていると、1) 2) で紹介している本がいつのまにかベスト10に入っている…と、それまでの書架を周遊のみしている生徒の姿からは想像できないような変化が生じ出していた。

4) フェア宣伝に一層の努力を【写真1-3】

生徒が図書館に姿を見せはじめていた。図書館入口、閲覧室の検索PC、閲覧室中央の文庫棚。このあたりまでは生徒がすんなりと歩いてくるようになったのだが、しかしその奥の一般書架の間にはなかなか立ち入る様子が無かった。そこで、学期毎にテーマを決めて文庫棚の上で開催していた“フェア”の宣伝に工夫を加えてみた。

図書館外には、月二回発行している図書館だよりの番外編として「図書館だより・フェア特集号」を出してみたり、図書館内においては、これまで使用していなかった一般書架の側面に、フェアに関する宣伝のA4のミニ宣伝特集・チラシのようなものを貼り巡らせたのである。館内の一般書架を一周するとより一層豆知識が増えるように書架掲示はすべて別の物にするなどの努力をした。(現在のフェア展示方法は8) で説明。)

5) 机・椅子の配置に注意する【写真1-4】【写真1-5】

書架壁面に掲示をするようになると、これまで図書館入口などで掲示を眺めていた生徒達が、掲示につられて書架の周辺を歩くようになってきた。そこでチャンスとばかりに、書架側面に椅子を置いてみたところ、生徒はいつのまにか椅子に腰掛けて、傍の書架から取出した本を読みはじめるようになったのである。誰かがいるところまでは、特に警戒せずやってくる生徒達である。図書館最奥に位置する一般書架についても、書架壁面の掲示を眺め、椅子に座り本を読む生徒がで出来たことにより、書架は彼等のテリトリーと認識されたようである。2000年度には人影の全く無かった書架の間だったが、今では生徒の姿があふれかえり、床のカーペットに座り込んで本を広げる生徒も出てきはじめている。

最近の例では2004年度に、図書館入口からみて奥正面、書架列の手前に、生徒用大机(六人掛け)も設置してみた。文庫棚の増設により、閲覧室に置ききれなくなった机の場所の仮安置という程度の気持ちで置いてみたのだが、これが思わぬ効果をもたらした。通常の大机の並ぶ閲覧室とは多少距離がある為か独特の孤立感が楽しめるようで、午前中は高校三年生が勉強するために愛用し、午後は仲間と調べ物をする中学生のお気に入りの机となったのである。これは、書架側面の椅子がもたらすのと同等以上の視覚的効果を与えてくれている。そこに和気藹々とした生徒の姿があるために、他の生徒が安心して書架の間に入っていけるのだ。加えて更に別の効果もあった。本校では図書館の北側に図書館事務室があり、そこから眺めると右奥手、図書館南側(個人机が並んでいる)の書架の奥が実は死角となって、生徒が何をしているのか把握できないという問題があったのだ。教諭による放課後の図書館巡回にも限度があり、悩みの種となっていたのだが、この大机一つ

かと。また、一度でも図書館に足を運んでくれたら、もう一度何度でも図書館に来てみたいと思わせる掲示が常設できないものかと。そこで年度毎に工夫を加えながら、使い勝手のよい掲示・図書館への改革が静かにはじまったのだった。

1）本に関する模造紙掲示を増やす【写真1-1】

はじまりは、2001年新学期の図書部会で、「中1用にオススメ本の紹介をなにかできないものか」と図書部員である教諭から発言があがったことだった。そこで当初は図書館入口に模造紙を貼っていたのだが、生徒の姿が見にくいとの意見も言われた為、図書館入口左手にあるAVコーナーの衝立てとして使用していた移動式黒板に貼るように変更した。また、掲示内容も、新入生の姿が学校の中になじむ頃、今度は上級生向けに新刊案内や人気本の紹介をするなど、一学期に1～2回のペースで貼り替えていくことを心掛けた。はじめは素通りしていた生徒が、掲示が変わっていくことに気づきはじめると、足を止めて眺めてくれるようになったのである。すると、つぎにはその足を止めた生徒を見て、他の生徒が模造紙に気づきはじめるという連鎖が生じはじめた。この連鎖が生まれるまでに、半年から一年の時間が必要だったが、ひとたび「掲示」に意識が向きはじめると、生徒の館内掲示物への注意力は飛躍的にあがり、現在では貼ったその一時間後には誰かがそのことに気づいて立ち読みしているという状況が出来ている。

当初はそのようにたった一枚からはじまった模造紙掲示であるが、次第に図書館入口左手のガラス壁面（教科作成室と、AVコーナーを図書館内と仕切っている）に常時3枚ほどが貼られるようになり、図書館入口付近の掲示は定着していった。（ガラス壁面の現在の使用状況は8）で説明のあるように、図書委員会主導となっている。）

2）本の棚に直接、お勧めの紹介を貼る【写真1-2】

生徒が本を探しているちょうどその時に、側に居てオススメの本を紹介できないことが多かった。そこで特に文庫本の書架について重点的に、小さ目のお勧め本紹介を直接貼っていくことにした。この時心掛けたのは、単にその書架の本の紹介をするのではなく、「この本（作家）が好きなら、きっとこの本も好きでしょう！」と本の選択に繋がりが出るようなものを選ぶことだった。先に出た宗田理さんの“ぼくらシリーズ”の棚には、宮部みゆきさんの『今夜は眠れない』『ステップファザーステップ』や、恩田陸さんの『上と外』など、中1,2年生が主人公で冒険心とユーモアにあふれたものを紹介。またアガサクリスティーの棚だったら、「和製ミステリを読んだことがあるかな。この人のこの作品が出で来たことにより、国内ミステリ読者層が急増したのを知っていますか？ クリスティ好きなら是非一読を」という煽り文句で綾辻行人さんの“館シリーズ”を紹介したり。生徒が次の“自分の知らない本”に手が伸びるような本の紹介の仕方を心掛けた。

3）生徒用検索PCに、先月の人気本（この他CD・DVDなども）ベスト10の発表

1）2）の効果が出てきたと感じたのは、生徒用検索ＰＣに載せている、先月の人気本ベ

んでいく。ただし、それでも人によるが40〜50冊ほどそのジャンルを読み進むと、大抵飽きが生じるらしいのである。そこで、次の段階（レベル）・ジャンルに移行したいという気持ちが出てくるわけであるが、その気持ちを上手く言葉に出せない生徒がいる。もし生徒がそんな状態にあることをキャッチしたらタイミングをはかり、「いまはどんなことが好きなの」と声をかけてみるのである。すると、今まで読んできたジャンルと多少被る別ジャンルの本を読んでみたいと打ち明けるように言ってくれる筈である。そこでこれはと思われる本を必ず複数本、解説付で紹介するようにしている。

ジャンルの移り変わりの時は、本を勧める側と受け取り側に、今までのような確りとした信頼感形が作られていないので、なるべく頻繁に声をかけ、本の紹介を失敗したと思ったら、どこが嫌だったかを更に聴き取ってすかさず次の本、もっと似合うような本を時間をおかずに勧めるべきである。

この時期に対応が遅れたり、失敗続きの本勧めをしていると、生徒は部活などに流れ、図書館に戻ってこなくなる恐れがある。参考までに、この4)の質問で気をつけようと思う対象は、中２の頃の生徒である場合が多い。

さて4)で述べた、一度図書館から離れた生徒のことである。中2になると部活動も忙しくなり、一般に生徒は図書館には来なくなりますよ、と言われていたのだが、中1，中2の頃に1)〜4)の話し掛けを積極的にしていた相手は、一時図書館から姿を消すとしても、高校生になる頃またふらっと図書館に戻ってくるようである。その時の彼等の特徴は、多少なりとも自らの力ですでに化けていること。「誰々のなんとかという作品って、なに」という会話でこちらに話しをふってきて、自分でリスタート位置を決定する。その後その周辺作品に飽きたらまた4)の状態になり、質問を重ねながら付かず離れずで図書館に居つくようになるのだった。この動きは、私が2000年度に獨協にきた際、中１であった、現高２あたりから見られるようになっている。更に付け加えると、高校で図書館に戻ってきた生徒の着目する本が面白いのである。スポーツ系にしろ、文学にしろ、良いものをいいタイミングでこちらに勧めにきてくれる。彼等の勧めた本は、その後下級生の間で人気を博すことが多い。まるでサケが源流に戻ってきて美味しい卵をくれるような気分を味あわせてもらっている。

5．本の紹介、その具体例

さて、生徒との会話という手段で、生徒が何かしら求めようとしている自己像を形成する手伝いが出来たとしても、複数人を同時に相手にするには限界がある。また、こちらはこちらで業務•雑務をかたづけなくてはならず、図書館内に生徒が居るときに必ずしも彼等の相手ができるわけではないという事態が徐々におこってきた。

ここにいたり、図書館内の本の掲示にこれまでとは違った意味で着目するようになったのだった。

私が図書館に居ないときでも、生徒が本を選ぶ助けになるような掲示が作れない物だろう

現段階での読み物の傾向をはかるのに大切な問い。生徒の回答・返事を踏まえ、作家の枠を超えて、似た読後感の本を複数紹介することを基本としている。とにかく会話を続け、生徒が自分の言葉で、自分を語り出すことが出来るようになるまで、話を続けるのである。

2)「どんな気持ちになれる本が好き？」

どんな本が読みたいのかはっきりしない生徒に対し、ハッピーエンドの本が好きなのか、冒険ものが好きなのか、恋愛小説を読みたいのかと、聞いてみること。ジャンルで駄目ならば、本当に「どんな気持ちになりたいか」という一点に絞って本を複数紹介。当たりがあったら教えてね、と言ってうまくいけば次回1)の会話が成立する。

3)「日本の本と外国の本、どっちが好きかな」

友人に言われて気が付いたことであるが、日本純文学を愛読する人には、翻訳物の文体を目にすることが自体耐えられない、という人種が存在するのである。中学生になったら日本のこの文豪のこの作品を、という勧め方をしてしまう教諭・親が経験上知る限りでは多いようである。その方法でも、生徒が幼少期に和物（日本の本：昔話・民話・仏教小説）で育った場合はすんなり移行できるようだが、洋物（外国文学：主に昨今ファンタジーと呼ばれるイギリス児童小説）に親しんできた生徒の場合は異なる。彼等にとって中学生にすすめられがちな本というのは、えてして読書とそのイメージに対する酷い苦痛を与えられものになっているようである。個人的経験と獨協に勤めた経験から述べるならば、洋物で育ったタイプの人は、うまく長じれば和洋どちらもどのジャンルでも読むようになるが、和物で育ったタイプは、和物しか受け付けなくなる傾向が強いようである。

学校図書館は学校という場所柄もあるせいか、教諭に、和物で育った和物系列の読書が得意なタイプの人間が多くみられ（読書指導が国語科中心で行われがちなせいかもあるかと思う）、その為、洋物で育ったタイプの生徒を上手に育て上げることが出来る人材に乏しいように思われる。教諭が勧める本と、生徒が読みたい本の間のギャップ。これについては、両者の距離間を埋める本が必要になる。教諭（大人）側からと生徒側から、互いを理解するために共通点となる本をさがしてそれを共に読めていく作業が必要なのである。それは和物で育ったタイプの生徒を、より和物上手な読者に育てあげる為にも、本来は必要な作業であろう。両者の間を埋める作業の手伝い、それこそ、司書教諭が学校図書館の現場で両者に対して働きかけなければならないことだと考えるのである。

本を媒介に人と人とが理解しあうには、両者が出会ったその時その瞬間に持ちあう2冊だけでは遠く冊数が及ばない。本を勧め合う間柄（お互いを認め合える間柄）になるまでには、互いの距離間を埋める踏み石となる本が必ず数冊は必要になるのである。これは是非、特に大人・教諭に覚えていて欲しいことである。

4)「あなたはどんな人？ いま何に興味を持っているの？」

生徒は一つのジャンルを発見すると、非常な勢いでその関連作品・作家の世界を読み進

この両極が意味することは何なのだろう。

私はこれは“本を読むことが出来るという能力”と、“自分の読みたい本を探せる能力”の違いが現れているのだと考えている。従来、生徒は前者の“本を読むことが出来るという能力”については、小学校・中学受験・学校生活・家庭生活などの中で、「この本を読みなさい」「この本は～歳なら読んでおかなくては」という方法、つまり強制的に本を読まされる、という教えられ方をしているのではないか。しかし他方で“自分の読みたい本を探せる能力”についてはどうだろう。彼等は、どこかでその方法を手に入れてきているのだろうか。

印象的だった生徒の言葉がある。昨年2003年度に耳にし、心に響いた当時高校２年の男子の台詞なのだが、「僕は中学の受験勉強の中で、読まなくてはいけない本は随分読まされてきたけれど、なにか自分では自分に欠けているところがあるような気がするんです。僕は僕のための読書をしてみたい。お勧めの本、ありますか。」と、彼は淡々とこう言ったのだった。非常に、あぁそうなのか、と思うものがあった。また時代は溯るが、2000年度、2001年度に卒業した高校３年生たちが「図書館ってこんなにおもしろいものだと思わなかった。もっと早くから来ればよかった」「本の話を誰かとしたことってなかったんだ」との台詞の数々を残していってくれた。

小学生の頃に読んだ宗田理さんの“ぼくらシリーズ”から一歩も外に出られない生徒がいる。ある出版社の少年向け文庫だけを読む、という生徒がいる。手の届いている範囲の本の「その次」、という発想ないしは手段が彼等には存在していないのである。

これらは、もしかすると全て同じことに端を発しているのではないだろうか。彼等の頭上から、このレベルの本を今すぐ読め、といった指示を出すのではなく、彼等自分が読みたい本はなんなのか、それを彼等の成長速度にあわせて共に考え、一歩先の本を順を追って指ししめす人間がいなくてはならないのではないだろうか。生徒がいま直ぐにも必要としているのは、“自分の読みたい本を探せる能力”を育ててくれる人間なのではないかと私は考えたのだった。

自分が読みたい本とそれの持つ世界観。それはとりもなおさず、生徒がこれからの自分に必要と思っている世界観に重なる場合がある。ならば“自分の読みたい本を探せる能力”とは、“これからなりたい自分を自分で見つけ出すことの出来る能力”につながっていくと考えられないだろうか。学校図書館はその能力を育む場所となるべきではないのだろうか。

ならば図書館はその自己を探求する彼等にどう対応していけるだろう。そう考えたとき、図書館における私の立場はこう決まった。“貴方が読みたい本を自分で見つけられようになるまで、手伝う”ということ。そのためにすべての活動を行っていこうと決心した。

4. 生徒との会話例

そこでこれまで以上に本をはさんだ会話に気をつけるようになった。以下に代表的な会話例を４点まとめてみた。

1)「今まで読んできて好きだった本は？」

かり、ある程度親くなったらば、彼の為のお勧め本リスト――例えば、「～君を泣かせるための本ベスト20」――などを作成し手渡してみる…といった行動を各個人に対して繰返して行ってみた。

実際に生徒に対して積極的に会話を持ちかけて知ったのは、「あなただったらこんな本が好きなんじゃないかな」「その作家の別シリーズ知っている？」という程度の本を挟んだ会話・本の紹介すら、生徒はこれまでに受けたことがないということであった。そのためか、素直に貸出手続きをとっては最後まできちんと読んできて、感想を伝えてくれるようになった。更には当初不審そうにお勧め本を手にしていた生徒も、彼にとってヒットとなる本を何冊か紹介できると、こちらの姿をみつけては、それまでの無表情を一変して、笑顔をみせて「次のお勧め本は？」と声をかけてくれるようになったのである。

また、生徒に対して「司書教諭の伊東です、どうぞよろしくね」と言ってみても、生徒は教壇に立たない人間を教師とはなかなか見なさず、学校内における気楽な会話の相手として認識する傾向も確かにあった。その目的で図書館に通う者も出てきたのだが、そのような生徒よりもむしろ本を探しに来る生徒を優先に（「あ、～君だ。ちょっと本の紹介するからあなたの相手はできないの、ごめんなさい」などと）対応していると、教師して認める認めないかはともかく、大人として、一個人として認めはじめてくれ、次第に態度は変えてきてくれたようである。そして、私が彼にとっての同級生・後輩に本を勧めるのを目にしたり耳にしたりしているうちに、つられて本を借りていく生徒が出てきた。となると、やはりその生徒も同様の経路を辿り、いつのまにか本のために図書館に足を運ぶようになるのであった。

興味深いのは、本を読みはじめる生徒が１人出ると、彼の周りの友達が２～３人、必ず本を読むようになっていくことである。最初は放課後に急いで本を貸出・返却していた友達を待っているだけだったはずが、いつのまにか本を借りる立場となって、自分１人でも図書館に足を向けるようになっていた…というのはよくあることで、図書館の人影は次第に増えていったのである。

その頃、そんな彼等の姿を見ているうちに、ある行動が目につくようになっていた。よく図書館を利用し、よく本を読んでいる生徒はもちろん、そうでない生徒はなおさら、無意味に書架の間を歩いては、何も借りず、何も喋らず立ち去っていくことがままあったのである。そうしてその行動が何を意味するのかにある日気づいたのだった。生徒が自分の読みたい本を見つけられないでいる、ということに。

3. “本を読むことが出来るという能力”と、“自分の読みたい本を探せる能力”の違い

衝撃の事実であった。本を読むことが好きな生徒であっても、自主的に本を選ぶとなると多くの場合、何を手に取ったらいいのかわからないでいるのだった。しかし一方で私は、本の紹介をしていく中、まるで金の鉱脈を発見したかのように生徒の目つきが変わる瞬間も目にしてきていた。生徒は、自分の好きな本・作家に出会うことができさえすれば、あとはその鉱脈をたどって生き生きと自在にその作品・作家の世界を渡って行くことができるのだという側面も、私は知るに至っていたのだった。

表1－1，1－4はともに、実際に図書館で本をかりた生徒の動向しか提示していないわけであるが、それでも図書館に生徒が流れてきている様子は示されている。図書館来館者数というものを、本校ではカウントしていないのだが、実際に図書館にいて変化を目の当たりにしている者としては、貸出数の増加よりも人影の無かった図書館に大量の生徒がなだれ込むようになったこの変化に、驚異の念を抱いている。

そこで次節では、獨協図書館が生徒に親しまれるようになったその経緯・工夫を写真をまじえて説明していくことにしたい。

第2節　“自分の読みたい本を探せる能力”を問う【注1.】

私が本校の図書館に非常勤司書教諭として採用されたのは2000年度であり、司書教諭としては二人目にあたった。着任当初は、人影の無い、待ち合わせだけに使われている空虚な空間、というイメージを受けた獨協図書館であり、蔵書約5万8千冊がまったく活かされていない場所であった。それが4年後の2003年には生徒も図書館自体も生き生きとした活動的な雰囲気を有するようになっていたのであるが、その間、司書教諭として獨協図書館で行っていたのは何だったのか。

それは、生徒に本を通して話し掛けること、それだけであった。

この第2節で書き示す全ては、その会話の発展形である。

1. 獨協図書館の状況を認知

本年で創立121年の歴史を誇る私立男子校の獨協中学・高等学校の図書館であったが、1997年にはじめて司書教諭教諭が非常勤ながらも配置されるまでは、司書というものが図書館にいない学校であった。従って、教諭・生徒が“司書”というイメージすら持っておらず、ましてや“司書教諭”など、という状態であった。各種研修会に参加させて頂いていく中で、各校により図書館の歴史はそれぞれであり、そこで抱える人的問題（司書対司書教諭の問題、教科教諭対司書教諭の問題、…等）は各種様々であることを知った。しかし本校の場合は未だ（2004年度現在）専任の司書教諭が存在していないこともあり、教諭としての地位問題を論じる以前であるとして、まずは対象を生徒に絞った「生徒に利用される学校図書館」「生徒に認知される司書教諭」を目指さなければならないのだと考えるに至った。

2. 2000年度当時の利用者に学ぶ

では肝心の生徒は図書館に対し、どのような態度をとっていたのか。端的に状況を語るのは、生徒が図書館に来ない、ということであっただろう。そこで当時は少数だった図書館に足を運ぶ生徒に対し、彼等になにができるのかということから模索することがはじまった。

図書館に生徒を発見する。まずは挨拶からはじめてみた。生徒にしてみれば、いつのまにか図書館にいるようになった誰かであるので、私の名前を名乗り、次に彼の名前を教えてもらう。その後、カウンターでの所謂“声かけ（返却された本の感想を聞く、次の本を紹介するなど）”はもちろん心掛け、折を見つけては会話を持ち、そのなかで彼の好みの傾向をは

て非常に大きな問題となった。連絡を密にして対応はしているが、生徒指導の面などで問題の克服にはなかなか至っていない。

＊3：獨協図書館は「情報センター」としてPC室と共同の部署となっているが、本校では主に図書館としての動きに焦点をあてて論じるため、PC室インストラクターの方の変遷はここに提示しなかった。1996年から2004年まで4名の方が入れ替わりながらPC室運営を（1人で）行っている。

＊4：1997～2004年度までにa～d司書教諭が計4名在籍している。週四日勤務で、教科教諭としての兼任は無し。

＊5：30年前の司書教諭は、採用は司書教諭であったが、その後社会科教諭として教科に移動したとのこと。

表1－3だけでみると、2001年度と2003年度の特徴は、「館内掲示」に力を入れた、または内容に変化が生じた年であることがわかる。人的側面からみると司書教諭が新たに配置された翌年に効果が出ているということも見逃せないポイントになっていると考える。掲示物がある程度即効性の力をもっている（第Ⅰ章第2節5.1）で述べるが、“即効性”という言葉が使えるようになるまでにはそれなりの下準備の期間が必要である。）とすると、図書館における人的な価値が表層にあらわれには、一年ほどの時間が必要ということだろう。

またこの他に、表1－1，1－3からはうかがえない図書館の変化がある。

実は表1－1では「生徒貸出冊数」として図書貸出の冊数（回数）の数字を並べているが、この他に「生徒貸出人数」を調べた表もデータとして作成している。こちらも詳しい表は第Ⅱ章で後述するとするが、表1－1に対応する形で簡単に合計数だけを記したものが表1－4である。

表1－4　生徒図書貸出し人数

図　書	1996年度	1997年度	1998年度	1999年度	2000年度	2001年度	2002年度	2003年度	2004年度 4～7月
合計(人)	891	2202	2724	2822	2591	4353	4836	8255	8510
		+522人	+98	−231	+1762	+483	+3419		

＊1996年8月以前はデータ無し。よって1996年度は1996.9～1997.3までの記録。

更に表1－2対応する形で、表1－4から貸出人数の増加をパーセントで示したのが表1－5となる。

表1－5からは、表1－2と同様に2001年度と2003年度の飛躍が見て取れるのだが、それよりも表1－4での2001年度の貸出人数合計をご覧頂きたい。本の貸出数ではなく、貸出人数が（延べ人数ではあるが）驚異的に増加したことが見て取れるだろう。

表1－5

1997→1998年度	124％
1998→1999年度	104％
1999→2000年度	92％
2000→2001年度	168％
2001→2002年度	111％
2002→2003年度	171％

年 度	図書館業務従事者変遷（＊1,＊2,＊3）	出　来　事	非常勤司書教諭情報補足（＊4）
2003（平成15）	司書教諭 a（非常勤） 司書教諭 b（非常勤） 司書教諭 c（非常勤）	・１人５冊貸出二週間スタート ・閲覧室書架増設 ・ダミー本（本校オリジナル掲示例）展示並びに掲示スタート。キハラのイーゼルを使用した本の表紙をみせる展示方法のはじまり。 ・掲示に、映画関係（原作などとリンクしての紹介）が加わる。 ・朝読書…中１，中3 ・朝８：00から中１が図書館に顔を出しはじめる。 ・AV室で、全席DVD視聴可能に。 ・2003年８月に、全国私立中学高等学校学校図書館研修会・見学校として紹介される。 ・貸出カウンターに、教科教諭が座ってくれる日が出てくる。 ・本年度後半より、図書部会にPC室インストラクター参加可能に。 ・英語の多読対策として、ペーパーバックなどを大量に購入。以下購入継続中。 ・図書委員会による、他校見学・交流が活発化。2004年３月までに、生徒同士で、次年度の図書役員への方針説明及び引き継ぎが自主的に完了。	＊これに伴い、司書教諭 a がボランティアで早朝出勤、開館をはじめる。 ＊ここで獨協を知った他校の先生から、多くの図書館見学の申し込みを頂くようになった。
2004（平成16）	司書教諭 a（非常勤） 司書教諭 b（非常勤） 司書教諭 d（非常勤）	・司書教諭メンバー変更（c → d）。 ・文庫棚増設 ・図書委員会による広報活動活発化（第２章第１節、表２－４後に説明あり）。 ・朝読書…中1，中2，高1 ・朝の来館者数が飛躍的に増加中。 ・中3の卒業論文作成に関して、各クラス一時間のガイダンス（NDCの説明・レファレンス体験など）を司書教諭が図書館で行う。授業時間を貫えた記念すべき初の機会。	d 教科免許：国語

＊1：事務職の方は司書の資格を有していなかったが、2000年度で退職された方が長年図書館勤務していたため、司書補の身分は与えられていた。

＊2：2002年度からは、非常勤司書教諭３名の勤務体制になったわけであるが、週４日勤務のため、実質1日あたり２人の司書教諭しか図書館に出勤してきていないという実状である。またそのことは、週を通して必ず同じ人間が図書館の出来事を把握していたという、2001年度までの事務職の方が担っていた下さった“記憶の連続性”が途切れたことも意味し、この欠落は残された司書教諭にとっ

年 度	図書館業務 従事者変遷 (＊1,＊2,＊3)	出　来　事	非常勤司書教論情報補足 (＊4)
1998 (平成10)	事務２名 司書教論ａ(非常勤)	・文庫本大量購入 ・学期毎のフェア開始	**ａ教科免許：ドイツ語** **ａ司書資格有**
1999 (平成11)	事務２名 司書教論ａ(非常勤)		＊司書教論ａの手により、「図書館だより」の発行、「博物館めぐり」紹介、新書揃えからフェア開催まで、獨協の基礎部分が形成されている。
2000 (平成12)	事務１名 司書教論ａ(非常勤) 司書教論ｂ(非常勤)	・事務１名、司書教論２名体制に。 ・映像資料にDVDが加わる。 ・AVルームにDVD視聴可能２台用意 ・『新刊全点案内』での選書方法変化。各教科の教科教論が希望本に付箋をつけつつ、雑誌を閲覧。それをもとに図書館主任が最終的に月ごとに購入図書を決定するスタイルに。 ・司書教論ａ・ｂ、図書選定に参加。 ・図書館内の蛍光燈を増設	ｂ教科免許：国語 ｂ司書資格有
2001 (平成13)	事務１名 司書教論ａ(非常勤) 司書教論ｂ(非常勤)	・新中１対策に、館内掲示を細々と開始。 ・図書館主体で、中学３年生の卒業制作のための調べ学習の手引き「モノの調べ方」を作成。以後、年度毎にバージョンアップを計り続けている。	
2002 (平成14)	司書教論ａ(非常勤) 司書教論ｂ(非常勤) 司書教論ｃ(非常勤)	・司書教論３名体制に。 ・図書館内の掲示活動活発化 ・朝読書スタート…中1，中2のみ。 ・帯づくりコンクール開始。当初は国語（現主任）の授業での取り組みだったが、翌年から図書館主催のコンクール形式となる。 ・書架配列の見直し。開館当初、“中学生コーナー”と“高校生コーナー”に別れて配置されていた書籍を一括配列に変更。 ・昨年度作成の「モノの作り方」を、中３の卒業論文作成ガイダンスで使用。2002, 2003両年は、小講堂に中３を一括で集め、一時間司書教論が説明するスタイル。	＊司書教論並びにPC室インストラクターを、「先生」と呼ぶことに決定したと、主任から伝達有り。 ｃ教科免許：社会 ｃ司書資格有

データから読み解く図書館利用の変遷については、第Ⅱ章で詳しく述べるが、この表1－1は、1996年9月からの生徒の図書貸出数をまとめたものである。数字だけで見た場合、2003年度の飛躍が目にとまりやすいと思われるが、実は前年度比で考えた場合、最初に大きな変化を見せたのは2001年度なのである。

表1－2

1997→1998年度	132％
1998→1999年度	108％
1999→2000年度	96％
2000→2001年度	179％
2001→2002年度	121％
2002→2003年度	202％

次年度の貸出数を前年度と比較した場合（小数点以下第三位四捨五入）、突出して貸出数が伸びたのは、表1－2より2001年度と2003年度であることがわかる。2004年度も、貸出数は順調に伸びており、年度末にはおそらく2万冊を越えると予測されているが、仮に2万の貸出数としても、2003→2004年度は149％であり、約180％以上の伸び率を記録した2001年度と2003年度の両年には及ばないと思われる。

では、この2001年度と2003年度には、獨協図書館に何が起こっていたのか。まずは年度を追って、図書館の変遷を眺めてみることにしたい。

表1－3　獨協新図書館の歩み

年度	図書館業務従事者変遷（＊1,＊2,＊3）	出来事	非常勤司書教諭情報補足（＊4）
1996（平成8）	事務2名	・新図書館完成（558.31㎡） ・教科教諭6名（内1名が図書主任）、事務2名、PC室のインストラクター1名（派遣）で、図書館とPC室は「情報センター」という共同の組織にまとめられる。 ・情報センター部会は週一度、教科教諭のみでのスタートだった。 ・8：30～5：30開館 ・1人3冊二週間貸出 ・『新刊全点案内』による新刊本の選書開始。ただし1名の教諭による選書。	
1997（平成9）	事務2名 司書教諭a（非常勤）	・司書教諭が30年ぶりに（＊5）配置される。 ・図書館だより開始 ・夏のお勧め本紹介開始 ・図書委員にカウンター業務につくよう、司書教諭a指導。委員会活動はその後暫く（文化祭以外）カウンター当番のみ。ただし徹底できず。 ・司書教諭a図書部会参加。	a教科免許：独逸語 a司書資格有 a学芸員資格有

人気（ひとけ）のない図書館からの脱却

非常勤司書教諭　伊 東 由紀子

第Ⅰ章　書架の間が生徒で賑わうまで

第１節　ありえないと言われた図書貸出数はどこからやってきたのか

1996年夏、獨協図書館は学校全体の新校舎への移動の中で、現在の一階に移動。正面玄関からは直線距離に位置し、裏門からは入って即左手に居すという絶好の立地条件をえることになった。またこの時同時に図書館はPC化され、翌1997年には初の司書教諭（非常勤）が配置されることになり、現在の獨協図書館の基礎はこの時期に形作られたといえる。

しかし、生徒の図書館利用という面では、これらの良条件が当初はなかなか機能しなかったようである。まずは以下の表をご覧頂きたい。

表１－１　生徒図書貸出し冊数

図　書	1996年度	1997年度	1998年度	1999年度	2000年度	2001年度	2002年度	2003年度	2004年度
４月		217	310	289	172	334	434	1058	1753
５月		360	428	367	274	440	637	1342	2094
６月		261	476	561	409	626	913	1589	2801
７月		163	190	197	282	334	641	1469	1862
８月	0	7	3	0	0	0	19	2	
９月	188	225	404	538	530	572	693	1333	
10月	210	132	227	215	302	495	554	1052	
11月	155	379	275	362	330	535	697	1027	
12月	58	110	82	119	128	348	261	1061	
１月	163	148	229	242	270	853	603	1299	
２月	100	141	206	224	220	714	678	1403	
３月	20	61	74	69	147	248	550	830	
合計(冊)	894	2204	2904	3183	3064	5499	6680	13465	8510

＋700冊　＋279　－119　＋2435　＋1181　＋6785

＊網掛けは、月比較で、一番貸出数の多かった年度のものにかけてある。

＊1996年８月以前はデータ無し。獨協図書館のPC化は1996年９月より。

＊毎年８月は閉館。2002年度は、二学期の始業式が８月末日にあったため貸出が記録されることになった。

－執　筆　者　紹　介－

柳　本　　博 …… 国語科教諭

伊　東　由紀子 …… 司書教諭（非常勤）

兼　田　信一郎 …… 社会科教諭

紀　要　委　員

兼　田　信一郎　　新　井　洋　一

音　海　紀一郎　　冨　岡　　卓

研究紀要　第21号

平成17年3月19日　発行

発行者　東京都文京区関口3丁目8番1号
　　獨協中学・高等学校　紀要委員会

印刷所　東京都北区王子本町2丁目5番4号
　　株式会社　王文社

Dokkyo Junior & Senior High School Review

No. 21 2005

Contents

Articles :

Dokkyo Junior & Senior High School Drama Club Performance
"Jet Boys at Ground Zero Blastoff"
"Spo-chan"
..... Hiroshi Yanagimoto ... 1

A Report on Practical Educational Experience
The Revitalization of the School Library
..... Yukiko Ito ... (1)

A Report on Kaneda's Field Work in the Districts of
Fujian and Jiangxi in China
..... Shinichiro Kaneda ... (35)

Edited by

Dokkyo Junior & Senior High School Review Committee

Address : Dokkyo Junior & Senior High School

3-8-1, Sekiguchi, Bunkyo-ku, Tokyo 112-0014